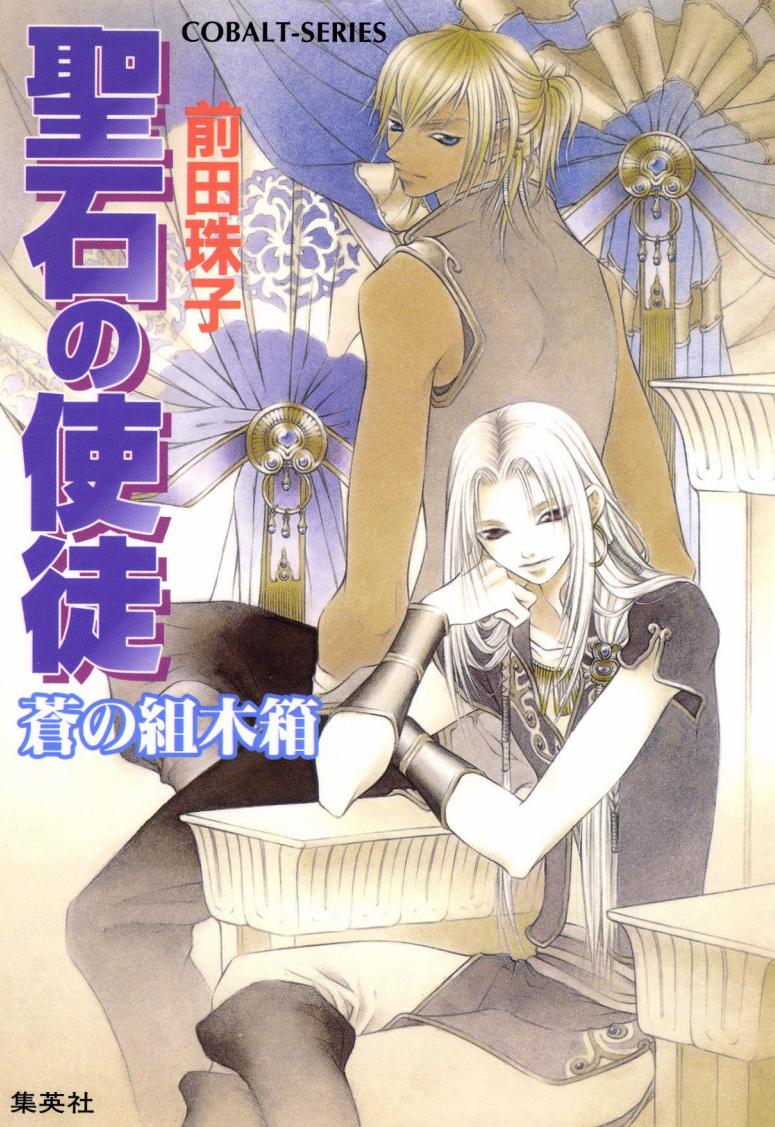

COBALT-SERIES
前田珠子
聖石の使徒
蒼の組木箱
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

蒼の組木箱

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

蒼の組木箱

前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
蒼の組木箱
蒼の組木箱……7
あとがき……205

聖石の使徒■登場人物紹介



ナウルニール
青玉の使徒。純白の髪と鳩の血色の瞳を持つ青年。

トリノアーク
紅玉の使徒。矢車菊の色の瞳と褐色の肌を持つ長身の青年。


姫刀自
琥珀の子供で、盗まれた聖石の持ち主。自分を迷子だというが…？
ファヴラン
不思議な勘を頼りに、隠し財産や遺産を探し出す探索人として仕事をする少年。その力を買われ、『迷わずの森』を案内することになるが…。

イラスト／山本鳥尾

蒼の組木箱



プロローグ

かつて、彷徨う民を導き、ひとりの男が森に足を踏み入れ、誓願を立てた。
そこは創世のときより続いてきた古く深き森――。
女神の厚き加護を受け、その息吹を強く残す地であればこそと、男はその森を選んだ。
彼が願うは民人の安全な暮らしのみ。
ゆえに彼は森に願った――追手から民を守り給え、と。
森は……大地は、最初、この無礼な侵入者たちの頭目の言い分など聞き届けてやるつもりはなかった。
人間というものは、数が増えるにつれどこまでも利己的に身勝手に振る舞うようになる生き物だと学習して久しかったせいでもある。
豊かさを求め、彼らは際限なく木を切り倒す。
住居や暖を取るためであれば、まだかろうじて理解もできるが、彼らは一度得た豊かさに満足するということを知らない。
さらに、さらにと求めつづける。

そうして消え、畑と変えられた森がいくつあったろう。
木々や緑の上げた悲鳴は、彼らの傲慢な耳には届かない。
奪うだけ奪い、その自覚さえ持てぬ輩に森はすでに絶望していた。
だから。
身内争いがもとで、彼らが森に入ってきたときも、助けてやる気など起きなかった。
身勝手で我が儘な人間を、なぜ庇い守ってやらねばならないというのか。
好きに争えばいいのだ。そうして勝手に数を減らせばいいのだ、と森は思った。
招かれてもおらぬ身で、勝手に押し入ってきた者どもがどうなろうと知ったことではない、と――。
勝手に殺し合えばいい、勝手に死ねばいい――少なくともその軀は、森を、緑を養う糧となる。
もはや――人間などに心を砕くつもりがなくなっていた森は、心からそう思っていた。
気が変わったのは、民人を導く男が、原初以来の、自然や世界を敬う心を当たり前に持って生まれ、いまもなおそれを持ち続けている人間であることを知ったからだ。
だから――森は、男に声をかけることにした。
――我が懐深くに入りこみ、其方はなにを試みる？
「ただ民の安全と、追われる恐怖なき日々の暮らしを」
男は答えた。

だが、森には信じられなかった。
嘲りも露に男の心を押しつぶそうとした。
——笑止。安定した暮らしとやらのために、其方らはたやすく我等を忘れ、心から消し去る。ひとの心がさように弱く脆いのは、確かにひとのせいではなかろうが、それに引きずられ、傷つけられる筋合いは我にはない。
だから、疾く去れ、と命じた。
聞かぬようなら排除するという警告をこめて。
だが、男は去らなかった。
決して森を害したりはしないと、民にも未来永劫させないと、本来ならばあてにもならない誓約を自ら申し出てきた。
そうしてその誓約の証——あるいは形代として差し出されたものを知ったとき、森はもう一度だけ……その男の言葉だけは、信じてみようかという気になった。
男が求めたのは森——否、その地を支配する、あらゆる気による守護だった。
彼を慕い、彼が率いてきた民とその子孫に対する。
同時にひとの、より豊かさを得たいと欲する欲望ゆえの、森への蹂躙は決して許さぬということを、言霊に誓った。
「質には我の半身を……」
言いかけた男は思いなおしたように表情を改め、こう言いなおした。

「質となる価値を認めていただけるのなら、我と我が子孫……末代に至るまでのその半身を森に捧げよう」

それは祈願か、あるいは契約か。

ともあれ森は男に応じた。

――よかろう。

と――。

あくまで言霊による『約束』に則った形で、男は民人の安全を手に入れた。

ただし、それは多くの制約を伴うものだった。

男と民人は、森を害することなく術を見いだし、実践せねばならなかった。もし、男、もしくはその民人が、禁を犯し、誓いを破れば、両者ともただではおかぬ、と――。

譲歩を認めぬ響きを以て、森は宣じた。

男はしかし怯むことなくうなずいた。

必ずや、森を害さず共存する道を見いだす、と。

――期待している。

と、森は答えた。

そこにどんな思いがこめられていたのか――いまではもう誰にも知りようがない。

古い……古すぎる誓約は、文字として残されることはなく、ただ男とその民と……やがて生まれたその血を受け継ぐ者たちの心にのみ刻まれたものだったからである。

1

バルヴァローズ七大陸のひとつ、樹翁（じゅおう）――。
その東南に位置する蒼炎（そうえん）の首都、雅夜（がや）の下町を疾走する少年がいた。
継ぎだらけの上下に粗末な木靴という身なりからして、彼がこの街の住人であることは間違いなさそうだった。
ふんだんに生地を用いた衣服が特徴の樹翁にあって、体の線がわかるような服を身につけるのは、他大陸からの客か、特殊な職にある者か、あるいは貧困層（ひんこんそう）のそれに限られるからである。
他大陸からの旅行者というには、その身なりは貧相すぎたし、肌（はだ）の露出（ろしゅつ）や体の線を見せつけることで己（おのれ）が魅力を見せつける職種についている者にしては……あまりにも色気がない。
なにより彼が走っている場所が問題だった。
そこは、雅夜の北区――雅夜中最も貧しいとされる区域だった。
春とはいえ、まだ肌寒（はださむ）さを感じる街を、彼は一所懸命に走っていた。
右手にはしっかりと、小さな布袋が握りしめられている。

（早く……早く行かないと……）

いまいち寸法の合わない木靴のせいで、何度か転びかけては根性で踏みとどまり、そうしてまた走り出すということを繰り返す少年――ファヴランの額には汗が浮かび、黒い巻き毛はぺったりと張りついていた。

それもそのはず、ファヴランは雅夜の南区からずっと、走り詰めなのだ。

（大家がくる……大家がくる……！　ああぁぁ、あの客が現金で払ってくれたら、こんな面倒なことにはならなかったのに……！）

歯ぎしりしたくなる思いだったが、はっきり言って、そんな暇も惜しい。

一刻も早く部屋に戻り、怒鳴りこんでくるであろう大家に三カ月滞納した家賃を払わねばならないのだ。

今日支払えなければ追い出すと、きつく言われている以上、休んでなどいられない。

本来なら三日前には帰って来られるはずだったのだ。それが、依頼人の思わぬ怪我で日程がずれてしまい、雅夜に着いたのは昨夜の深夜。当然ながら街門は閉じており、門の外で一夜を過ごす羽目になってしまった。

朝一番で街に入れたはいいが、今度は報酬の件で依頼人と多少揉めてしまった。ファヴランが案内した先に、客が期待したほどのお宝がなかったせいだ。

父親が残した隠し遺産を当てにしていたらしい客は、いかにこの遠出が大変なだけで益のないものだったかをさんざん愚痴り、文句を垂れ――なにがあろうと同行すると言い張ったのは

自分のくせにである——期待したほどのお宝がなかったのはファヴランのせいだと責任転嫁した挙句、最初に取り決めておいた案内料を、値切りに値切った上、さらに最悪なことに現金で支払ってくれなかったのだ！

貰えたのは、親指の先ほどの大きさの、飴色の石。

鑑定眼とはいえないものの、以前培われた経験のおかげで、真贋の見極めだけはできるファヴランは、それが琥珀と呼ばれる石であることがわかったから、仕方なしに受け取った。

本当は「話が違うじゃないか！」と大騒ぎして、なにがなんでも現金で報酬を受け取りたかったところだが、かりかりして余裕のないこと一目瞭然の依頼主を、それ以上刺激したところで、その琥珀以上の報酬を得られるとはとても思えなかったからである。

下手にごねたら、八つ当たりもかねて、全責任を負わせられ、怪我のおまけつきで放り出される可能性大と見て取り、渋々引き下がった……というか、そうせざるを得なかったわけだが……それにしても。

（あー、全く、ひどい客に当たったもんだぜ）

朝からの出来事を思い出しながら、ファヴランは舌打ちする。

報酬は貰ったものの、現金でしか支払いを認めない大家のせいで、店が開くのを待って質屋に飛びこみ、なんとか現金化はしたものの、なんのかんのと時間がかかって、店を出たときには、もう昼を過ぎていた。

南区から北区まで、直線距離なら徒歩で一時半といったところだが、警邏隊に見つからない

よう道を選ぶとなると、その倍の遠回りになる。
いくら後ろ暗いところがなかろうと、ファヴランの身なりと現在の所持金額――面倒をかけてはくれたが、依頼主から報酬として渡された石は、それなりの金額にはなったのだ――との間には、他者が不審を抱くに足るだけの格差があるのだから仕方ない。
自分の特技で稼いだにも拘わらず、ファヴランは過去何度か、警邏隊員の不審を買い、時間を無駄にさせられたことがある。タチの悪い連中に引っかかった際には、財布ごと巻き上げられたことさえある。
必死に取り返そうとしたけれど、腕っぷしだけは強いらしい隊員に鳩尾を殴られて、三日というものろくにものも食べられない羽目に陥ったこともある。
犬猫だとて学習するわけであり、さらに言うなら人間は考える葦なのだ。
以来ファヴランは、なるべく警邏隊と接触しないですむよう頭を働かせて生きてきた。
警邏隊がいない時間帯や道筋を調べ、調べて……そうしてこつこつと積み上げてきた努力が今回も役に立った。
もっとも、おかげで時間も体力もぎりぎりの状況には追い込まれてしまったものの、だ。
治安がよろしくない北区にあっては、外を自由に出歩ける時間帯は日が暮れるまでと決まっている。
ぜいぜいと息をつきながら、ファヴランはちらり、と太陽に目をやった。
冬に比べれば、ずいぶん日の入りも遅くなったものだが、それでも……目に映る太陽は赤み

を帯びている。
夕暮れが、近い。
猶予はない。
ファヴランは必死の思いで足を進めた。
（今日中に……今日中に家賃を払わないと……っっ）
追い出されてしまう。
（やっとの思いで、手に入れた場所なのに……！）
心臓も破けてしまいそうな思いで、ファヴランが自分の部屋のある建物の前に辿り着いたのは、日が暮れるにはまだいま少し時間が残されているころのこと――。
ここ五年ばかり住んでいる建物を目にした瞬間、ファヴランはほう、と安堵の息をついた。
なぜなら、恐れていた大家の姿が見えなかったからである。
（ま、間に合った……？）
やったと思った。
なんとか今回もやり抜いたのだ、万歳！
ことあるごとにひとのことを追い出そうとするあの大家との攻防に、今回もなんとか勝利したのだ、万歳！
あとは、追い出す気満々の大家が来るのを待って、滞納していた家賃をきっちり支払ってしまえば、めでたしめでたし。

「あぁ、よかったぁ――」

その場にがっくりと膝をつき、つぶやいたファヴランはしかし、次の瞬間、ぽん、と肩を叩かれ、それが大いなる勘違いであったことを思い知らされた。

「ファヴラン……」

そう声をかけてきたのは、隣の部屋に住む女性だった。

北区ではなかなかに品がいいことで知られる酒場の給仕女員として毎日勤めている彼女は、信用できる上にたまに勤め先の厨房から食料を調達してきては近所の住人たちに無料配付してくれる、実に、じつにありがたく嬉しい存在なのであるが。

それはファヴランにしても同じことで、これまで何度世話になったかも数えられないほど世話になった覚えありありで、さらに言うならほとんどすでに天敵となっている大家の「追い出してやるーっっ！　あの小僧！」攻撃からも、何度も助けてもらった恩人だったのだ、けれど……どうも、この日は、なにかが違っていた。

どこがどうとは言えないのだが、彼女のファヴランを見つめる目が……なんというか、なにかどこか……なんだか、全然違ったのだ。

少なくともそう感じられる違和感が、あった。

実際のところ、彼女はファヴランには理解不能な……沈痛な面持ちで、彼を見つめていた。

「……ラーイ？」

首をかしげたファヴランに、ラーイはささやくように告げた。

「ファヴラン……なぜ……」

なにを言われているのかわからず、問いかけようとしたファヴランの視界に、それは飛びこんできた。

黒繻子の上下に、鬱金に染め上げられた薄絹を肩に掛けた――二人の男性。

警邏隊の制服ではない。

（神殿の……？）

鬱金の色彩は地女神アスカニーリを奉じる地神神殿のもの――長衣でなく肩掛けを身につけているということは……。

「神兵……？」

いったいなぜ、どうしたわけで、こんな下町に神兵がいるというのか？

その答えはすぐに出た。

神兵のひとりが、口を開いたのだ。

「お前は今朝、南区のアスガル商会で、宝石を現金化したな？」

問いというより確認に近いその言葉に、ファヴランは不吉な予感を覚えた。

はたして、神兵は、逃げ道を塞ぐようにしてこう告げたのだ。

「多少訊きたいことがある。一緒に来てもらおう」

来てもらえるか、ではなく、来てもらおう――。

（もしかして、かなりやばい……？）

得体の知れぬ不安が、ファヴランの胸に広がっていく。
ラーイが目頭を押さえながら「馬鹿だよ」とつぶやいた。
「いくらお金に困ってたからって、聖石を盗むだなんて……」
一瞬、なにを言われたのか理解できなかった。
(聖石……？　って、使徒さまだけが生み出せるっていう、お守り石、のことだよなァ？　へえ、あの黄色い石、お守り石だったんだ……って)
「違う！」
叫んだものの、事態は一向に変わらなかった。
「盗んでなんかいない！」
「そうか、そうか」
神兵は少しも信じていない口調で答え、ファヴランの腕を摑んだ。
「ゆっくり事情を話してもらおうな。さ、行こうか」
聞く耳皆無と顔に書き、神兵はずかずかと歩きだした。
引きずられるように歩きながら、ファヴランは必死に叫んだ。
「誤解だ！　おれはお守り石なんて盗んでなーいっっ！」
しかし、誰も聞いてはくれなかった。
この日、ファヴランは住む部屋を失い、同時に聖石泥棒の汚名を被ることとなった。
人生で二番目にひどい日だと、思った。

その部屋に通されたとき、ファヴランは意外な思いに、知らず目を瞠ってしまった。

警邏隊の詰め所には、過去何度か引っ張られたことがあったので、神殿のそれも似たような殺風景な部屋に違いないと思いこんでいた予想が裏切られたからだ。

あまり広くこそないが、柔らかそうな絨毯も、座るよう進められた布張りの椅子も、繊細なレース織のクロスがかけられたテーブルも、さらには出された茶器も——どれもこれも高そうで、間違っても泥棒——冤罪だが——を訊問するために通す部屋とは思えない。

（ええっとぉ、もしかして濡れ衣だってわかってもらえたのかな？　でも、引っ張って来られてすぐにこの部屋に通されたんだから、途中でわかったってことはないよな。最初っからおれが無実だってわかってたんなら、あんなに強引に連れて来られることもなかったはずだし……うぅーん？）

聖石泥棒だと言われたときも混乱したが、この部屋の様子にはさらに混乱させられる。

それとも、神殿では泥棒相手であっても、こんな上等の家具を揃えた部屋で、美味しいお茶を出して訊問するというのだろうか……限りなくあり得ないことのように思えるが、だがそうなると、まったくわけがわからない。

ああ、でも、とファヴランは思った。

（泥棒の濡れ衣だけは晴らさないと……。ただでさえ身寄りがなくて保証人もないってことで大家には目の敵にされてるんだし。この上泥棒だなんて言われたら、絶対追い出されるに違いないんだから……）

と、そこまで考えたとき、違いないもなにも、現段階でここにいる以上、部屋は追い出されたも同然だということに気づく。

家賃を滞納した上に、聖石泥棒疑惑――先程の件は、きっとラーイやほかの部屋の住人たちの口から、大家に伝えられるに違いないのだ――一番つきあいのあるラーイですら、ころりと信じたことを、あの頑固で偏屈で融通のきかない大家が信じないはずがない。

（ああ……おれの部屋。おれの帰る場所）

やっと手に入れた、宝物のような場所。

けれどそれは永遠に失われてしまったのだ。なけなしの私物も、家賃のカタに没収されてしまうに違いない。たいしたものはなかったけれど、自分の場所を得たからこそ、手に入れる気になった燭台や鉢植えや上等の蠟燭。

全部なくしてしまった。もし冤罪が晴れたとしても、もう一度あの大家が部屋を貸してくれることはないだろう……否、そんな噂が立った時点で、誰も部屋を貸してはくれない、きっと。

「気味悪いファヴラン、だもんな……」

自嘲気味につぶやいて、自らの声でズズンと落ちこんだ。

言葉には力が宿るというが、確かに耳にしただけでへこんでしまうあたり、やはりその説は正しいらしい――などと思いながら、ファヴランは深く息をついた。

扉の向こうから、足音とひとの声が聞こえて来たのはそのときだった。

ひとりではない。

（ふたり……いや、三人？　違う、もうひとり、いる……？）

訊問を担当する神兵だろうか。

だが、ひとりに対して四人というのは多すぎやしないだろうか。それとも、お守り石の盗難というのは、それだけの大事件というわけなのか。

（うーん？）

ファヴランは首をかしげたが、そのことに関して深く考察する気力はすでに尽きていた。

（ま、どーでもいいか）

半ば自棄になって、ファヴランは扉が開かれるのを待った。

なにがどう転ぼうと、いまさらどうでもいい――というのが、このときのファヴランの偽らざる本音だった。

しかし、世の中には想像もつかない衝撃というものが、ごくごく稀ではあるが転がっているのである。

扉が開かれ、そこから姿を現した人物たちを目にした刹那、ファヴランは全身が凍りついたような錯覚に襲われた。

なぜそれほどにショックを受けたのか、自分でもわからぬまま、ファヴランは食い入るようにそこに現れた者たちを見つめた。

扉を開き、入ってきたのは四人の人物だった。

ひとりは高位の神官とわかる、鬱金の繻子に豪華な刺繍を施した長衣を纏った初老の男性。

もうひとりは漆黒の生地の上下に、金糸で刺繍を施したゆったりした黒絹の長衣を纏った青年――貴色とされる白、黒、赤、緑、黄、青の刺繍を許されるのがどんな身分の者であるか、ファヴランは知らなかったが、それが相当に高い地位にある人物であることだけは疑いようがなかった。

そうして、残るふたり。

他大陸からの客人だと、一目でファヴランにはわかった。

なぜならふたりは、この樹翁にあっては貧困――もしくは下品であることの証でしかない、体の線をはっきりと見せる、布地の少ない服を身につけていたのだ。

ところが、その生地ときたら極上品で、しかもその上下には、これまで見たこともないほどにきらきらしい、小粒の宝石が縫い留められているのである。

これは、どう考えても樹翁の人間ではない。

さらに言うなら、このふたりは、身にまとっているものを除外しても、全然樹翁の人間らしくなかった。

銀とも白とも取れる髪を持って生まれる子供は、この樹翁にあってはまずない。色素の薄い

瞳に生まれる者もだ。

薄くて濃い金、ほとんどは茶や褐色、栗色だ。

なのに、そのひとの髪は真っ白で、瞳は真紅だった。

もうひとりの人物もまた、この樹翁にあっては異彩を放つ外見の主だった。

肌は南国の象徴のような褐色でありながら、その髪は純粋なる金、さらに瞳は極上の矢車菊の青。

いかに混血が進もうと、このような奇蹟の配置が、神の配剤なくしてあり得るはずがない！

だから……目にした瞬間、ファヴランは彼らを他大陸からの客人だと認めると同時に、神の使徒だと認めたのだ。

「……使徒……さま……？」

あまりにも思いがけない出来事に、声がかすれてしまった。

そんなファヴランを落ち着かせるように、真紅の瞳の青年がすっと目を細めた。

もともとが柔和な顔だちであるだけに、その微笑の効果は絶大だった。

（男なのに、なんて綺麗なひとなんだろう……神様ってやっぱり面食いなのかな？）

それとも、それほどに優れた資質を持って生まれた人間は、初めからそれに見合う器を与えられるのだろうか。

思わずぼうっと見とれてしまったファヴランに、青年がにこやかに声をかけた。

「連絡が行き違ったせいで、強引に連れて来させてしまったようで、すまないことをしました



ね。乱暴な真似はされませんでしたか？」

いつまでも聞いていたいと思わせる、耳に心地のよい声に、反射的にうなずきかけて、ファヴランは伝えなければならないことを思い出した。

「お、おれはやってない！　神殿のお守り石なんて盗んじゃいないぞ、絶対っっ！」

この言葉に反応したのは、黒衣の青年だった。

金褐色の睫毛に縁取られた、ハシバミ色の瞳を思わしげに細め、小さくつぶやいた。

「神殿の……？」

だが、それ以上の言葉を口にするより早く、真っ青な瞳の青年がくつくつと喉を鳴らした。

「いまので決まりだな。司祭長、あなたの懸念はまったくの的外れだったってことですよ。だいたい、まっとうな質屋に持ちこんだって点だけで、この子が無実なのは明らかだったってのに、少々の確認の手間を惜しんだばっかりに……可哀相に」

そうつづけ、すい、と青年が近づいて来、ファヴランの手を取った。

その手首には、神兵に摑まれた際にできたあとがうっすらと残っていた。

「こんなに赤くなって……こんなに小さな子に、まったく」

あきれ果てたとでも言いたげな口調とはまた別に、青年の青い瞳には自分を気づかう色が浮かんでいた。

それはわかる……わかってはいたのだが。

「だれが小さい子供だ!?　おれは子供じゃない！　先月、ちゃんと十五歳になった！」

むきになって子供ではないと主張することこそが、実はまだまだ子供の証なのだが、肩肘張って生きることが当たり前になって久しいファヴランには、とても聞き流せる言葉ではなかったのだ。

「それに……だいたいなんだよ、なんなんだよっっ!?　おれは天地神明にかけて盗みなんて働いてない！　なのに、あいつ……あの神兵……っっ！　ひとのこと泥棒だって決めつけて……みんなにそう言って！　おかげで大家に家賃払い損ねるわ、近所のひとには誤解されるわ……ああぁ、そうだよ、おれってばもう宿無し決定じゃないか！」

もともとソリの合わなかった大家の顔を思い出す。

口うるさくて、ひとのやることなすことに、いちいち文句をつけなければ気が済まない迷惑な喧し屋。

女でさえなかったら、何度殴りつけていたことか――。

「そうだよ……いくら濡れ衣だってわかったって、あの文句つけるの大好きな大家のババアが、一度ケチのついた相手にまた部屋を貸してくれるとは思えないじゃんか！　すっげえやなババアだけど、そんでも保証人なしで部屋貸してくれる酔狂者なんて、きっとほかにはいないに違いないのにぃぃ」

たとえここで無罪放免となろうとも、待っているのは生活苦。

心機一転してこの街を出て、よその街に移るという選択肢もありではあるが、第一印象でまずひとに嫌われてしまう自分では、それはそう簡単なことではない。

それでもなんとかある程度の収入を確保できたのは、副業のおかげだった。
雅夜に住むようになって二年――口コミのおかげもあって、それなりに声もかかるようになったばかりだというのに、場所替えとなれば、また最初からやり直しだ。
八方塞がりだ。
「どうしてくれるんだよぉぉおっっ！」
叫んだファヴランは、まだ自分がどれほど深刻な事態に巻きこまれているのかわかっていなかった。
そうして――だ。
わかったときには、もはや引き返せないところに追い詰められ……もとい、立っていたというわけである。
巡り合わせの悪さというものを、ファヴランが心底憎んだのは、この約一時後のこと。
「……ついてないにもほどがある……」
かろうじて呪詛の言葉を飲みこんだファヴランが口にした言葉に、他大陸からの客人ふたりだけが、同情的な目を向けてきた。
不運は……まだ打ち止めにはならないらしいと、がっくりと肩を落としながら考えたファヴランだった……。
そうして実際、ファヴランにとっての不運は、まだ打ち止めではなかったのだ。
……哀れ、としか言いようがあるまい。

2

「ファヴラン・ストルール」
歌うような声で名を告げられ、ファヴランは一瞬反感も忘れてうなずいた。
それは……不思議な、不思議な声。
それまで抱いていた反感や苛立ちを無にしてしまう、全く不思議な声だった。
「十四歳」
おれは十五だ！　と叫んだものの、それは相手の言葉を遮ることにはならなかった。
「それは失敬」
と、相手はすぐさま謝罪し、厭味にも訂正してきたからだ。
「数え年にして十五――」
出生地――不明。
家族構成――不明。
「現在雅夜北区三丁目六の四の二十三、集合賃貸住宅『柏木荘』三階三号室在住」
文書を読むかのような滑らかさで、相手は彼の個人情報を口にしていく――公にはしてい

ない秘密の事柄まで。

「定職は持たず……というか、就けず、市場での店番、荷物搬入等の賃仕事にて生活を支えているようだが、時折長期間の休みを取っては姿を消すこと多し――」

歌うように、奏でるように、声は事実を紡ぐ。

「その期間、なにをしているのかといえば……」

白い髪の柔和そうな青年は、ちらりと意味ありげな笑みを浮かべ、こう、つづけた。

「失われた遺言や、謎かけにより所在の明らかでない――遺産探索人」

そうして声の主は、自らの求める内容を口にした。

「きみの力を是非借りたくてね」

ナウルニールと名乗った聖石の使徒は、柔和で優雅な美貌に、これまた柔和で優雅な微笑みをたたえてそう言い出した。

しかし、その笑顔を目にした途端、ファヴランは言いようのない危機感を覚え、つい反射的に身を引いてしまった。

彼が指摘した通り、ファヴランは生来持ち合わせた感覚を利用して、手がかり皆無とされたり、誰にもわからぬよう隠された隠し財産を見つけることで生計をたててきた。

謝礼はあくまでこちらからの言い値である。

これを「見つかった財産の○割」などと定めなかったのは、彼の生きる知恵なのだ。隠し遺産や隠し財産を見つけるために血眼になっている面々は、ファヴランのおかげでそうした財を見いだしたという事実を綺麗さっぱり忘れることの達人が多い。

依頼してきたときには、「見つかったら、財宝の三割……いや、五割だって払う！」とかいうくせに、実際に見つかった場合、態度は激変する。

あれこれ文句をつけて値切ってくるのはまだましというもので、払う金惜しさと口封じを兼ねて、こちらの命を狙ってくる依頼主のなんと多いことか……。

結局、金を欲しがる連中は、手に入れた金を守るためなら手段を選ばないという教訓を得たファヴランは、依頼主が自分を見下し、寛大な気分で払ってやろうという気分になる代金を、しかも宝が見つかる前に申し出ることで、懸念を抱かせることなく支払ってもらうという安全対策を図ることで、ここ数年というもの無事過ごしてきたわけである。

「ふはははは。しょせんガキのやることよ。いかに特異な才能があろうと、そこにどれだけ貴重な財宝が眠っているかも見抜けぬぼんくらよ！」

依頼主のほとんどは、彼のことをそう見下している。

もちろん、そう見せかけるために、ファヴランは執拗なまでに偽装を重ねたわけなのだが、今回の……神殿からの使者を前にしたいま、彼はこれまで感じたことのない焦りと恐怖を感じていた。

「な……にを……？」

言われているのかわからないという顔をして問い直したファヴランに、白い髪と血の色の瞳を持つ柔和な美貌の青年は、にっこりと応じた。

「君、本物の力の持ち主なんですね。あっと、とぼけるのはなしですよ、神殿が調べに調べた結果なんですから……というか、だからこそ、きみの力に期待できると判断したわけですし。面倒くさい駆け引きは飛ばしてしまいませんか？　この段に至っては、神殿側としては君を手放すつもりなど皆無でしょうし、君としても長期間ここに拘束されたあげく、その無駄な努力の代償として、一文も得られないまま放り出されるのは遠慮したいところでしょう？」

ナウルニールの問いとも脅しともつかない台詞には……実のところ、かなりの威力が宿っていた。

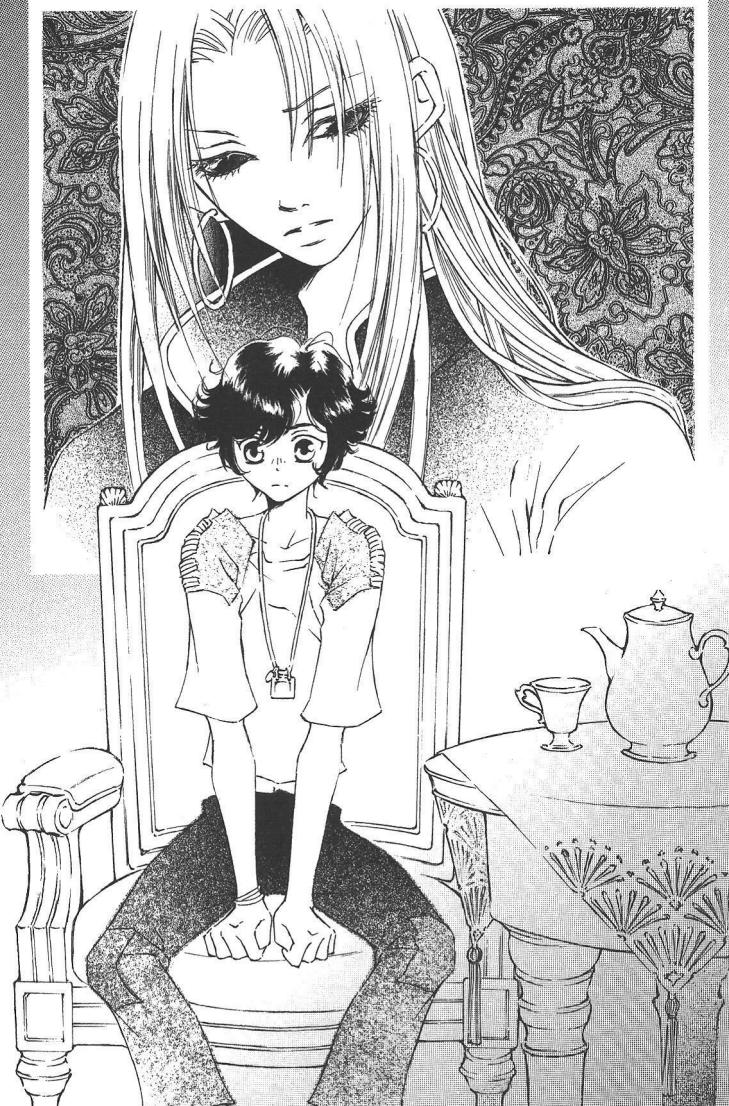
彼が見知らぬ街で生計を立て、なんとか暮らせるようになるまでに味わった艱難辛苦を思えば、ここで汚名を被ったまま、余所に移った場合の苦労は……そのほどは、考えたくもないものだったからだ。

我が身ひとつで信用を打ち立てるのだって、血の滲むような努力の果てに何年もかかったのだ。その信用が泥に塗れてしまった以上、回復するだけで、倍の時間と努力が求められるに違いないことはわかりきっているのだ。

（しかもっっ！　よりにもよって聖石……お守り石泥棒の汚名だなんてっっ！　そんな、とんでもなさすぎる汚名っっっ！）

完全に雪げるはずがない、とファヴランは思った。
神の愛し子に選ばれた清廉にして高潔な魂を持って生まれた、奇蹟の祝福を受けた限られた子供たち――神子とさえ呼ばれる者たちが、神の加護を受けて初めて生み出せる奇蹟の石。
そんなものを盗んだなどと、一度でも疑いをかけられた人間が、これから安定した暮らしを得られるはずがない！
（そうしたら、部屋はもちろんのこと、リィーシャの憧れのふわっふわの緑のドレスも、長い髪を結うための色とりどりの石をはめ込んだ髪飾りも、ぴかぴかに磨きあげた華奢で綺麗な靴もっっっ！　全部、全部、駄目だってことじゃないかぁぁ！）
リィーシャ――それはファヴランのたったひとりの家族。
正確には違うけれど、天涯孤独のファヴランにとって、唯一家族と呼べる存在だった。
非合法だとわかりきった危険な仕事を請け負いつづけてきたのだって、彼女との生活を守りたいのと、彼女の望みをひとつでも多くかなえてやりたい……ただ、ただその一念だったというのに……。
家賃延滞の期限は切れ、信頼できると思っていた隣人のラーイからも、不信そのものの眼差しを向けられた。
「もう……もう、お終いなんだ――――！」
ファヴランは叫んだ。
叫んだ挙句、悲嘆に暮れまくった。

この世の終わりとばかりに、ファヴランは世を嘆きつづけた。
「もうだめだー！　この世は終いだー！　救いはないんだー！」
「そんなのはあなたの妄信です」
誰かが告げた、いさめる口調に、少しだけ救いを感じ取ったような気がしたが、彼は新たに襲いかかってくる絶望を相手にするだけで忙しかった。
「駄目だー、もう、絶対、絶対、駄目なんだー！」
いままでだって、なんとか逃れて来れたのは、いつだって紙一重の奇蹟のようなタイミングゆえだったのだ。
だから、彼は心からの本心を大声で叫んでしまったのだ。
「神殿なんて、大ッ嫌いだぁぁ――――っっ！」
彼の複雑な事情を知ってか知らずか、さほど――神殿に籍を置く人間が、背信的発言にどんな反応を示すものか、これまでいやというほど目にしてきたファヴランには、にわかには信じがたいことだったのだが――気にした風も見せず、相手は単に心外そうに顔をしかめた。
「人聞きの悪い……」
そう、まさにそうとしか思っていない、受け取っていない様子で、だ。
（ふ、普通、こういう場面で飛び出してくるのは「この背信者が！」もしくは「この瀆神者！」とかいった台詞じゃないのか？　こいつ……このひと、どうして……こんな……）
こんな、普通ではないことを、口にしたりするのだろう？



ファヴランが覚えた疑問に気づいたのは、神々しいばかりの美貌を誇る純白の髪の神の使徒ではなく、またその場に居合わせた地元の神官の誰でもなかった。

それまで、部屋の隅で腕組みをして黙って立っていた、まばゆい金の髪と褐色の肌を持つ、樹翁にあっては異端としか呼べない、不思議な色彩を併せ持つ青年だった。

「……どうも、一部誤解があるようだが、君の身柄確保にあたって生じたらしい流言飛語の類いは片づけた。雅夜のアスカニーリ神殿から、君が借りていた部屋の大家に、君には神殿から直接重大な頼みがあって、そのため、君が期限をしきりに気にしていたのを思いやることなく引き止めてしまったため、家賃滞納の咎を思いがけず受けることになってしまったとは説明している。家主殿はそういうことならと、すっかり協力体制を敷いてくれている。もちろん、君の……まあ、一度放り出してしまった家具についてもね。つまり、理解を示してくれた大家のマヌーニュ夫人は、君がそうした意味で神殿に協力しているというのなら、期限を延長して、君がこちらとの約束を果たすまで君が借りていた部屋に置き去りにしてあったあれこれの処分をしばらく待ってもいいと……まあ、そう言ってくれてね」

その最後の一言のもたらした意味は……大きかった。

あれこれ。

（リィーシャのことを……）

あれこれなどと。

しかし、それは同時に救いでもあった。

頭痛がした。
頭が叩き割られるような痛みを感じた。
記憶は混濁し、忘れたままに別の思い出が甦る……。
（リィーシャ……）
君と別れずにすむのなら――。

3

リィーシャと出会ったのは、五年前の夏のことだった。

それまで住んでいた部屋を追い出され、しかもむしゃくしゃした気分のまま街のタチの悪い男たちにつっかかった結果、ぼこぼこにされてへこんでいたときのこと。

全身殴られたり蹴られたりで、起き上がる気力さえなくし、北区の片隅の石畳の上で苦痛に呻いているときに、彼女は現れた。

というか、意識をなくして転がっているファヴランを、じぃーっ、としゃがみ込んで見つめていたのだ。

くせのある黒髪は豪奢に渦巻いており、日に焼けた肌は健康そのもので、差し伸べられた小さな手にはタコも肉刺もひとつとして見いだせなかった。

綺麗に手入れされた巻き毛を持つ、やはり丁寧に手入れされたつやつやの肌をした、重労働の「じ」の字も知らないに違いない綺麗で上品な小さな手を持つ可愛らしい五、六歳のいたいけな少女――。

不思議な朽葉色の瞳で、じっとファヴランを見つめていた。

なんだかもう、世の中のことというか、生きていることにも執着を感じられなくなっていたファヴランは、その少女が、こんな下町にいることの異常性にすら気づくことなく邪険に追い払ってしまったのだけれど。

「なに見てんだ。見せもんじゃねえぞ。とっとと家に帰りやがれ」

こんな上品そうな子供が、なんの間違いでこんな下町に紛れこんだのかはわからなかったけれど、ここにいていい子供とは到底思えなかったから――否、いることにこそ苛立ちを覚え、そう言い放った。

ちょっと……いや、かなり、威嚇をこめた口調になりすぎたかな、と――ほんの少しだけ悔やんだものの、それは後の祭りというものだった。

少女は、ファヴランの口調に不穏なものを感じ取ったのだろう――怯えたように身を竦め、「うん」とうなずき姿を消した。

消える間際に、声ではなく思いをファヴランに残して――。

（大丈夫？　大丈夫？　もう痛くない？）

夏だったから凍死の心配はなかったが、傷口から疫神が入り込み、全身を蝕む危険性は確かにあった――夏場であったからこそのこと。

結局ぼろぼろな状態で目を覚ましたファヴランが、次に目にしたのは昔なじみのラーイの顔で、このとき彼は少女の名前すら聞いてなかったことに初めて気がついた。

（追い払ったりするんじゃなかった……）

少女の朽葉色の双眸に宿った、心配そうな光を思い出し、ファヴランは後悔した。

たとえ相手がどんなに世間知らずのお嬢様であろうとも、自分を気づかってくれたあの眼差しだけは本物だったことを、彼がわかっていたからだ。

本当に、心配そうに顔を覗きこんできて……。

あんな目は、見たことがなかった。あんなに「心配」一色に染められた光を宿した目は。

聖母神の眼差しとは、あんなものなのだろうか、とぼんやり思った。

世界そのものを生み出した大母神――すべての命を育んだ……命を生み出し育んだ聖なる母たる神。

学問を通し、真理に近づきながら、神殿や社会のひずみに巻き込まれ、この下町に流れついた者の数は存外いる。

なぜだか、そうした変わり者に気に入られ、与太話と一緒にあれこれ教えてもらえるようになっていたファヴランの、その直感は……まあ、大きくは外れていなかった。

あれだけ邪険にしたのになぜ、と首を傾げるしかない状況で、その後何度も少女はファヴランの前に出没し、やはりなぜだかわからないものの、彼が危地に陥ることのないような忠告――と呼ぶには曖昧すぎるかもしれないが――を残していってくれたのだ。

ときには不首尾に終わった仕事の依頼人の家人から追いかけられて困った際に隠れ場所を示してもらったり、逆に金になる仕事にありつけず、ほとほと困っていたとき、手渡された品が偶然にも、とある名家の失せ物だったことが判明し、手厚い保護と謝礼を受けたこと……など

など。

もしかして、あれは守り神とでも呼ぶべき存在なのだろうか――？

と、自分でもらしくない錯覚を覚えて間もないころに……リィーシャ本人を、拾った。

薄汚れたぼろを纏って、小さく丸くなって横たわって震えていた――そう、あれは冬になってからのことだ。

以前目にしたときに感じた「綺麗さ」などかけらもなかった。

黒焦げ茶の継ぎだらけの粗末な布に身を包んで――正直なところ、惨めでみすぼらしい死に損ないとしか思えなかった。

そんなモノなら、これまでも数えきれないほどに見てきたから、しかもすぐに死んでしまうのはわかっているから、手を差し伸べようなどとは、かけらも思わなかった。

だって、死とは、ファヴランにとってあまりにも近いところにあったから。

死に拘わらず、気配に敏感に過ぎるようできてしまったファヴランにとって、それは馴染みのありすぎる気配だったからだ。

財が原因で、縁が原因で、あるいは思いがけぬ運が原因で、ファヴランに関わったものたちはたやすく破滅していく。

（だから特定の誰とも極力関わり合いにならないようにしてきたのに……）

だから、だめなのだ、と自分に言い聞かせた。

自分と関わり合いになった瞬間、自分にまつわる呪いがこの死にかけの子供にかかってしま

うから。

一所懸命考えた末、ようやく導き出した答えだったはずなのに……。

気がついたら、リィーシャの頬に触れ、呼びかけていた。

「しっかりしろ」

その声に気づいたらしい、リィーシャがうっすらと目をあけ……そうして微笑んだとき、ファヴランのなかのなにかが弾けた。

理由もないのに目頭が熱くなって、自分でもわからないうちにぼろぼろと泣いていた。

そうして小さな体を抱き上げて、彼は部屋に戻ったのだ。

その日から、リィーシャは彼にとってたったひとりの家族になった。

小さい小さい、可愛いリィーシャ。

彼女を養っていくために、ファヴランは我慢することを覚えた。年長の知り合いであるライたちの忠告にも耳を傾けて、痛い目に合わずに仕事を請け負うやり方も学んだ。住人が増えたら家賃も増えるから、リィーシャのことは内緒にしていたが、近所の住人はなぜだか好意的で、ごうつくな大家に告げ口したりはしなかった。

多分にリィーシャの愛らしさが幸いしてのことだろうとは思うのだが、それでもそんな皆の好意が嬉しく、ありがたく……そんな風に感じる自分がなんだか少しだけましになったような気もして……だから、ずっと、本当に、楽しかった。

ずっとこのまま暮らしたいと……否、暮らしていけるのだと、ファヴランはいつしか信じて



いたのだ。
リィーシャとの暮らしがかけがえのない、決して失えぬものであることを確信してしまったからこそ――そう、今日この日までは。

「なん、だって……？」
自分の耳が信じられず――いや、正確にはいま聞いたばかりの言葉を信じたくなくて、ファヴランは思わず問い返していた。
（なんつった!?　こいつ……このひと、いまなんつった!?）
彼の耳と記憶力が確かなら、目の前に陣取った他大陸よりの客人ふたりの片割れの、これまでお目にかかったこともない美貌の青年は、かなり……否、とんでもなさすぎることをさらりと口にしてくれたはずなのだ……が。
（聞き違い!?　そうだ、そうに決まってる！）
心の平安を優先するファヴランの意識は、すぐさまその可能性に飛びつこうとしたのだが、生憎……相手はそうした斟酌をしてくれる慈悲深さとは無縁の性格の主だった……ようだ。
「え？　よく聞こえませんでしたか？」
にこにこにっこり――見とれるぐらいに綺麗な笑顔で、白い髪の青年ナウルニールは残酷に

も同じ台詞を繰り返してくれた。
「ですから、神殿は正式に、君に『迷わずの森』の案内を要請したいと言ったんです」
「じょっっ！」
冗談じゃない！　と返そうとしたが、これまた機先を制された。
「もちろん、冗談なんかじゃありませんとも。言ったでしょう、神殿は君のことを、君が思っているよりずっと詳しく調べ上げているんですよ。君の出生地が実はどこなのかも、八年前の事件のことも……そのときの生き残りが君ひとりであったことも」
ずくん、と胸が痛んだ。
心臓が鷲摑みにされるとは、きっとこんな感じなのだとファヴランは確信した。
生き残り――なんて胸に痛く耳障りな言葉だろう。
忘れていたはずの、永遠に忘れてしまいたい記憶が脳裏に甦りそうになる。
「……き残り……って……」
生き残りって言うな！
目の前の美貌の青年に摑みかかってそう怒鳴りつける寸前に、違う声が割って入ってきた。
「ナニィ、言い過ぎだ」
人間離れした綺麗な顔を持つくせに――それとも、だからこそ、なのか――平気でひとの心臓を突き刺すようなことを口にする青年の口撃からファヴランの心を救ってくれたのは、金の髪と褐色の肌と矢車菊の双眸を持つ青年だった。

そうして、トリノアークと名乗ったその青年は、椅子に座ったファヴランと目線の高さを合わせるために、床に膝をついて、彼の目を覗きこんできた。

「相棒が心ないことを言って申し訳ない。君にとって決して快くはない記憶に関わることだということはおれたちも知ってはいるんだ。だが、それでもどうしても君の協力を仰ぎたい。というか、君の協力なしには、もう手詰まりなんだ。協力してはもらえないか？」

そう告げてくるトリノアークの眼差しは真摯で誠実なもので、ファヴランの心の天秤は大きく「信じてもいいかなー」ぐらいには傾いた。

けれど、あくまでそれは「傾いた」だけであって、決したわけではなかった。

なにしろ、鍵となる言葉が悪すぎた。

迷わずの森――。

言葉に宿る力を当てにして、逆の意味合いを持たせようとしたその森の真の呼び名は――別にある。

迷森。あるいは迷いの森。

一度入りこんだが最後、迷い、決して抜け出すことのできぬ迷路の森。

「思い出したくないという君の気持ちはわかる。君のほかに森に間違って迷いこんだ男たちの証言からも、あの地がいかに過酷であったかは充分想像できるからな」

労りながら、それでも自分にその仕事を押しつけようという意図が感じられて、ファヴランは逆にトリノアークに対する反感を覚えた。

「わかってんなら……！」
なんでいまさら『迷わずの森』なんだよ！
と噛みついた。
「ぜってーお断りだ！　あんな呪いの森に立ち入るなんて、二度と御免だ！　絶対行きたくない！　おれが八年前のたったひとりの生き残りだってこと、知ってるんなら……わかってるんだろ!?　ほかのみんなは……全員死んじまったってこと！　なんでせっかく生き延びたのに、あんなとこに戻んなきゃなんないんだよっっ!?　冗談じゃないっての！」
迷わずの森にかけられた、それは呪い。
森に足を踏み入れた者は、誰ひとりとして無事に生還できないという――。
「けれど、君は唯一の例外として森から出ることを許された」
確認するように語り継ぐ相手に、知らんふりをすることでしか応じられなかった。
それは……確かに真実であったからだ。
ファヴランと一緒に森に入った人間は、ことごとく皆命を落とした……森のなかで。
なぜ自分ひとりが助かったのかなんてわからない。
あとで聞いた理由のなかで、一番それらしかったのは、自分が子供だったから……というのはあったけれど、子供でも森に入ったら無事ではすまないことが多々あったから、信憑性としては半々だったろうか。
「そんなん、気まぐれに決まってるじゃん。そんなのあてにするなんて頭悪すぎっつーもんじ

やねえ？　あんときおれ、ぎりぎり七つだったから神様からお目溢ししてもらったのかもしれねーんだしさぁ？」

人間でもなんでも七つまでは神様の眷属――というのは、各地に伝わる俗信だ。

「そうかもね」

と、柔らかい笑顔で、トリノアークは応じた。

「それでも、あの森に入って正気且つ五体満足で生還できた人間は、これまで君以外見つかっていないのも事実だ」

きっぱりと言い切られ、ファヴランは返す言葉を失う。

本当は……あれは『生還』と呼べるものではなかったのだけれど。

「買いかぶりだ」

歯を食いしばりながら、ようやく言った。

「だいたい、いまごろ……なんだって迷わずの森なんだよ。神殿ともあろうもんが、迷わずの森に眠る秘宝だなんて与太話、信じてるわけじゃないんだろう!?」

それも……また、伝説。

蒼炎の北に広がる森には不思議の力が宿る、と。そこに立ち入る者には等しく酷い運命が待ち構える、と。

禁域――それでも人々が森に入りこむのには、もうひとつの理由がある。

ひとの心の欲の琴線を震わせずにいられぬ……それ。

「……森のなかに、黄金郷なんかない！　秘宝なんて隠されてない！　なんだって、そんなくだんない話、よりにもよって神殿の人間が持ち出してくるかなぁっっ!?」

怒りと八つ当たりを兼ねた、ファヴランの乱暴な物言いに褐色の肌の青年は一瞬黙りこんだが……もうひとりのほうは、得たりとばかりに微笑んだ。

「秘宝は、あるんだよ」

はっきりきっぱりと、ナウルニールは言い切った。

頭のなかの血管が切れるかと……正直思ったほどに、その台詞を耳にしたときは憤怒した。

「な……！」

（なにも知らないくせに！）

怒りのあまりの大きさゆえに、言葉にならなかったのは、はたして幸いだったのかどうか――ただ、次に紡がれた言葉を耳にした瞬間、ファヴランはもう少しだけ相手の話を聞いてもいいかという気になった。

なぜなら、ナウルニールはこうつづけたのだから。

「秘宝はある……ただし、それは人間のためのものじゃない」

こくり、と彼の連れらしい青年もうなずいた。

「そう。あれは森のための……森に捧げられたものだ。個人としての人間が手にしたところで意味を持つものではない」

その言葉が耳に届いた瞬間、ファヴランは肩から力が脱けるような、不思議な安堵感を覚え

た。

「な……んだよ……」

(わかってるんじゃないか)

でも、だったらどうしてこんなことを……!?

思いがそのまま顔に出てしまったのだろう、褐色の肌の青年が、なんとも困ったような顔になった。

「……君に、案内を頼みたいのも……だからこそ、なんだ」

(だからこそ!? だからこそってなんだ!?)

すっかり混乱してしまったファヴランの目前に、ナウルニールがずい、と差し出してきたものは——。

先の遺産探索の仕事で、さんざん値切られたあげくに勝ち取った、飴色の石。

「みんながみんな、君ぐらい物わかりいいと困ったこともなくなると思うんだけど、どうもそうもいかないみたいでね。困った人なんかもいて、禁域の森からこんなもん、盗み出してくれるやからが出現したりしてくれるわけなんだなあ」

「……つまりは、そういうことなんだ」

年長の青年ふたりが、揃って——片方はさておき、ひとりは先程まであんなに偉そうだったくせに——頭を下げて「お願い」してきたとき、ファヴランの頭は真っ白になった。

「つまりって……そういうことって……」

あまりにもいきなりすぎて、情報が綺麗に片づかない。
「つまり……要約するなら、だ」
先に口を開いたのはトリノアークで――後を引き継いだのがナウルニールだった。
「これは正しく『迷わずの森』の秘宝の一部だということだ。……どうやら変質を余儀なくされているようだがね。とはいえ、森のものは森へ返すのが道理というもの。自然埋蔵物とでもいうのなら話は変わってくるかもしれないけどねぇ……この石ってば、もうしっかり奉納品てな印つけられてるみたいだし。そんなモノが、やっぱ、外に出回っちゃ駄目でしょう？」
だから、とトリノアークは本当に困った顔で――けれど真摯な眼差しで訴えかけてきたのである。
「君の力を貸してくれないか？」
迷った。心底、ファヴランは迷った。
けれど、決めた。その決定打は、と言えば。
悪魔の一言だったりした。
「リィーシャちゃんだっけ？　寝言で呼ぶくらいなんだから、きっと可愛くて大事な子なんだよねぇぇぇ？」
たとえどんなに綺麗だろうが、神殿に籍をおいていようが、こいつは悪魔以外の何者でもないと、ファヴランはその刹那確信した。
絶対的な弱みを握られてしまった以上、ファヴランに逆らう術はなかったのである。

4

隣の部屋の扉を叩くなり、隣人――ラーイ――は飛び出してきて、力一杯ファヴランを抱きしめた。

「ファヴィ！　濡れ衣着せられたんだって!?　ああ、なんてこったろう！　神兵さんも神兵さんだよ、ろくに調べもしないで盗人と決めつけるだなんて！」

大変同情的な表情と口調だったが、生憎ファヴランは先日の彼女の態度をよく……よーく覚えていた。

あのとき彼女は、自分の言い分を聞く前から、彼が罪を犯してしまったことを確信していた……「なんて馬鹿な真似を……」という台詞がなにより雄弁に、彼女の本音を語っていた。

白々しいといえば白々しいことこの上ないが、それは北区の住人としては当たり前の反応だということもわかっているから、ファヴランとしても責められない。

生活のために非合法なことにも手を出すことの多い北区の住人は、それゆえに連帯意識も強い。ことが詐欺や掏摸やかっぱらい程度なら、彼らはまず絶対に、知り合いを売ったり見放したりはしないのだ。

ただし、これが重罪人となると話が変わる。匿ったり逃亡の幇助をしたことが明らかになれば、自分だけでなく家族や知己全般にその咎を問われるためだ。

殊に、神殿関係となると最悪だ。神に仇なす者として、最悪破門されてしまう。

神の加護を失うと同時に、神の子供たちである精霊たちの加護をも失うことを意味するその処罰を、受けたいと思う者はまず皆無、受けても仕方ないと思う者も……また限りなく皆無に近い。

豊かさとは無縁な下町に住む身としては、なけなしの運のひとつでも手放したくないというのが本音なのだから。

そういうことがわかっているから、ファヴランはラーイの態度に苦笑したものの、憎んだりはできなかった。

神罰決定の罪を犯したとされたファヴランの味方についたが最後、この先ずっと神殿からは目の敵にされ、神々と精霊の加護から見放されてしまう――そうだとしたら、元凶であるファヴランを切り捨てるしかない。隣人で、多少の縁と情はあるとはいえ、一蓮托生するほどではなかったのだから。

けれど、ファヴランが神殿に捕まった罪状が、冤罪だったことをラーイが心から喜んでくれているのも心底からの真実だとわかるから、ファヴランは微苦笑するしかないのだ。

（つくづく……ここらの住人ってばしたたかっていうか、しなやかっていうか、こりないって

いうか……）

根性があって、しかも悪びれないあたり、大好きだなぁ、と思いつつ、どうやら先日の一件に関して、ラーイが少しばかり罪悪感めいたものを抱いてくれているらしいことを、この際利用させてもらおう――と思った。

「うん。そっちのほうではしっかり謝ってもらったし、小額とはいえ謝罪金ももらえることになったし、なにより大家に半年分の家賃支払って貰うことになって……ただ、つけられた条件のせいで、おれ、あっちの道案内に行かないとまずいらしいんだわ」

それで、と言いかけたファヴランを前にして、ラーイは一瞬首をかしげ、すぐに得心したとばかりにうなずいた。

「わかった。つまりあんたが留守の間、あの、リィーシャの世話をしてくれってことね？」

以前何度も、仕事のたびに頼んでいたことだから、ラーイの反応ははやかった。

「うん、悪いんだけど、頼めるかな？」

尋ねた彼に、ラーイは鷹揚に答える。

「なに、いまさら水臭いこと言ってるんだか。大した手間がかかるわけじゃなし、やってやるよ。あんたには去年の冬、風邪ひいたときに世話になったことだしね」

「それこそお互いさまじゃないか。でも、正直助かる……頼むな」

可愛い綺麗な――少しばかり人見知りの激しい少女を預けるのに、ラーイ以上に信じられる相手はいないから、以前と同じように請け負ってくれたことが嬉しくて、ファヴランは破顔し

た。

（これで、リィーシャのことは大丈夫……）

最大の問題は、これで解決したわけだが、ファヴランの心は完全には晴れない。

なぜならば――別の新たな問題が生じてしまったからだった。

第一のそれは、もちろん行き先である『迷わずの森』である。

だが、それだけなら、こんなに頭の痛い思いを味わわされることはなかった……そう、第二の問題が生じたのだ。

同行者の顔ぶれ……というか、その相手との相性という――。

（頭痛が痛い……）

文法上間違っていることを承知で、そう思ってしまうほど、彼の脳裏には頭痛の種が山積していた。

綺麗な顔して言動悪魔な青年からの、脅迫めいた要請を受ける形で、『迷わずの森』への案内役を引き受けた後に、面倒な種は現れた。

「引き受けてくれるそうですよ、姫刀自」

晴々とした顔で、青年がそう口にした瞬間、神殿の部屋と思しき片隅にかけられていた壁飾りの布が揺れた。

そうして、そこから現れたのは――。

「それは、重畳」

まず目を奪ったのは、光の加減によって金と緑とも見える豊かな長い髪だった。
ふくらはぎまでも覆う長いゆるやかに波うつ髪を束ねもせずに、歩み寄ってきたそのひとの肌は病的なまでに白かった。
(まるで、隠花植物みたいだ……)
そう思った——が、彼女と視線を合わせたとたん、それがとんでもない思い違いであったことを思い知らされた。
そのひとの双眸は琥珀——燃えるような輝きを宿す双玉には、他者を圧する力があった。
「よろしく頼む」
と、彼女は言った。
けれどその言葉を耳にした瞬間、ファヴランは本能的にこう思ったのだ。
(早まった……嵌められた!)
と——。

「え? 彼女が誰なのかって?」
説明を求めたファヴランに、ナウルニールはとぼけた笑顔で白を切る。
「んなことじゃねえよ! おれは確かにあんたたちを『迷わずの森』に案内することは承知し



たけどっっ！　こいつ……じゃない、このひとまで案内してやるだなんて言ってない！」

こんな、ひとまでも――とは、言いたいけれど言えない本音だ。

その姿を目にするだけで、ぶるぶると体が震えて仕方ない。

理屈ではない。

目にした瞬間、感情に支配されてしまうのだ。

（なぜ、こんなに恐ろしく感じるんだ……）

得体のしれない恐怖とも不安ともつかない思いが胸に巣くって離れない。

なのに、白い髪の青年――似たような色彩を纏っているにも拘わらず、なぜか彼からは隠花植物といった印象を受けないのは不思議だったが――は、わざとらしくもてんで的外れなことを言ってくれる。

「なんでこんな美人さんとご一緒できるのに、不満顔なのかなー？　それとも、ファヴランくん、君ってもしかして審美眼ずれてる？」

あまりといえばあまりな言いようだった。

「誰が審美眼ずれてるって……っっ!?」

憤然として言い返したときのことだ、視界の隅で、件の女性――纏う雰囲気の落ち着きぶりから察するに、十代前半とは思えないから、この表現は失礼には当たらないだろう――がくすりと笑うのが見えた。

「よい、鋼玉の」

非っ常に偉そうな態度で偉そうな口ぶりで、彼女は口をはさんできた。
そして、真っ直ぐにファヴランの目を覗きこむと、わずかにその目を細めた。本人、笑ったつもりなのかもしれないが、生憎ファヴランにはそうは見えなかった。
腹をすかせた猛禽か猛獣に見つかった小動物になったような錯覚をおぼえたのだ。
生物的本能に従い、そのまま回れ右をしたいと切実に思ったファヴランだったが、前述の理由により、そうもいかない。また、相手がいかにも獰猛そうな男性ならいざ知らず、妙齢の女性とあっては……やはり抵抗があるのも事実。
いかに本能的な恐怖をおぼえたからといって、たいして上背もなく鍛えているようにも見えない女性から逃げ出すのは、彼の矜持に触れた。
男の子は我慢、というのとはまた少々違うのだが、リィーシャとの安寧な生活をこれからもつづけていくためにも、ここで逃げるわけにはいかないと、必死に自分に言い聞かせた。
そんな彼の懸命な努力を知ってか知らずか、姫刀自と呼ばれた女性は、軽く肩をすくめ――そうして意外極まりないことを言い出した。
「わたしはな、迷子なのじゃ」
思いもかけない言葉に、ファヴランの目が丸くなった。
「は、あ？」
（迷子？　迷子っていったか、このひと？）
ふざけているのかと思いきや、声を上げた彼に、彼女は大まじめな顔でうなずいた。

「どこぞの童謡にあったじゃろう？　『行きはよいよい、帰りが怖い』と。あの歌と同じことでな、でて来たはよいが、帰り道が見つからず、往生(おうじょう)しておったのじゃ。したら、この鋼玉のらがそなたを見つけてくれての。ほんに助かった」

じゃから、よろしく頼む――。

今度は、先程感じたような、丸飲みされるような恐怖は伴わないものの、それでも居すくまずにはおれない迫力の笑顔を向けられ、ファヴランは思わずナウルニールとトリノアークに救いを求める視線を送った。

話が全然進まない上に、彼女の存在感のもたらすファヴランへの心理的負担の大きさに気づいたのか、ふう、とひとつ息を洩(も)らして――片割れは素知らぬ顔でいたのだが――褐色の肌の青年が助け船を出してくれた。

「……姫刀自。まずは簡単な説明からしていったほうがどうやら早道のようだ。そちらは我等が受け持ちますから、姫刀自にはその後で、補足の説明をお願いしたい」

その台詞を耳にしたとき、ファヴランはトリノアークの背後からまばゆい光が射しているのを見たと思った。

（そうだよ、そうなんだよっっ！　わけわからなさすぎなんだよっっっ！　誰かもうちょっと親切にわかりやすく事情説明してくれって言いたいんだよぉぉ！）

少なくとも、そういったことに関して理解を示してくれそうな人物は、三人中ひとりしかいなさそうだということは判明した。

（決めたぜ、おれは）

固く、固く、ファヴランは心に誓った。

旅の間、一番親切で話の通じそうな相手――すなわちトリノアークについていこう、と。

一番誠実で思慮深い性格に思えたからこその判断だったのだが、それがとんでもない思い違いであったことをファヴランが知るのは、ずいぶん後になってからのことだった。

とはいえ、その相手をナウルニールや『姫刀自』に選んだところで、結果がそう変わったかどうかは大いに怪しいところである。

「彼女は……姫刀自は、盗まれた例の琥珀を生み出したご本人でいらっしゃる」

すっぱりきっぱりと説明されて、ファヴランはきょとんを目を丸くしてしまった。

「って……あのひとが聖石の使徒!?」

全然そうは見えねえっっ！

思いっきり意外の念をあらわに叫んだファヴランに罪はない。

一般的に知られている『聖石の使徒』とは、神々の厚き加護を受け聖石を握り誕生し、その意味と重みを重々に自覚し、神殿の教えに従う神々の僕たる意識を、ごく当たり前に持っているものとされているからである。

しかも神々の審査は厳しく、たとえ生まれ落ちたとき、聖石を握っていたとしても、その資質に問題ありと判じられた場合、使徒に選ばれることはない。

そうした教育を受けた身としては、あれが正しく神の意を受けて誕生した使徒だとは受け入れがたいものがあった。

なぜ、と問われても困るが……あの女性を前にした瞬間に感じた不安と恐怖。

神々に選ばれた者が、あんな剣呑な気配を漂わせているはずがない——そう思えてならないのだ。

確かに、ナウルニールやトリノアークも、それまで彼が想像していた『聖石の使徒』とは全然違った存在だったけれど……それでも、彼女に対して感じたような感情は覚えなかった。

あんな感情を覚えた相手はほかにはいなかった。

だからこそ……恐ろしい。

「いや、彼女は使徒ではないよ」

答えたのはナウルニールだった。

(そっか。よかった)

と、ファヴランは思った。

あんな物騒なモノが『聖石の使徒』だったりしたら、自分も含めての、綺麗で崇高なものに対する信仰そのものへの憧れや期待がついえてしまう。

「だが、彼女が戻そうとしているあの琥珀には、充分以上の意味があるんだ」

5

「のう、のう、あれはなんじゃ？」
市の立った通りを歩きながら、緑がかった金髪の美女が、同行者の袖を引っ張っては問いかける。
もはや驚くのを通り越し、呆れの心境に達したファヴランは、（またか）とこっそり息をついた。
「姫刀自、あれは薪ですよ」
「薪じゃと!?　薪など森に入ればいくらでも手に入るではないか。そんなものを、どうして売り買いしておるのじゃ!?　まこと、都とはわけがわからぬ」
目を丸くして、さらに問いを重ねる女性に、親切に根気よく答えているのはナウルニールだった。
蒼炎の神殿を出立してはや数日――すっかり『姫刀自』の話し相手は彼の役目になっていた。どうやら俗世に疎いらしい彼女の、矢継ぎ早の質問に答えるのに、ファヴランが早々に嫌気がさしたのが理由のひとつだが、まんざらでもなさそうな様子を見ると、実はけっこう世話

好きなのかもしれない。

いや、だがしかし、自分に対して口にした脅迫めいた言葉を思い出すだに、相手によって態度を変える曲者なのかも、とも思う。

相手の身分や状況によって、ころころそれを変える輩は珍しくはない。

姫刀自などと呼ばれている以上――しかも『迷わずの森』に奉納されるような聖石を生み出した聖石の子供である以上――同行の女性の身分が卑しからぬものであることはまず間違いなさそうだから、実にあり得ることだと思う。

(け！　イヤらしいの！)

声には出さずに毒づいているファヴランのそばで、ナウルニールは姫刀自に子供でも知っているようなことを説明していた。

「姫刀自、お里で当たり前であったことが世界中のどこでもそうだと思われてはなりません。この雅夜の街の近くには、確かに山や森もございますが、それは手軽に拾いに出かけられるような場所ではないのです。それに街の人間は、暮らしていくために必要な金子を手に入れるために、決められた仕事をなさねばなりません。その仕事を放り出して薪を拾いに行くことはできません。だから、街では薪を集めに出かけることのできない者の代わりに、集めてきた薪を売るという商いが成立しているんですよ」

そんなことは当たり前のファヴランにとって、欠伸が出そうな内容の話だったが、意外にも姫刀自にとっては違ったらしい。

しきりと感心した様子で何度もうなずいた。
「なるほど。村で、織物が得意な者が、苦手な者の代わりに晴れ着なぞを作ってやって、そのお返しに肉や野菜を貰うことがある。つまり原理はそれと同じということだな？」
（物々交換……？　一体どこの原始社会だ？）
というファヴランの心の声は、幸いにも――？――ふたりには届かなかったらしく、彼らの会話は進んでいく。
「左様です」
「だが、天幕ごとに値段が違うのはなぜなんだ？　さっき見かけたところでは、同じくらいの量を束ねてあったのに、値段は二割ほども違ったぞ？」
（そんなの、薪の質の違いに決まってるじゃないか）
ファヴランの思いを読み取ったかのように、ナウルニールが今度はその旨を説明し始める。
つまり、一言で薪と言っても、充分に乾燥させ、すぐに燃やせるようなものと、生木に近いまだ水分を含み、火にくべても煙ばかりが大量発生する代物では価値が違って当たり前だということあたりの事情をだ。
（馬鹿じゃねえの、この女）
本気でいらいらしつつ、ファヴランは思った。
こんな、子供だって知っていることを、いちいち感心してうなずくだなんて、どこの箱入り娘かと、思ったのだ。

（態度だけ偉そうで、なにも知らない馬鹿だ、こいつ）

なのに、そんなやつにいいようにこき使われている自分が情けない。

そう、ファヴランの苛立ちの原因は、姫刀自の素っ頓狂な言動でも、ナウルニールの裏があるありな態度ではないのだ、実は。つまるところ、こんな連中の言うままに、あの恐怖の森への案内を果たさなければならない、自分自身の不甲斐なさゆえだ。

ただ、それを素直に認めるのも面白くなく、結果的に姫刀自のあら探しに終始してしまうことになったのだが、さすがにこれを口に出さないだけの分別は持っていた——人間誰しも命は惜しいではないか。

だが、完全に沈黙を守れるほど、彼は大人ではなかった。

「……ド僻地の村のなかではともかく、よくあんな世間知らずで出てきてから無事でいられたもんだよな」

心底から不思議に思ってそうつぶやくと、斜め後ろ——つまりは殿である——を歩いていたトリノアークが小さく噴き出した。

「トリノアークさん……？」

「いや、危機一髪というか、なんというか……」

首を傾げたファヴランを、トリノアークは手招きし、小声で恐ろしい話を聞かせてくれた。

なんと底無しの世間知らずであった姫刀自は、村を出て最初に立ち寄った大きな街で、あろうことか歓楽街の、色鮮やかに彩色されたきらきらしい——人によっては派手派手しいとも、

毒々しいとも表現するだろう――建物に一夜の宿を求めたのだそうな。
一般の宿屋と間違われることのないよう、花や鳥の絵が壁面を飾る建物といえば……まあ、その、男性専用の宿泊施設というやつで、女性客はまずいない。
そんな場所へひとりで入っていくなど、「わたしを好きにして」と言ってるようなものだ。
しかも、ファヴランにはそうは思えないが、姫刀自は人目を引く美女なのだ。タチの悪い相手に摑まったら、それこそその店の住人にさせられていたところである。
「あまりの珍客に、みんな驚いて、奥の女将が引っ張りだされたというわけだ。幸いにも筋を通す気性の女性でな。そのまんま彼女をどうこうしようとは思わなかった」
ほかの宿を探そうにも、すでに外は夜――。
そんなところへこんな目立つ女性を放り出しては、悪党の餌食にされるだけだと判断し、その夜は女将の部屋に泊めることにしたのだという。
「それで事情を聞いたら、神殿絡みだということで、翌日おれが呼ばれて、護衛をかねて神殿まで送り届ける役目をおおせつかったというわけさ」
（ははぁ、さすが世間知らず）
と、妙なことに感心しているファヴランの耳に、前方から声が飛びこんできたのはそのときだ。
「物事は正確に語るべきですよ、トリノ。まるでわざわざ神殿から迎えに行ったような言い方はちょっと狡くはありませんか？」

ちらん、と意味ありげな流し目をくれて、ナウルニールは悪戯を打ち明けるような口調でこうつづけた。

「このひとはねえ、当日その館に居合わせたんですよ。すぐに保護して神殿に連れて行けばよかったのに、女将が彼女を引き受けたことでひとまず安心とばかりに、一夜の甘い夢を楽しんだんですよ。ねえ？」

その意味するところがわからぬほどファヴランも子供ではない。

ファヴランは軽いショックを受けた。

（え？　あ、いや……トリノアークさんだって立派な成人男性なんだし、そ、そういうとこ行ったって、全然おかしくない……んだけど……）

なんだかがっかりしたのはなぜだろう。

彼は自分で思っているほどに割り切って考えられないという事実にまだ気づいてはいなかった。なまじ下町でそうした光景を日常茶飯事のように目にしてきたから、わかったつもりになっているのだということを。

「ナニィ！　わざわざ信頼関係にヒビを入れるようなこと言わなくてもいいだろうが！　おれたちはこれからしばらくの間一緒に旅する仲間なんだぞ！」

苦虫を噛み潰したような顔になって、トリノアークが文句を垂れる。

ファヴランが一瞬見せた――本人自覚はない――非難がましい眼差しに、多少の胸の痛みを覚えたせいで機嫌が一気に傾いたのだとは……後に聞いた話である。

「誤解の上に成り立った信頼関係など砂上の楼閣です。一度土台まで粉砕して、新たに構築してこそ本物というものでしょう。ねえ、ファヴランくん？　見た目格好いいからと言って、迂闊に尊敬したり憧れたりしちゃ駄目ですよ。このひとは、理想の女性を見つけるためなら、何万里だって旅できる気力と体力の持ち主なんですから」

理想の女性をひたすらに探す――それは男の純情と呼べないこともないのだろうが。

「……それで、理想の相手かどうか確かめるために味見して回ってるんだ……」

（さいてー野郎の相棒は、やっぱりさいてー野郎なんだ）

今度はその思いを隠そうとはしなかったので、トリノアークを見つめる目は自然に厳しいものへとなった。

金髪の青年が、実に悲しげに肩を落とした。

それを見て、くすくすと笑うナウルニール――明らかに楽しそうである。

「これこれ、ナウルニール。そのように連れをへこまして楽しむのは意地悪というものじゃぞ？　一晩だけとはいえ、あの女将から外の……こちらの世界の話が聞けて、わたしは楽しかったのじゃから。神殿に協力を頼んだら、わたしも見聞を広げようと思うておったのに、外に出してもらえなかったからな……トリノアークはわたしに思い出をくれたのじゃ」

なるほど、とファヴランは一気に得心がいった。

外へ出てきてほとんどすぐに、彼女は神殿に隔離されたのだ。

確かに、神殿側のその判断にはうなずける。知らず娼館に宿を求めて入っていくような女性

を、どうして野放しになどできるだろう。しかもそれが神殿にとっても重要な意味を持つ人物なら尚更だ。

（え？　って、ちょっと待て。それってもしかして……）

彼らは護衛、自分は案内人……それだけだと思っていたのだが――行き先が行き先だから、間違ってもたやすい仕事だとは思ってはいなかったが――もしかしたら、自分たちにはさらにもうひとつ役目を押しつけられているのではないか。

すなわち、姫刀自が世間知らずの好奇心ゆえにとんでもないことをしでかさないようにという……お目付け、というそれが。

なにやら一気に肩が重くなったような気がした。

多分、気のせいではないと、ファヴランは思った。

「なあ、素朴な疑問なんだけど」

と、前置きしてファヴランが話を切り出したのは、街の食堂での昼食時のことだった。

どの街にもまずひとつはある神殿を訪ねれば、賓客扱いされている姫刀自の一行ということで食事や宿の心配などせずにすむのだが、件の聖石が見つかるまでの間、ほとんど監禁状態に置かれていたように感じている姫刀自たっての希望で、食事も宿も市井のものを利用すること

となった。
　護衛ふたりは面倒が倍になると嫌がるかと思ったのだが、意外にも彼らは喜々としてこの決定に従った――後に理由はファヴランにもわかったのだが……神殿の食事は、粗末とは言わないが、あまり美味しい代物ではなかったのだ。
　さて、大衆食堂の隅のテーブルに陣取り、食事の注文をすませてから、ファヴランはすわ、と口を開いた。
「あの大きい琥珀って、聖石だって言ったよな？　おれ、聖石のお守り石なら何度か見たことあるけど、あんなに大きいのは見たことないぞ？　あの聖石が特別大きいのか？　それとも普通に売ってるお守り石は、あれをいくつかに割って加工してるのか？」
　ファヴランの疑問に、しかしテーブルを囲むほかの三人は、揃って酢でも飲みこんだような顔になった。
「聖石を……」
「割る……」
「なんて恐ろしいことを……」
　どうやらとんでもないことを言ってしまったらしいとは気づいたが、どこがどうとんでもないのかわからないファヴランはどう反応すべきか迷った。
「そもそも根本的なところを、この子供はわかっておらぬようじゃな」
　呆れたように姫刀自がつぶやくのを聞いて、ファヴランは思わず落ち込んだ――とんでもな

い世間知らずの彼女に、こんな風に無知を指摘されるのは、思った以上に堪えることだった。

「な、なにを……」

(娼館に宿を求めるような物知らずのくせにっっ！)

と、毒づきかけたが、結局その言葉は彼の口から飛び出すことはなかった。

トリノアークが教えてくれたのだ。

「あのな、ファヴラン。お前は聖石とお守り石のことを混同しているんだ。聖石の使徒でも子供でも、抱いて生まれてくる石はひとつきりだ。それを聖石という。いわゆるところのお守り石は、正確には聖石の子供石のことなんだ。聖石は持ち主と密接に繋がっているから、他人に譲ることはしない。割るだなんてとんでもない話なんだ」

後を引き取ったのはナウルニールだった。

「だからといって、聖石がみな大きいと限った話でもありませんがね。姫刀自の聖石は、確かに滅多にないほど大粒ですからね、だからこそ目をつけられたんでしょう」

まったく迷惑な話じゃ、と姫刀自は憤懣やる方ない顔でうなずいた。

「そもそも我が一族の聖石は、みな森に捧げたものじゃぞ。そんなものを盗み出して、祟られないはずがないと、なぜわからなんだのか……おかげでどれだけ浄めに時間がかかることやら……頭が痛いわ」

さらりと、とんでもないことを姫刀自が口にした。

「た、祟り……!?」

（聞いてないぞ、そんな話!?）

思わず身を引きかけるファヴランの様子に気づく風もなく、姫刀自はあっさりとうなずいた。

「盗んだ当人はもちろん、盗品と知りつつ買い取った者、さらにそれを盗んだ者……知らずに手に入れた者でもしまいこまれそうになる度に祟ったようでな。盗まれて半年足らずで、よくもここまでというぐらい……」

聞くのが怖かったが、聞かずにいるのはもっと恐ろしい気がして、ファヴランはそろそろと尋ねた。

「し、死んだの……？」

「死んだ者も……まあ、いたな」

（あっさり言うなーっ！）

ファヴランの心の叫びは、しかし同行の面々の耳には届かなかったらしい。

なんでもないことのように、真紅の瞳の青年が後をつづける。

「姫刀自、あまり脅かさないでやってくださいよ。大丈夫だよ、ファヴラン。怪我したり病気になったりはしたものの、命を落とすまでには至らなかったひとの数のほうが、まだ多いんだからね？」

ちっとも慰めにならないと思える自分は、もしかして小心者なのだろうか――とファヴランが間違った疑問を抱く寸前に、トリノアークがだめ押しとでもいうべき台詞を口にした。

「そうだとも。それにファヴランは運が良かったと言えなくもないんだぞ。悪心ない持ち主にはひどく祟ったりはしないし、ちょうどおれたちが近くにいたこともあって、ちょっと勘違いされたぐらいですんだろう？　事情ありだと気づいたとたん、厄介事は他人に押しつけようなんて了見を起こした不届き者の末路に比べれば……」

なんだろう……すごく爽やかに、恐ろしい話を聞かされているような気がする。

「それってまさか、おれに報酬代わりにあの石渡したひとのことじゃ……ないよね？」

縋る思いで尋ねたファヴランに、トリノアークは「しまった」という顔をした。

その後頭部に、見るからに容赦のないこぶしを見舞うその相棒――。

（もしかして……いや、もしかしなくても……）

「それって、お守り石どころかとんでもない祟り石ってこと!?　そんなモン持ってこれから旅しなくちゃいけないってこと!?　冗談じゃないよ！」

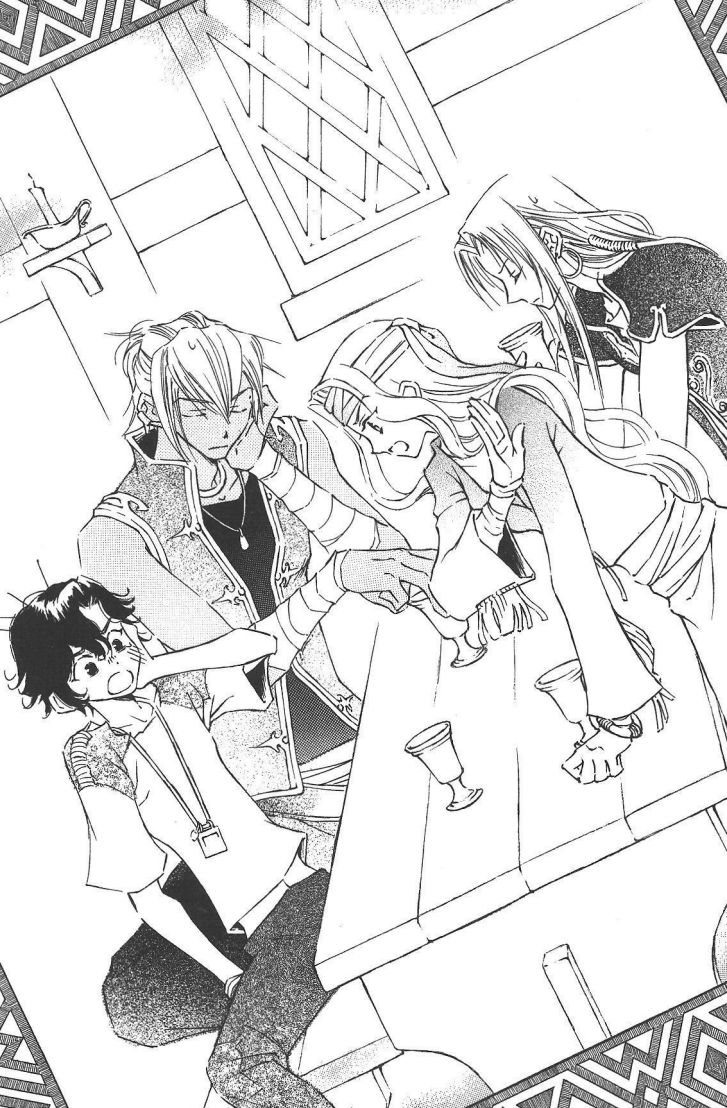
命いくつあっても足りないじゃないか！

心底から震え上がって叫んだファヴランの頬に、姫刀自の平手が一閃したのはその直後のこと。

「ひとの半身、祟り石呼ばわりするな、無礼者！」

「だって立派に祟り石じゃないか！」

ただでさえ、無事にはすまないと言われる迷わずの森に、一体どれだけひとの命を奪ったかもしれない――しかも未浄化の――祟り石を抱えての道中……。



（ぶ、無事にすむはずがないーっっ！）

ファヴランの懸念を杞憂と笑って切り捨てることのできる人間は、まず間違いなく強者と呼ぶに値する人物であったろう。

あるいは怖いもの知らずか……馬鹿な命知らずか。

最後にもう一つ、正真正銘の化け物という可能性もあったが、同行者たちの正体がどれであっても、ファヴランの心が安らぐことはなかったに違いない。

「いやだーっっ！　帰る！　おれは帰る！　おれはリィーシャを守ってささやかでも幸せに暮らしてくんだ！　命あっての物種なんだ――――っっ！」

きっぱりはっきり、逃げ出す決意を固めたファヴランは、しかし卑劣なる脅迫者のささやきに心を挫かれた。

「事情を知ったのに見捨てたりしたら、きっと、恨んで最大限に祟りますよ？」

極上の美女もかなわない、天の御使いもかくやという美貌の青年の極悪非道なささやきは、ささやかな幸福を願う少年の心を一瞬で打ち砕いた。

自分が悪魔に見込まれたことを、このときファヴランははっきりと自覚したのである。

6

祟り石の一件を聞いて以来、なーんとなくではあるが、イヤな予感めいたものは抱いていたのだ。

不運のすべてを石のせいにするつもりは皆目ないファヴランではあったが、道中で突発事故が多発する頻度が高いことにはさすがにすぐに気づいていた。

それが目を覆うような大惨事の類いであれば、すぐに石のせいだと断定したに違いないが、不運ではあるがまあ、こんなこともたまにはあるさ、と思えてしまうことばかりだったので、そうだと確信は抱けなかったというだけのことだ。

とはいえ、物事には限度というものがある。

馬の蹄に尖った小石がはまったことに気づかなかったせいで馬が足を軽く傷めたのを皮切りに、代わりの馬がなかなか見つからず予定が大幅に狂ったこと、仕方なく乗り合い馬車を利用して、最寄りの大きな街を目指したものの、途中で急病人が出たせいで、ルートを外れて近くの村に立ち寄ったこと等々。

ひとつひとつはごくごく些細な不運だが、こうも連続して起こるとなれば、（やっぱり、祟

りかも……）と思ってしまうのは人間の性というものではあるまいか。

特にこれまで、仕事においてもここまでアクシデントに見舞われたことのないファヴランとしては、つい疑わずにはいられなかった。なにしろ、同行者三人中、ふたりは聖石の使徒で、もうひとりも聖石の子供という、アスカニーリ神の贔屓受けまくりに違いない人物ばかり揃っていたのだから。

彼らが特別視されるのは、その生誕ゆえばかりではない。彼らは生涯ほぼ例外なく、地神の加護を受ける者として知られているのだ。

一行四人中三人がそんな人物でありながら、度重なる事故や不運に見舞われる……？

まずあり得ないことである。

ファヴランがそう思ってしまったのも無理からぬことだった。

ファヴランとて、特に迷信深いわけではなかったが、迷わずの森に立ち入った経験上、世界には人知を超えた不思議が存在することも認識していた。

だから、何度目かの不運に見舞われた際、恐る恐るトリノアークに向かって、「なあ、これってもしかして、例の石の祟りなんじゃあ……」とささやきかけてしまったわけだが、すかさず、地獄耳の姫刀自から平手一往復を食らってしまった。

「祟り、祟りと鬱陶しい！　お前は迷信爺ぃか!?」

十五の身空で爺ぃ扱いはひどいとは思ったし、これまでの所有者の少なくとも半数近くを死なせたり再起不能に陥らせたり社会的身分を抹殺させたりしてきた石なら、充分祟り石だとは

思ったのだが、そんな……もといその石を抱いて生まれてきた姫刀自の心境を思うだに、反論する気の失せた彼である。

（そらまあ、確かに、森に奉納された石が勝手に盗まれて、そのことに石と森が両方怒って……祟りが起こり始めたのって、その後のことだもんな。盗んで盗品流通に乗せたやつらが悪いっていうか、そんなやつらの手に渡らなきゃ、そんな物騒な副作用つかなかったって思えば、確かに石自体被害者っちゃあ被害者なんだけど……）

だから、その本来の持ち主である姫刀自が怒りを覚えるのも無理からぬことだとは思うのだけれど。

だが——しかしである。

「……でも、これって、充分と言うか、それ以外考えられないってぐらい、祟り入ってる……だろ？」

同意を求めて視線を向けた相手はトリノアーク。

鋼玉の使徒の片割れは、困ったような笑顔で降参した。

「いや、おれ、そういうの全然わからないから」

純白の髪と真紅の瞳を持つその相棒も、なぜだかそのときばかりは同調した。

「あ、わからないのはわたしも同じです——。そういった力とか作用に対する受信能力というか、認識能力、まず皆無なんですよね、わたしたち。感受性が一番優れてるのは姫刀自ですから、これが祟りかどうかってことは姫刀自ご本人のご判断を仰がなくては」

是が非でも「そんなことあり得ない」と信じたがっている彼女が認めるはずもないことを、知り抜いているはずのふたりの態度に、ファヴランは大いに困惑し、だがなぜだかそれ以上追及するのは不味いような気がして、それきり手控えしてきたわけなのだが……しかし。

「なあ……」

洒落ではすまない状況に置かれてしまった現在、彼は同行者たちに尋ねずにはいられなかった。

「これってどう考えても、不運がいくつかつづきましたって言葉で片づくモンじゃないよな!?」

閉門間際に滑り込むように入ることを許された街で、ようやく見つけた下町の宿——宿の主人の人相やら態度やらで、少々気にはなったものの、ほかに見つからなかったために、よしとせざるを得なかった、まさにその夜——。

「なんって、押し入り強盗にあわなきゃいけないわけ!? おれ、仕事でもっと貧相な宿に泊まったこともあるけどっっ！ こんなこと一度だってなかったぞっっ!?」

これ、やっぱり、祟り石のせいだろう!?

叫んだファヴランに、しかし同行者のうちふたりは、とんでもない答えを返してきてくれた。

「えー？ こんなこと、珍しくもなんともありませんよ、ねえ、トリノ？」

もうひとりの、なんとか信頼できると思っていた男性まで、同調したときは目の前が真っ暗

になるかと思った。

「まあ……確かにな。おれはともかく、こいつは無駄に見てくれがいいもんだから、それ目当てに本性も知らずに狙う馬鹿が後を絶たないってのは厳然たる事実だ」

「なんですか、その本性ってのは!?」

角突き出した相棒の青年の、一見他人の共感を得やすそうな疑問は、しかし一瞬後の本人の行動によって払拭された。

なんと、である。

「なに、ぐちゃぐちゃ呑気にくっ喋ってやがんだ！」

との罵声も高らかに、恐らく中肉中背と呼ぶには少々背が高いとは言え、同行者のもうひとりの青年に比べれば、華奢と言っても差し支えないナウルニールのほうが付け入る隙有りと判断したらしい賊のひとりが襲いかかり――。

「ナニィ！」

切迫したトリノアークの声があったものだから、賊の振り上げた剣が、ナウルニールの体を傷つけるに違いない瞬間を、確信すらして、だが見たくないと心から思っていたファヴランの目前で、しかし予想外の出来事は起こったのだ。

帯剣しているのは知っていた。

だが、見るからにその鞘は細く、長さもあまりあるようには見えなかったから、あまり力のないひとが、それでも使えるように頼んだ剣を携えているのだと思っていたのだ。

それが、ところが――抜かれた刀身ときたら、だ！

「……詐欺だ……」

呆然と、ファヴランがつぶやいたのも道理、どう考えてもその鞘におさまるはずもない幅と長さを誇る大剣だったのだ！

（絶対、なにかが間違ってる！　もしかして、なんかの手品なんじゃ……!?）

そうでもなければ説明できない。

そうだ、そうに違いない――と思いかけたファヴランの耳元に、ささやきを落としたのは、彼にとっては実に意外な人物だった。

「錯覚でも手品でもないぞ？」

姫刀自だった。

「え……!?」

それはどういうことなのかと、尋ねる機会をファヴランは逸した。

なぜなら、あり得ないサイズの大剣を、小振りの鞘から抜き出した非常識に関することならともかく、その発言者の言葉の内容は、あまりにあまりすぎたのだ。

「ナニィ！　狡いぞ！　独り占めする気か!?　そもそもこんな雑魚相手に、わざわざ本命抜いて見せるこたぁないだろうが！」

心底忌ま忌ましげに……というより、悔しげに、だろうか……？　――叫んだトリノアークは百戦錬磨の戦士には見えなかった。

逆の意味で――賊十人近くをあっというまに地に伏せたナウルニールは、すぐにでも「暗黒世界の帝王」になれそうだとファヴランは思った。

案の定というか、なんというか……。

「なに言ってるんですか。本当にやばい相手の前で、こんな冗談できるはずないじゃありませんか」

血しぶきたっぷり、血だまりあちこち、血臭なんて満々の状態の、洒落にならない部屋のなかで、さも不満げにそう返したひとの姿を目にした途端、ファヴランは同行者三人を人間の範疇に入れることをきっぱり止めることに決めた。

なにしろ、だ。

「当たり前だろう、本気の修羅場でそんな悠長な真似やってたら、即座にあの世行きに決まってるじゃないか」

と、どこまでが本気でどこからが冗談なのかわからないことを、一見大まじめにトリノアークは口にするし。

「だからって、あなたにばっかり任せていたら、時間ばっかりかかっちゃいますし」

ナウルニールの言葉はなにげに不穏だ。

「……人聞きの悪い……おれは別に弱いやつを無意味になぶるような真似はしたことないぞ!?」

「ええ、はい、そうですとも。わかってますとも。ただ、楽しく楽しめそうな相手が見つかっ

た場合に限って、より楽しく戦うために手間隙かけて力を引き出すつもり満々になって、実行に移すだけのことなんですよね？　たまーに連れの存在だとか、その安全だとか、忘れてしまうという、うっかりミスを犯してしまうってだけのことなんですよね？」

さらに耳に飛び込んできたナウルニールの言葉が、より不穏に聞こえたのは気のせいだろうか。

（す、少なくとも、トリノアークさんだけは常識人だって信じていた……いたかったのに）

しかし、この状況では到底無理な相談である。

そうしてよくよく考えてみれば、だ。

（おれってもしかして、常識の通じない、猛獣並みに危険なやつらと一緒に行動してるってことなのかーっ!?）

だとしたら、この命は。

（考えるまでもなく風前の灯火というやつでは……）

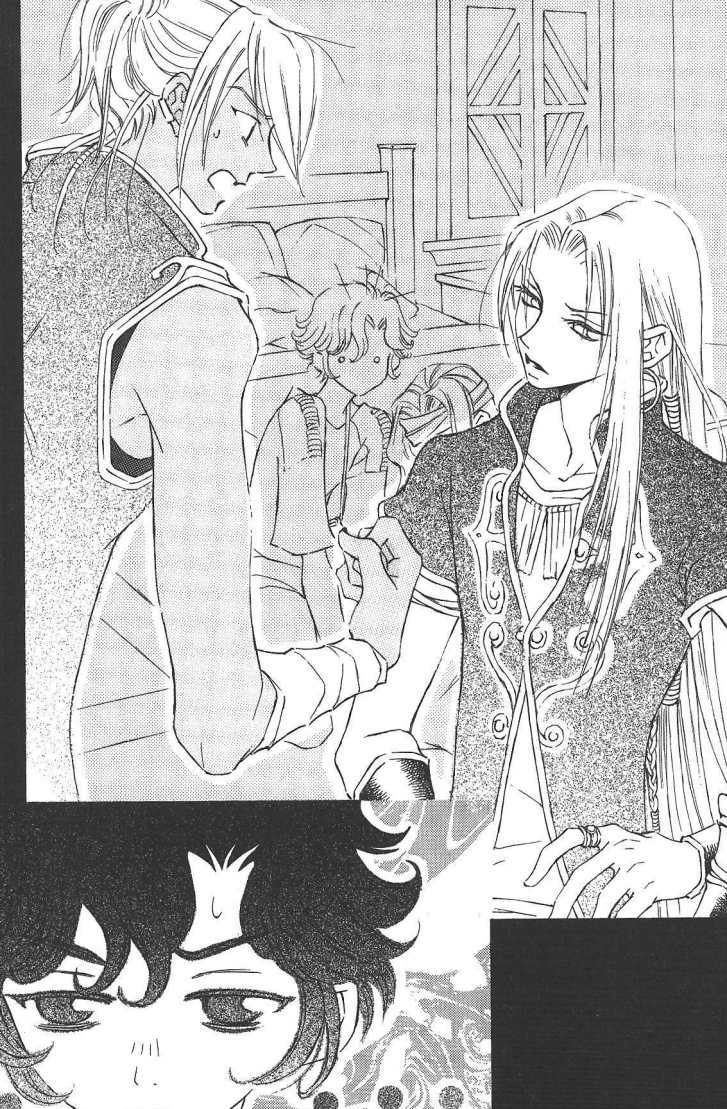
神殿に対する信仰は、この時点でほぼ潰えていた。

だが、目眩（めまい）すら覚える状況で、姫刀自の顔色が悪いことに気づいたのは幸いだったのやら、不運だったのやら――。

思わず駆け寄り、ファヴランは尋ねた。

「だ、大丈夫!?」

「大丈夫じゃ」



言葉こそしっかりしていたものの、口調は多少頼りなかった。
「どう……どうしたんです!?」
慌てふためくファヴランの様子に、姫刀自は逆に驚いたように目を瞠った。
「そなたこそ、一体……!? いや、つまりはそういうことか!?」
意味不明のつぶやきに、救いを求めるかのごとく、ファヴランは聖石の使徒二人を見つめたわけだが……悲しむべきことに、効果は一切なかった。
なぜなら、二人は二人して、好き放題に、血なまぐさい話に熱中しまくっていたのだから！
「だから、あなたが、己の道を究めるために、わたしのことを一見無害そうな囮として利用する件に関しては、なんら文句はないと言っているでしょう!?」
「なにを言ってるんだ!? お前が横取りしたりしなきゃ、その手の問題だって起こさずにすむ問題なんだってこと、本当に頭に刻んでんのか――っっ!?」
「わたしだって切実ですとも。腕は磨かないではさびる一方ですし。あなたに譲ってばかりいては、こちらの腕を磨く機会がなくなってしまいますからねえ」
（なんか……なんだか）
と、一瞬「このひとたちって」と思ってしまったのは正しかったのか否か――。
（う、ううーん？）
躊躇うファヴランの意識に、入りこんでくるそれがあった。
苦しげな……息も絶え絶えな……。

（姫刀自？）

「く、苦し……」

自らの喉をかきながら、苦悶を訴えかけつづけてくる彼女のあり方が、一番気にかかった。

というか、なにより気になった。

だから、ファヴランはまず真っ先に外気を取り入れるための――窓を求めたのだ。

まさか、それこそを狙われているとも知らずに。

「……この、血臭が元凶なんだ！」

叫ぶと同時に、ファヴランは宿の窓を開けるために走った。

姫刀自を、強烈な血臭から解放するために、彼は窓に駆け寄り、そうして開いた。

夜の、水気を含んだ新鮮な空気が、窓から入り込んでくる。

姫刀自の呼吸が、ほっと楽なものに変わった。

そのことに、確かに一瞬安堵した。

それは果たして罪だったのか。

それとも一瞬たりとも気を許したことこそが罪だったのか――。

首にまきつき、しめあげてくる鞭に指を絡めながら、ファヴランは思考する……。

7

（落ちるっっ）

思ったときにはファヴランの体は窓から転落していた。

不思議なもので、そういうときに限ってなぜか、視界が鮮明となり、しかも音がはっきりと聞こえる。

おまけに時間まで、やけにゆっくり流れているようにさえ感じられて、不思議だった。

（あれっていわゆるところの、死の直前に、それまでのことが走馬灯のように……ってやつだったんじゃ……）

とは、後に思い返した際、考えついたことなのだが、幸いというかなんというか、このときファヴランはそんなことには思い至らなかった。

ただ、いまは夜だというのに、やけにくっきり見えるなあ……あの宿、そんなに上等の蠟燭使ってたっけ？　などという、実に埒もないことだった。

窓から身を乗り出すように、姫刀自が自分を見ているのが——まず最初に気づいたこと。

（窓開くの待って、下から襲ってくるやつがいるってわかってるくせに、なんでそんなに身、

乗り出したりするかな？　危ないことぐらいわかれよ）

それとも、自分にはそうした攻撃は来ないと確信しているのだろうか。

確かに、ひとに言わせれば、あの女性はひときわ目を惹く美女らしいから、そこに値打ちを見いだした賊が、それを台無しにするような真似をするはずがないと言われれば、確かにその判断は正しいのかもしれないが。

（だけど、なんかの間違いってことだってあるかもしれないんだし……）

ほんっと、世間知らずで馬鹿なんだから――。

そう呆れながら思ったとき、別の声が自分の名を呼ぶのが聞こえた。

「ファヴラン！」

トリノアークだった。

次いで、聞こえてきた声はナウルニールのもので――けれどそれは、自分を呼ぶものではなかった。

「風の精霊！　イーオダールの神子たちっっっ！」

ああ、あのひとの真剣な声って、もしかして聞いたの初めてかも……と、やはり埒もないことを考えたファヴランは、次の瞬間、奇妙な錯覚に襲われた。

「「風の精霊！　イーオダールの神子たちっっっ！」」

「「「風の精霊！　イーオダールの神子たちっっっ！」」」

「「「「風の精霊！　イーオダールの神子たちっっっ！」」」」

同じ声が幾重にもかさなり、しかも何度も繰り返される——不思議。
あり得ない……では、自分は石畳に叩きつけられる恐怖に、すでに意識を手放してしまったのだろうか？　そうして夢のなかで、最後の記憶を繰り返しているというのか。
何度も、何度も……それこそ——のように？
多分そうなのだろう、とファヴランは思った。
そして、呑気にも、そのことを残念に——正確にはその繰り返す内容に関して——思った。
（どうせ同じなら、リィーシャの声で聞きたかったよな……）
頭から石畳に叩きつけられようとしている人間のものとも思えぬことを考えながら、声ではないなにかに呼ばれたような気がして、閉じかけていた双眸を開いたファヴランは、思いがけない——しかもあり得ないものを目にして、一瞬にして瞠目した。
それは——見知らぬ、けれど、よく知っているような気がしてならない面影の少女の顔、だった。
豊かな波うつ緑の黒髪。
日に焼けた、健康そうな小麦色の肌。
おっとりした性格を思わせる、丸く大きな円らな瞳には、けれど生気に満ちた力強い光がきらきらと宿り、輝いている。
なによりファヴランの心臓を直撃したのは、彼女が自分に向けた極上の笑顔だ。
蕩けるような、蕩かすような——極上の蜜を思わせる……笑み。

そうして彼女は、彼の名を呼んだ――このうえなく優しくしっとりと……甘美な誘惑も含めて。

「ファヴラン」

と。

ただ、それだけの言葉――それ以上、つづくそれはなかったけれど、聞こえたような気がして、彼は「うん」とうなずいた。

「うん、戻るよ」

それが、ファヴランの最後の記憶――彼が再び意識を取り戻したとき、彼は改めて驚くことになる。

さまざまな、意味で。

ちょっと目先のお楽しみを満喫してしまったのは、鋼玉コンビにとって、まさに痛恨の極みと言えた。

やってやるぞという気配がわらわらと近づいてくるのを幸い、ここはちょっとひと遊び――と期待したのは実のところ、退屈しきっていたからだ。旅の終盤こそ退屈する暇もなくなるぐらいに忙しくなることがわかってはいても、いまの退屈をありがたく思えるほど、彼らはでき

た人間ではなかった。

楽しめる機会があるのなら、楽しまなければ損とばかりに、少々羽目を外しすぎたらしい。すでに祟り石と化した——無論、厳然たる事実であっても、姫刀自の前で口にするつもりはなかったが——琥珀の聖石が、血臭や殺気に敏感に反応するだろうことは、予想してしかるべきであったのに、だ。

聖石と、ともに生まれた人間との絆は強い。聖石が穢されたことによって、正気を失した者も少なくはない。しかも両者の距離がここまで近い状態にあるのでは、聖石の状態に彼女が引きずられないはずがなかったのだ。

楽しみすぎて、そのことを失念していたのは不覚としか言いようがない。

だから——彼女の様子がおかしいことに気づくなり、窓に駆け寄ったファヴランには、心から感謝した。同時に、根っからまっとうで善良な少年なのだと微笑ましくも思った。

まさか、それが、あんな事態を引き起こそうとは！

窓の外からのびてきた鞭に首をしめられた格好で、少年の体が落下したとき、ナウルニールは迷うことなく、常に身につけている細い蔦の腕輪を引きちぎった。そこには穴を開けた聖石の子供石がついている。

その石は青玉——色は極上の矢車菊の青。

青は木性に通じ、聖石の子供石は精霊に殊の外好まれる。

つまりナウルニールは青玉の子供石を窓の外に放り投げ、風霊に呼びかけることで、その助



力を請うたのだ。

「風の精霊！　イーオダールの神子たちっっっ！」

と――。

極上の矢車菊の青を纏う聖石の子供石は、ごくごく稀少な上、宿る気配や力もあって、風霊たちには大人気を誇る。これまでこれを投じて、頼み事を聞き届けてもらえなかったことはない。

ナウルニールとしては、これでファヴラン少年の体を空中で受け止めてもらい、ついでに屋外に待機中の賊からその身柄を守ってもらえると思ったわけなのだが。

その直後に起こったことは、さすがに想像もできなかった。

「「風の精霊！　イーオダールの神子たちっっっ！」」

叫んだ自分の声が、再度耳に届いたときは、気のせいかとも思ったのだが。

（そんな……二日酔いの朝でもあるまいに……）

ここで、（高い山々に囲まれた山頂でもあるまいに）と考えないあたり、彼と相棒の日常が窺い知れるというものである。

しかし――これがどうやら、気のせいではなかったのだ。

「「「風の精霊！　イーオダールの神子たちっっっ！」」」

精霊に対する感受性の鈍さにおいては、相棒とともに神殿認定の使徒中史上最低であることを自他とも認めるナウルニールにさえ、それとなく風霊たちの動きが活発化しているのが感じ

取れるのだから……ただごとではなかった。
止めは、その直後に来た第三波だ。
「「「風の精霊！　イーオダールの神子たちっっっ！」」」
その声の強さと、それに応える風霊たちの張り切りようは、発したナウルニールの予想も期待も大きく上回る――上回りすぎる代物だった。
鈍さでは引けを取らない相棒が顔色を変えて「おい、ナニィ！　お前、なにやらかしたんだよっ!?」と怒鳴ってきたのがいい証拠である。
そんなことを聞かれたところで、ナウルニールに答えられるはずがない。
慌てて窓に駆け寄ったところ、すでに姫刀自という先客がいたため、その邪魔にならぬよう身を乗り出してみたところ……目に飛び込んできた光景は、かなり、けっこう、強烈だった。
落下したファヴランがどうやら無事らしいのは見て取れた。
首にまきついていた鞭もちぎれているようで、だから襲撃者による被害はまず考えずともよかろうとは思ったわけだが。
（しかし、これでは……）
後ろ暗いことに血道をあげている連中のことだから、正規の司法の場に訴え出ることなど、まず考えなくともかまわないとは思うのだが……それでも、かけらぐらいはそのことを心配したくなってしまったナウルニールである。
彼が叫んだ言葉にこめた思いは、咄嗟のこととということもあり、単純明快なものだった。と

ころがそれは何らかの意図を持つ存在の介入で、再三再四繰り返され、それ以上の効果を呼ぶことになってしまった。

宿の外では、不幸にもこの異常事態に行き当たった人々が、目を白黒させていた。

致し方ないことと言えよう。

突然、目にも見えない刃に全身を切り裂かれ、絶命した人間がそこかしこに出現したというのであれば。

近づいてくる殺気や、そばで控えてるだろう害意の主の気配が、綺麗さっぱり消え失せたことだけはわかる——命のやりとりに関する気配だけは、例外的にナウルニールもトリノアークも子供のころから敏感にできているのだ——鋼玉コンビは、今回の賊一党が全滅したことだけは確信してしまえたのだが、わからないことが多すぎた。

どのみち、こんな大騒ぎとなっては、「市井の暮らしを楽しみたい」という、姫刀自の望みばかりも優先してはいられない。

「姫刀自っっ！　あれはなんなんですかっっっ!?」

事前情報のないことの上に、あまりにも予想外のことが起こったことで、百戦錬磨と評判の鉄壁の双使徒の片割れも、平静ではいられなかった。

対する姫刀自は、泰然としたものだった。

件の惨状にも心乱される様子もなく、彼女は粛然とこう告げた。「あれは、お守りだ」

8

「お守りだ、だけではわかりません、姫刀自！」

ファヴランの意識を覚醒させたのは、ごくごく珍しくも焦りも露な声で詰め寄るナウルニールの言葉だった。

（あれ？　おれ、なんで……）

ゆっくりと瞼を開くと、見覚えのある天井が目に入った。

さっき入ったばかりの宿のそれだ。主人の趣味で描かれた天井画は、部屋に入るときに目にし、思わず「うっ」と目を逸らしたくなった代物だったので——しかも聞いたところ、各部屋ごとに絵のモチーフは違うという話だから、まず間違いないだろう……どうやら同じ顔が重複していることはありそうだが。

天蓋つき寝台など、無駄と贅沢の極みと思っていたが、実にこの瞬間、ファヴランは生まれて初めて、その無駄さと贅沢さを心から求めた。

宿屋の主人の力作であるところの宗教画には、ありがたみの一片も感じられない上——なにしろふくよかすぎる宿の女将の顔と体格のアスカニーリ女神と、主人そっくりのあばた顔の火

神イイタール、さらにはその周囲を、両親とは似なかったことが幸いとも言い切れない、貧相で顔色の悪いこの宿の跡継ぎ息子が、火霊と思しき装束を身につけ、大量に飛び回っているという図柄なのだから。

素人の下手の横好きが高じて描かれた大作は、描いた本人には申し訳ないが、決して宿泊客の心を慰撫するものではなかった。

（ま、真下から見ると、ますますすげぇ……）

目を閉じ、視界から天井画を消すか、姿勢を変えることで別の対象を目に入れるか――迷ったあげく、ファヴランは結局後者を選んだ。

衝撃度だけは抜群の天井画は、目を閉じたぐらいでは脳裏から消えてくれなさそうだと判断したからだ。

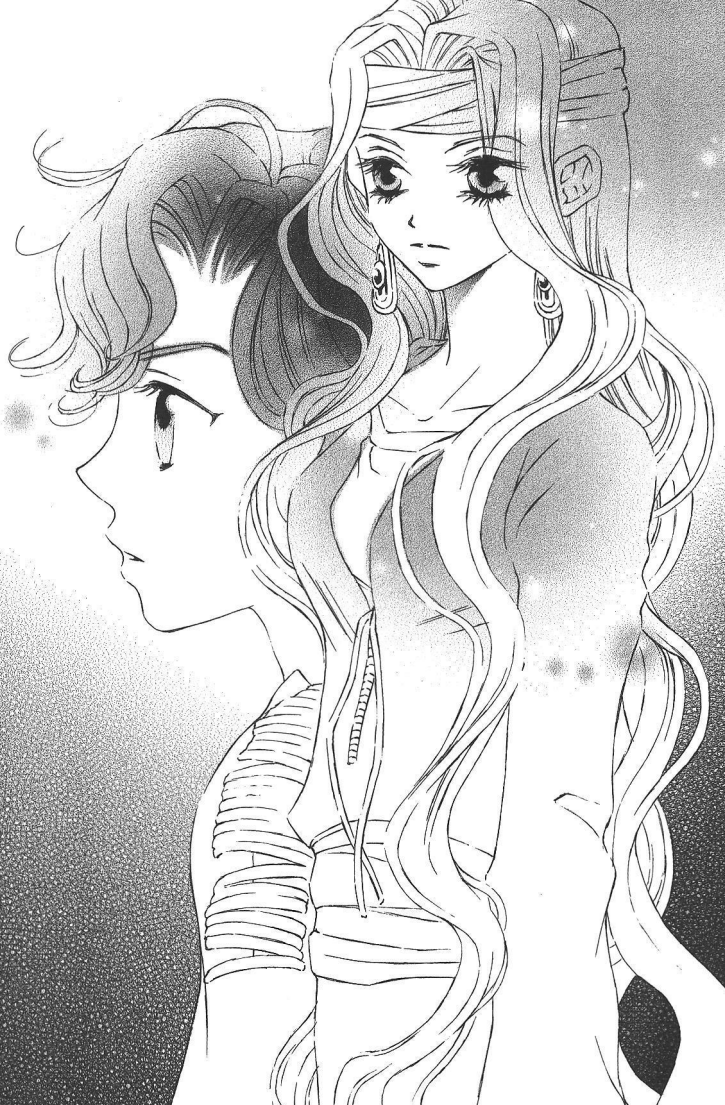
はたして、その選択は正しかった。

半身を起こした彼の目に入ってきたのは、外見だけは申し分ない三人の美男美女だったのだから。

いや、覚醒直後に見たモノのインパクトがあまりにすごすぎたため、ファヴランはこのとき初めて姫刀自の美貌を――最初に受けた印象を払いのけて――認めることとなったのだ。

……多分に頭がぼぉっとしていたせいだとしても。

さらにそのせいで、両者のやりとりが、あまり穏やかならざるものであることにも気づけずにいた。



「で、す、か、らっっ！　最低限の情報はいただきたいと……いただかなければお引き受けしかねると、最初に申し上げたはずでしょう!?　あなたの一族とあの森の特殊な繋がりを、まるで知らないようでは危急の際に対応できないからだと！」

珍しいものを見た、と思った。

（なんか……怒ってるみたいだ。意外ー。こいつ、姫刀自の我が儘にもイヤな顔ひとつしないでへこへこつきあってるとばっかり思ってたのに……）

事実、出会って以来ファヴランが目にしたナウルニールは、常にそう振る舞っていた。

彼女のどんな馬鹿げた質問にも丁寧に答え、旅程がずれるような我が儘もある程度は応じていたため――残る『かなえられなかった姫刀自の我が儘』の分に関しては、ファヴランとトリノアークの言い分が通った結果といえるので、ナウルニールが拒んだ事例はない――すっかり彼は姫刀自の言いなりなのだと思い込んでいた。

まさか、こんな厳しい口調で彼女を問い詰める場面を目撃する日がくるなどとは、本当に夢にも思わなかったのだ。

よほどに激しているのか、ナウルニールはファヴランが起き上がったことにも気づいていない様子だ。

「あなたは村からも森からも、何一つ持ち出しては来なかったと、確か誓言されたのではありませんか!?　ただ森に奉納された聖石を取り戻し、村に戻りたいだけなのだと！」

ぼそりとしたトリノアークのつぶやきだけが、なぜか鮮明に耳に残った。

「……確か、それがかなわなければ祟り石と化した聖石ははてどなく災厄をまき散らす上に、怒り狂ったあの森が、なにをしでかすかわからないようなことを、一緒につけくわえてたとともに聞いた記憶があるだが……」

声のした方を振り返れば、いつのまにかふたりから離れ、自分のすぐそばにたたずんでいた金髪の青年に突き当たる。

わけもわからずにいる自分の補足役としてついてくれたのだとは、このときは思ってもいなかったのだが、それでも……いや、だからこそ、か、「なんか険悪になりかかってるんだけど止めなくていいの？」という気分になったのは否めない。

そんなファヴランの心中に気づいたのかどうか、一瞬だけトリノアークはファヴランに視線を向け、安心させるような笑みをたたえた。

まるで「大丈夫だよ」と言われたような安堵感に見舞われ、ファヴランは自分が幼い子供に立ち戻ったような思いを覚えた。

恥ずかしかったし……なにか悔しかった。

なぜかは、そのときはわからなかったけれど。

「その言葉を信じたからこそっ！　神殿は我々にあなたの警護を依頼し、我々もそれを請け負いました！　けれど、先程のようなお守りを、あなたが持っているというのであれば、話は別になるんですよっっっ!?」

ファヴランとしては、新発見以外の何ものでもなかった。

（はー、ナウルニールが怒ってるよー？）

それだけでも驚きなのに、相手が姫刀自とあっては極めつけだ。

考えられることはふたつ。

誠心誠意尽くしていた相手に隠し事をされていたことを知って、裏切られたと逆上したという線か――。

もしくは予想外の事態に、理性もなにもなく取り乱してしまったのか――だ。

少なくとも、ファヴランのこれまで積んできた経験値で、読み取れるのはそこまでだった。

うるさい目付役がついたものだと、自分たちが姫刀自と呼ぶ女性が思っていることに気づかぬナウルニールではなかった。

隔絶された秘境とも呼べる場所からやってきた女性。

助力をこちらに求めながら、自分たちのことは最低限しか明かそうとしない身勝手さ。

そのくせ、己が請うた協力を拒まれるはずはないと確信する傲慢さ。

それはかつて、どこかで見たことをそっくり再現されるようなリアルさで、同時に気持ち悪さも……嫌悪感をも伴う感覚で。

ナウルニールの古傷を、暴いた。

それでも、我慢できるものだと思っていた。
過信していた。
だが、そうではなかった。
我慢してつきあってやってるつもりでいた相手から食らった裏切りに、全身の血が逆流しそうな怒りを覚えた。
しかも、それを平然と告げられたときなど――。
「本当に、わたしに心当たりはないんだ」
ただし――と、彼女は付け加えた。
「森の樹木のなかには……まあ、聞いているとは思うが、あの森は普通の森とは違うこともあって……人間に……特にうちの村に生まれた子供に寄り添い、守護を与えたがる変わり者が……まあ、たまに」
現れるんだ。
平然と告げる女性を前にし、本気で殴りたい、とナウルニールは思った。
迷わずの森は、普通の森とは違う。
妖の棲む森なのだ。
元来アスカニーリに子供はいない。子の生み出した子供たち――精霊も、だから当然いないわけで……地霊はそもそも存在しないのだ。
代わりに彼女は姉妹や甥たちと協力し、あるいは助力し、この世界の大地を豊かにすること

に努めてきた。

世に言われるところの『大地のもたらした祝福』とは、まさに女神自ら与えたものなのだ。

神殿に籍を置く者以外には、不思議と知られていないのは、ひとびとが疑問もなく「火にも水にも風にも精霊がいるのだから、大地の精霊もいるに違いない」と思っているからに過ぎない。

だが、唯一子を生まなかった、始原の女神の娘であるアスカニーリは、その特異性ゆえか、不可思議な特性を稀に大地に与える性質を抱えこんでしまった……らしい。

らしい、というのは、神殿が長年取り組んでも、いまだにそうと確信できるだけの証拠が見つからないからだ。

充分に疑わしく、そうとしか思えない状況であろうとも、そうと断定するには至らない——そうした事例があまりにも少なすぎるせいだという声もあるが、ナウルニールは——彼だけは、それが事実だと知っている。

なぜなら、彼自身、そうしたアスカニーリ女神の力を不可思議な形で、恵みとして受け取った里に生まれた身であったからだ。

そうした土地が、さらにはそこに住まう者たちが、世界中にいくつか存在することを、彼は知っており、そこの住人と出会うことを、恐れつつも……望んでいた。

そうして、偶然にもめぐってきたこの機会——。

話を持ち込まれたとき、真っ先に浮かんだ考えは（やだな、会いたくない）だった。

同じ女神の不手際のせいで、苦労させられる同志が相手をわかっていたら、是非会いたいと思ったろうが、自分を取り囲んでいた世界の住人の大半を思い出すと、その同類とは絶対会いたくないと思ってしまった。

だから、得意の滑らかな舌先三寸で、うまく煙にまいたあげく、結局断る線を突こうと、そう考えていた矢先にである。

いつもはやることなすこと考えなしで、ある意味彼の邪魔になぞならないはずの相棒が、珍しくも口をはさんできたのだ。

「いいじゃないか、受けようぜ」

と――。

この考えなしは引っ込んでなさい！

即座にそう叫ばなかった自身の理性を、後にナウルニールは感謝すべきだったのか、それとも恨むべきだったのか、深く悩むことになる。

ただ、そのときは――「なに、馬鹿なことを！」と反駁する気満々で、食ってかかろうとした彼に向けられた、本当に静かな眼差しに一瞬言葉を失ったわけで。

会ってみたら、やはり『姫刀自』なる人物が、自分と非常に似通った環境に生まれ育ったことを確信できてしまって……相棒にも言わなかったことだけれど、彼は一晩、悩みに悩んだのである。

すなわち、絶対的生理的嫌悪兼恐怖に従い、天ほどにも高い矜持をも打ち捨てて――もちろ

ん、そのなかにはかけがえのない相棒の存在も含まれていた——逃げ出し、彼女とは無縁の日々を選びとるか。

もしくは敢然と困難に挑戦し、堂々と克服する道を選ぶか、だ。

結局、すべてを捨てるほどのことではないと——彼には珍しい物惜しみした結果なのだが——判断し、さらには幾ばくかの好奇心もあって、今回の依頼を引き受けたわけなのだが……心底失敗した、と思った。

(彼女は、なにもわかっていない……)

アスカニーリの恩恵——ナウルニールには、とてもそうは思えないが——を例外的により多く受けた土地が、いったいどういう目で世間に見られるものか。

それが、いかに他者の好奇心をそそるものなのか。

あんな特異すぎる力を持つことが、知られたらいったいどんな事態を引き起こすことになるか……恐らく彼女は考えもしないのだ。あまりにも、そうしたものを身近なものとして認識しているがゆえに。

(世間知らずなのは重々承知していたが、あんな物騒な秘密兵器を隠していたとは……)

頭痛を覚えながら——それでも、その秘密兵器の威力に怯まないあたり、彼の心臓も強靭にできている——ナウルニールはため息をついた。

「いいですか、姫刀自。村の秘蹟をすべて教えろと言っているわけではないんです。ただ、その不当に傷つけられた聖石を癒すためにも、一刻でも早く帰郷なさりたいわけでしょう?」

ちなみにそれは、樹翁大陸の神殿上層部全員の願いとも一致している。
取り扱いに注意を要する爆弾が、世間知らずのまま、ふらふらうろついていたのでは危なくて仕方ないのだ。
かなりあからさまなナウルニールの皮肉まじりな台詞に、しかし気づいた様子もなく、姫刀自は大まじめにうなずいた。
「もちろんだ」
「ならば、自重してください。あんな力を持っていることが知られたら、どこの誰が悪用するために狙ってくるかもしれないんですから」
そう……世界は育まれ、人間も成長し――その過程で純粋な信仰心を失った者も少なくはない。
それでも大半の人間は、神々への畏敬の念を忘れてはいないのだが、すっかり失ってしまった輩が存在するのも事実なのだ。
神への畏れを忘れた心は、たやすく欲望の前に転ぶ。
力を望む者にとって、先程見せられたあの力は、強烈すぎる誘惑としかならない。それを手に入れるためなら、手段を選ばない輩も出てくるに違いないのだ。
そうした連中がなにをしでかしてくれるのか、考えるだけで頭痛がするぐらいだというのに、当事者である姫刀自は、ことの重大性をまったく理解できていない様子で、不機嫌そうに眉宇を曇らせたのだ。

「わたしのせいではないぞ」

むっつりとして言い放たれた一言に、ナウルニールは頭の血管が切れるかと思った。

「あなたの意志であろうとなかろうと、あそこで起こったことはあなたの責任だと言っているんです！　わかっておいでですか、木霊の存在は、決して外に洩れてはならない極秘事項なんですよ!?」

それでも、姫刀自は不満そうにつぶやいた。

「わたしのせいではないと言っているのに……」

「まだ言いますか!?　あなたの一族とあの森の運命は一蓮托生、運命共同体でしょうが。その森の落とし子が引き起こした事態なら、あなたが責任を取るべきでしょう!?　次代の刀自でもあるあなたには、その義務があるはずです」

違いますか――？

ナウルニールの言葉に、今度は姫刀自も反論しなかった。

少し考えこんだ後、ぽつりと洩らした。

「なるほど……確かに身内の管理教育も、務めのうちじゃな」

どうやらわかってくれたらしいと、これでもう、あのような心臓に悪い騒ぎは繰り返されまいと、ほっと胸を撫で下ろしたナウルニールは、しかし次の瞬間首を傾げた。

（なんだ？　さっきまであれほど姫刀自に腹を立ててたはずなのに……）

いつのまにか、怒りは消えており、統治者としての責任と義務を姫刀自が受け入れたことに

安堵を覚えている。

一部の例外を除いて、他人に深く思い入れしたことのないナウルニールは、その不自然さに首をかしげ、原因究明に没頭した。

そのため、彼は気づけなかったのだ――そんな彼の目の前で、なんらかの思いをこめた眼差しを、姫刀自が彼ではない別の誰かに向けていたことに。

後に姫刀自に平謝りする羽目になることとも知らず、ナウルニールはしばらく疑問符の山と取り組んだ。

結果は……認めたくはないものの、完敗に近かった。

9

事件の規模が規模であったため、一行の予定は当然変更を余儀なくされた。

街中で突然風に切り裂かれ死亡した男たちの数が、さすがに偶然ですまされるものではなかったせいだ。

皆、揃いも揃って札付きの悪党であり、街の住民の大半が「いなくなってくれて清々した」と思ったとしても、十人近い人間が、突然かまいたちに切り裂かれ、命を落としたとあっては街の役所としても調べないわけにはいかず、結果としてその一味に狙われていたと思しき——現に宿にも襲撃を受けていたのだから言い逃れはかなわなかった——ファヴランを含む姫刀自一行が、足止めを食らったのは致し方ない成り行きだったといえよう。

最初に呼ばれたのはファヴランで、覚えていること全部——意識を失う寸前に見た夢に関しては告げなかったが——打ち明けると、ほとんど問い返されたり突っ込まれたりもせずにすんだ。

とはいえ、逃亡を危惧してか、宿に戻ることは許されず、役所の待合室に放り込まれたわけなのだが。

口裏を合わされては困るとでも思ったのか、ほかの面子はそこにはいなかった。

（あー、まあ、おれはほとんどおまけ扱いだろうからな）

神殿に認められた聖石の使徒でもなければ、迷わずの森深く、ひっそりと暮らす謎多き里の住人たちの長の血脈に連なる者でもない。

単に偶然で、迷わずの森に足を踏み入れ、運良く生還しただけの、ただの子供なのだから……。

そう思った瞬間、ちくりと心に痛みが走った。

針で刺されるような強烈なものではない。けれど、無視するほどには弱くはない痛みの刺激――それは、誤って棘で指を突いたときのそれに似ていた。

自分だけが、結局のところ部外者の立場に置かれている。

それが……そのことが。

思考がひとつの答えを導き出す前に、ファヴランはぶるんっ、と大きくかぶりをふった。

（悔しいだとか、悲しいとか、断じてそんなこと思っちゃいないぞっっ！　大体、おれはリィーシャと静かに穏やかに暮らしていけたら、それだけでいいんだからっっ！　それだけが望みなんだから……今回のことだって、あんな派手で目立つ連中とつるむ気なんてなかったんだし……そうだよ、なのに脅されて無理やり協力させられることになって……完璧、被害者じゃないか！）

そして彼は深く心に誓った。

（絶対割増料金、ぶん捕ってやる）

と。

世知辛い世の中を、世知辛く生き抜いてきた少年としては、至極まっとう且つ正当な望みだった。

が。

相手が常識外れの認識や価値観を持っている場合、事態はどう転ぶかわからないものなのである。

ファヴランにとっての最大の不幸は、彼の次に役人から解放された人物が、姫刀自であったという事実だろう。

「まったく……真実のかけらも見抜けぬ無能者どもが……」

どうやら、自分とは違って、心当たりのかけらもないことを、何度も執拗に尋ねられたに違いない——なにしろ彼女は一行の核たる存在なのだから、おまけ扱いの自分よりは深く追及されるのは自明の理である上、ファヴランはかつて何度も、まっとうとは言い難い生業のせいで役人からうんざりするような質問責めにあわされた経験があったので、たやすく想像がついたのだ——女性は、明らかに不機嫌全開状態だった。

見るからに怖い、を通り越し、見るだけで怖い状態だったのだが、ファヴラン自身けっこう……かなり限界に近かったため、噛みつくという暴挙にでた。

「あんたの場合、自業自得だろ!?　本当に迷惑なのはこっちだよ」

冷たく言い切り、彼は言を継いだ。
「木霊って、なんなんだよ!?」
姫刀自が、かすかに目を瞠った。

「本気で言っているのか？」
答えの代わりに投げかけられた謎の問いかけに、ファヴランは「はあ？」と間抜けな声をあげた。
（なにを言ってるんだ、こいつは!?）
相変わらず頓珍漢な女だと思いかけた瞬間、寝台の上で洩れ聞いた、彼女とナウルニールのやりとりを思い出した。
（木霊の存在は極秘事項だとかなんとか言ってなかったか……？）
だとしたら彼女が白を切っている可能性は高い。
（ちくしょう。肝腎なことは蚊帳の外かよ!?）
結局のところ、自分は部外者に過ぎないから――一行中、足手まといにしかならない『ただの案内役』だから……。
これが先だっての賊の襲撃以前であれば、「へへん、こいつらの厄介な事情なんて知ったこ

とじゃないし、知りたくもないね」と、酸っぱい葡萄の心理で嘯く気にもなったかもしれないが、あのやりとりを目にしてしまった今となっては、それは難しかった。

姫刀自を助けようとして死にかけたのは、咄嗟のこととはいえ自分で選んだことなのだから恩きせがましくあれこれ言うつもりはないが、彼女が秘密にしていた力の暴走のせいで――あれが暴走でないのなら、彼女とのこれ以上の同行は、なにがあろうと拒否するところである――役所に引っ張られ、痛くもない腹を探られ、不快な思いを食傷するまで味わわされたのだ。

（どうせ、ほかの二人には、事情を説明してるに違いないんだ。おれにだって知る権利はあるはずっっ）

最後に『はず』とつけるあたり、いまいち強気に出られない彼の意識のありようを物語っていたのだが、そこに目を瞑ってでも踏み込まずにおれぬほど、彼は苛立ってもいた。

「なんだよ、はぐらかすつもりかよ!?」

嚙みつくような口調で食ってかかると、姫刀自はまたしても意外そうな顔をした。

そうして、その唇から紡がれた言葉といえば。

「……お前、まさか、本当に……？」

意味深長な、それでいて理解不能なつぶやきだった。

（だーかーらー、そこで切らずに先を言えってのー！）

「なに、わけのわかんないこと言ってるんだよ!? ああ、どうせおれなんか、頼りにならない

し足手まといだし、あんたらの高尚な会話を理解できるほど頭の出来もよかぁないしっっ!?いちいち親切に教えてやろうって気にはならないかもしれないんだろうけどなっ！　そんでも……いいか、それでも、だ！　おれを脅しつけて一緒にここまで連れてきたのは、あんたたちのほうなんだぞ！　おれには知る権利があるはずだっっ！　教えないというんなら、おれは下りる！　絶対下りる！　迷わずの森なんか、おれだって二度と足を踏み入れたくない場所なんだからな！」

感情のまま一息で、それだけの長広舌をまくしたてたファヴランは、当然のことながら酸欠状態に陥った。

言った直後に（逃げる算段もう少しつけてから、喧嘩売るべきだったかも）と、少しだけ後悔したが、言いたいことを全部吐き出せた爽快感のほうが大きかった。

（あー、なんかすっきりした）

あとは野となれ山となれ――とでもいうべき心境に至ったファヴランに、しかし姫刀自は予想外の反応を返してくれたのだ。

「足手まとい？　誰が？」

心底から不思議そうに問い返されて、ファヴランは逆に慌てた。

「え？　いや、そんなのおれしかいないだろ？　即戦力にならないし、あんたやあの二人みたいに賊やっつけるような力なんか持ってないし……」

そもそものきっかけを考えれば、そこで卑屈になる必要など皆無だったのだが、一緒に旅し

ているうちに、生じた感情が彼の心を揺さぶったのだ。
半ば脅迫めいた形で、行動をともにすることになってしまったものの、彼らには文句なしの力――能力が天から授けられているということだ。
聖石の使徒に選ばれたあのふたりの青年の……圧倒されるばかりの剣技。
そして姫刀自の、あの驚異的な破壊力を誇る特異能力。
あんなものを見せつけられては、自分が足手まといではないなどと自惚れることはできやしない。
「あれは……」
姫刀自は、そんな彼になにか言いかけ、しかし思いなおしたようにふう、と息をついた。
「お前を足手まといだなどと、わたしもあのふたりも、かけらとて思ってはいないぞ?」
子供だましの煽てなら、ただでさえきりきりしている気分も手伝い、一気に爆発していたところだが、なぜだか彼女の口調には、本気でそう思っているのが信じられる響きが宿っていて……ファヴランは少々困惑した。
「いや、でもだって……」
詳しい事情とか、おれにだけは教えてくれないし、訊いてもいつも適当にはぐらかそうとするし……それってやっぱり、おれが頼りにならないからで……。
「藁にでも縋る思いで雇ったってのが正直なとこなんだろう? いいよ、隠さなくても……おれんとこにくる客なんて、みんなそうだったんだし」

いまでこそ、知る人ぞ知る遺産探索人として、密かに名も売れたものの、それを始めたころは、はっきり言って確たる期待を抱いて彼を訪れる客など皆無だった。

にっちもさっちも行かなくなり、これが最後の藁とばかりに、諦め半分、でも最後の希望まで捨てきれないという心境の人間だけが、彼の粗末な借り部屋の扉を叩いたものだ。

そんな彼らにしたところで、応対したファヴランのあまりの若さに、回れ右しかけたこと……数えきれない。家賃と食費確保のために、「見つけられなかったら無償でいいから！」と逆に縋りつく形で、ようやく依頼をもぎ取ったことも一度や二度や三度や四度ではない。

隠された遺産などというものは、大抵非常に価値の高いものか、特定の人物以外には意味をもたないものかに分かれているものだが、運のいいことに、最初は前者を求め、しかも遺産の内容もそうであった依頼主に恵まれ、名がある程度売れてきたころから、後者のそれもぽつぽつと混ざり始めた。

とは言っても、皆自力でできることをやり尽くした後にしか、彼の部屋の扉を叩かないことに変わりはなかった。

しかも開業当初の「見つけられなかったら無償で」発言が、なぜかしっかり広まっていたりして、「駄目でもともと、見つからなければ依頼料払う必要ないし」という客ばかり相手にしてきた。

だから、今回もそうだ、そうに違いないと思いこんでいた。

まあ、宝を取り出すためではなく、戻すためにその場所を知りたがっているところだけは、

いつもと違ってはいたのだが。

けれど、何人もの人間を破滅させるような物騒な祟り石が関わっているのであれば、やはり彼らの心境は、いつもと同じ「藁にも縋る」ものだと認識していたのだ。

が――。

「確かに、お前のことを藁にも縋る思いで捜していたのは事実だ」

大まじめに肯定の言葉を口にされた瞬間、なぜかがっくり落胆してしまったファヴランであった。

が、その後つづいた姫刀自の言葉は、それまで彼が、ほかの依頼主から聞いたことのないものだった。

「だが、わたしが捜したかったのは、遺産探索人として名の売れたお前ではなく、迷わずの森からただひとり生還したお前だったぞ？　偶然だとかなんだとか、お前が反論する気満々なのは知っているが、いいか、あえて言うぞ!?　偶然なんぞで一度あの森に足を踏み入れた人間が無事にすむはずはないんだ。お前がいま生きてわたしの目の前にいる、この事実が物語ることはひとつきり――それが、なんだかわかるか？」

ファヴランは正直にかぶりをふった。

本当にわからなかったし……（まさか）と思った内容は重すぎる意味を持っていた。

「お前は」

（お前……）

脳裏に、二度と思い出したくないと思った記憶が甦る。
（手前ッッ！　このクソガキっっ！　拾って育ててやった恩も忘れて……これをどうにかしやがれ！　早く！　今すぐにだ！）
でなきゃ、ぶっ殺してやるからな！
ぶっ殺してやる。
もう、顔さえ思い出せない――けれど記憶に残る最後の保護者の怒りに満ちた声。彼がそんな声で告げた内容は、いつも必ず現実となった。
助けろ、と言われた。
けれど、勘が他人より少し優れているだけのファヴランに、全身がずぶずぶと地中に沈んでいく大人たちの体重を支え、引っ張りあげるだけの力はなかった。
そこは、ただの森だったはずなのに。
呪いの森とは呼ばれていたものの、それまではなにも変哲ない森そのものだったはずなのに……。
あの瞬間に、森はファヴランを除く一行全員に牙を剝いたのだ。
永遠に封じておきたかった、それは悪夢の一幕――。

10

最初の記憶は、覗き込んでくる黄ばんだ歯をした男の髭面だった。
それからあれこれ訊かれたが、ファヴランはなにも答えることができなかった。
どうやら記憶障害を起こしていたらしく——後にふり返り、そうと気づいたわけなのだが——ファヴランは本当にそのときは、なにも以前のことを覚えていなかったのだ。
そのことが判明したとき、自分の顔を覗きこんでいた髭面男とその仲間とおぼしき男たちが話し合っている内容を、聞くともなく聞いてしまった。
「どうするよ、いい服着てやがったから、絶対いいとこのボンだと思って、川に飛び込んでまでして助けたってのによ」
素性がわからないんじゃ、助け損じゃないか。
別の声が、違うことを言い出した。
「まあ、待てって。あの小僧自身がバカ頭になってたって、あんだけ上等の服を着てたんだ。けっこう金持ちの家の息子に違いないって。それなら、絶対、探し出そうって動きがあるはずだし、それなら絶対おれたちの耳にも入ってくるはずだろう？　短気を起こして全部を台無し

にする危険は冒すべきじゃないだろう」

そう言ったのは、ファヴランにとっての初めての保護者。

跡を継いだばかりの青年だった。

前首領に対する幾ばくかの遠慮もあってか、ほかの男たちは口をつぐんだ。

だが、ファヴランにとって不幸なことに、彼の行方を探す者たちの情報はなかった。後に知ったことだが、彼の命の恩人たちは、それなりに名の知れた盗賊団で、かなりの情報網を持っていたのだ。

いつまでたってもファヴランの素性が知れないことで、一団の雰囲気は徐々に冷ややかなものに変じていった。

彼らにとって、身代金も取れない子供など、足手まといでしかなかったのだ。

段々扱いが手荒くなっていくなか、それでもファヴランは逃げ出そうとは思わなかった。溺れ死ぬところを助けてもらった恩人であるということは、彼にとっては大きな意味を持っていたのだ……詳細はわからないけれど、このころには自分が、高い崖から川に突き落とされたことを思い出していたからだ。

『あなたは、いてはならない方なんですっっ！』

追い詰められた目をして、小柄な痩せた老人が、辛そうに顔を歪めて彼を突き落とした。

なぜだか、それだけははっきりと思い出すことができて……同時に、そのとき、それでも生きたいと強く願ったことも……思い出して。

そして、それはいまもやっぱり同じことで。
どうしても、死にたいとはかけらも思うことはできなかったから。
「とんだ厄介者を抱えこんじまったな」
「身代金もとれねえガキ、いつまで養ってやるつもりなんだ、二代目は!?」
「行方知れずになったいいとこのガキの噂なんぞ、ひとつも流れて来やしないんだぜ？　確かに手足なんぞつるつるで傷ひとつないけどよ、もしかして表に出せない事情でも抱えてるんじゃねえのか？　あのガキが消えてくれて、向こうは実は清々してるとか？」
裏事情に通じた男たちは、そうしたことがあまり珍しくもないことを熟知しており、それゆえにその言葉には重みがあった。
そんな男たちのやりとりを、聞くとはなく聞いてしまったファヴランはひとり青ざめた。
彼らの会話の内容を、正確に理解できていたわけではない。
ただ、彼らの口調や態度から、自分が邪魔に思われていることを本能的に感じ取ったからだ。
（死にたくない……！）
その一念で、彼は頑張った。
遠い水場への何往復もかかる水汲みも、住処の掃除も、馬の世話も、雑用も――。
それでも――どんなに頑張っても男たちの機嫌ひとつで殴られたり、一杯の粥さえもらえなかったりもしたのだけれど。

八つ当たりの的にされて、身動きひとつできないような痛みを抱えて地面に横たわっても、ファヴランが逃げ出そうと思わなかったもうひとつの理由は――男たちに『二代目』と呼ばれている青年の存在だった。

川に流されているファヴランを最初に見つけてくれて、助けるよう男たちに命じてくれたのはあの青年だったのだと聞いた。

命の恩人だと思った。

そうして自分がなにも思い出せないせいで、ほかの大人たちが「役立たず」だと断じたなかで、ただひとり庇ってくれたのも彼だった。

しかも、彼は優しかった。

時々、こっそりと、食べかけの果物やお菓子をくれた。

傷だらけになった指を「可哀相に」と言って撫でてくれた。

「頑張ってるようだな、お前はいい子だな」

と、まるで自分のことのように笑って喜んで、頭を撫でてくれた。

振り返ってみれば、それは子供だましとさえ呼べないお粗末な代物だったのだが、当時のファヴランにとってはかけがえのない心の糧だった。

存在することすら許されぬと断言された記憶のみを取り戻したファヴランにとって、いてもいい場所を保証してくれる青年は、神にも等しい存在だったのだ。

（このひとの役に立ちたい）

いつしか、ファヴランの意識はその想い一色に染め上げられた。

役に立つなら……足手まといでなければ、捨てられたり殺されたりしないだろうから——と幼いながらに考えた結果でもあった。

だから、掃除も料理も馬の手入れも頑張ってそこそこにできるようになったのだけれど。

ある夜、保護者にして盗賊団の二代目首領である青年に呼び出された彼は、思いもかけないことを告げられたのだ。

「ファヴラン、お前、失せ物探しが得意なんだって？」

いままで知らなかったよ——と笑顔で青年が話しかけてきたとき、なぜか背筋に冷たいものがつたった。

そんな彼の心中など構わず、青年は畳みかけてきた。

「聞いたぞ、ギーゴが酒場で酔ってなくしちまった、おふくろさんの形見の守り袋の在り処、しっかり言い当てたんだって？　凄いじゃねえかよ。お前、占い師の才能があったんだ!?　そんな特技があるんなら、さっさと言えっつーんだよ。なんだよ、そういうことなら、お前足手まといなんかじゃねえじゃねえか！」

そうして、心底嬉しそうな顔で、全身の力をこめて、ファヴランを抱きしめた。

彼が喜んでくれる——それはファヴランにとっても最高の喜びだった。

けれど、認識の差が恐ろしかった。

自分が持つ能力は、青年が思うほどに融通の利くものではない。

それでもいいと、彼は言ってくれるだろうか!?
全身全霊をかける覚悟が要った。
「あ、あの、頭領……」
恐る恐る、ファヴランは告白した。
「おれは、占い師みたいに、どこに……どんなところにあるのかとかわかるわけじゃないんです。ただ、なんとなく引っ張られるような感じがして、それでそっちにあるんだってわかるってだけのことで……」
しかも、正確な場所は、自分自身が近づかないことには感じ取ることもできない。
そんなことでは、とても役には立てないのだと、決死の覚悟で告げたファヴランの言葉を、青年は予想通りの難しい顔で受け、しかししばらくしてから、ぱっと表情を明るくした。
「いや！　そうと決まった話じゃないぞ！　使い方次第じゃ、占い師なんかより、はるかに使える能力じゃねえか！　よしよし、ほんっと、お前を助けてよかったぜ！」
異様に上機嫌な青年の心中を、当時のファヴランははかることはできなかった。
ただ、自分の告げた内容のせいで、追い出されずにすんだことに安堵の念を覚えただけだった。
命の恩人で、時々やさしくしてくれる青年――アスマンの存在は、当時の彼にとってはかけがえのないものだったのだ。
後にふり返ってみれば、あれは自分ひとりでは生きられない子供の求めた庇護者への執着と

やさしくしてくれる存在への思慕が入り交じったものであったとわかるのだけれど。

期間として三年ほどだったろうか——アスマンの言う通りに『失せ物探し請負人』としてせっせと働いたのは。

占い師とは違い、直感で方角しかわからないものの、その感覚に従い探索した場合、必ずと言っていいほど失せ物や隠し財産を見つけることができるという彼の評判は、それなりに広まったらしく、そのころにはアスマンたちも盗賊稼業などに走る必要もないほどに懐は温まっていた——少なくともファヴランは、そう思っていた。

アスマンたちが役人に追われる罪人なのだと、知って以来ファヴランはずっとそうでなくなることを願っていた。

これまで犯した罪は消えないにしても、これから罪を犯さなければ——そうすれば……本当は償うべきなのだろうけれど、誰もが忘れるほどの間、再び罪を犯さなければ、世間は忘れてくれるのではないか、と。

思い、願い、一所懸命アスマンたちを盗賊稼業から切り離すために頑張った。

まさか……その自分の頑張りこそが、彼らの仕事を助けていたなどとは思いもせずに。

いつものように、ひと仕事終えた後のことだった。

「本当にお前はいい子だな」

アスマンに褒められ、上機嫌で自分の部屋に戻る途中で、耳にとびこんでくる寸前まで、ファヴランは自分の能力が、アスマンたちにどういう助力を与えていたのか、本当に知らなかっ

たのだ。
「二代目もそつのない……」
「馬鹿、頭がいいって言えよ」
「わかってるって。あのガキ手懐けた挙句、有効利用だもんなぁ」
なにを言われているのか、ファヴランにはわからなかった。
いや、正確にはわかりたくなかった。
けれど、アスマンの配下である男たちは、ファヴランの気配に気づくことなくどんどん本音をまくしたてた。
曰く「あの失せ物捜し名人のガキの評価が決まるまでは、こっちまで動きを凍結されて辛抱きつかったぜ」とか。
「あのガキが一緒に移動しなけりゃ見つからないってことで、大抵の金持ちは自分で出かけるんだもんな。腕の立つ用心棒たちまで引き連れて、さ。まったくありがたいこったよ。留守の間にまんまと屋敷のほうのお宝いただけるわけだしな」
とか。
「ただ、全部の家を狙えねえのがもったいないっつーか、歯がゆいっつーか」
「仕方ないだろ？　あのガキが役人に目をつけられたら一巻の終わりなんだからよぉ」
「二代目のそつがねえってのがそのことよ。しっかり坊主手懐けて、屋敷の造り調べさせてるんだからよ。ほとぼり冷めたらそっちのほうにって寸法だ。まさに一石二鳥ってもんだな」

「一度で二度美味しいとも言うぜ」
「違いねえや」
「まったくだ」
男たちの笑い声を聞きながら、ファヴランは心臓が凍りつくのを感じた。
なにを聞いたのか、すぐには理解できなかった。否、理解したくなかったのだ。
いままでずっと、自分の力が役に立つのが嬉しかった。自分が金子を稼ぐ能力を持っているおかげで、アスマンたちが罪を犯さずにいられることが嬉しかった。
自分がひと仕事終える度に、アスマンに褒められるのが誇らしくさえあったのに……なのに。自分がしたことは……彼らにさらに罪を深めさせただけだったとは……！
たまらなかった。
堪えきれず、ファヴランはアスマンのもとへ走り、いままで以上に仕事を頑張るから、どうか盗賊行為は止めてほしいと必死に訴えた。
こんなことを繰り返していたら、絶対にいつか捕まるに違いないのだから、と。
けれど、返ってきたのは容赦のないこぶしだった。
「馬鹿なこと言ってるんじゃねえ！　てめえ、いい気になってんじゃねえぞ。てめえの稼ぎ程度じゃ、おれたちゃすぐにおまんまの食い上げだ。おれたちも働いてやってるから、てめえも一緒にいい飯食えてるんじゃねえか！」
飼い犬に手を噛まれたような心境だったのだろうか――アスマンは何度も何度もファヴラン

を殴りつけ、いくら謝っても殴るのを止めてくれなかった。
気を失った彼をなお、殴りつづけるアスマンを止めてくれたのはキーゴだったのだと、後でほかの男たちから聞いた。
同時に、忠告もされた。
「お前も、あんまり図に乗って二代目に逆らうような真似はすんなよ。ああ見えて、二代目は怒るとそりゃあ怖えーんだからよ。キーゴのやつ、お前を庇ったせいで、肋二本イカレたんだぜ？　せっかく拾った命なんだから、これからはおとなしく、言うことだけ聞くようにするんだな」
脅し文句にしか聞こえなかったが、男の目には確かに心配する光が浮かんでいたので、ファヴランはおとなしくうなずいた。
ただ、以前のように無心には、アスマンと向き合うことはできなくなってしまった。
なんの疑いもなく、アスマンに訊かれるままに、招かれた屋敷の造りや家人の様子を伝えていたことを繰り返さないために、出立までなるべく客の屋敷に泊まらないことにした。
用心深い依頼主が、是非と言い、屋敷に逗留せざるを得ない場合は、極力部屋からでないようにした。
そうすれば、アスマンになにを尋ねられても答えずにすむからだ。知らないことは答えようがないのだから。
おかげで仕事が終わり、一味のもとに戻る度、殴られるようになったけれど、ファヴランは

頑固にそのやり方を貫き通した。

もっと利口になれ、と周囲の男たちは口を揃えて説得しようとしたが、それだけはできなかった。

命を賭けた意地の張り合いで勝利したのは、大方の予想を裏切り、ファヴランだった。

激昂したアスマンが、ファヴランを殴り殺しかけたのだ。

三昼夜というもの、生死の境を彷徨ったファヴランが目を覚ましたとき、最初に目にしたのは、苦虫を噛み潰したような顔をしたアスマンだった。

そして、ファヴランの意識が戻るなりこう告げた。

「手前の強情さには呆れる外ないな。本音を言えば、言うこと聞かねえ駒なんぞ捨てるに越したこたぁねえんだが、まあ……譲ってやるよ」

その代わり——と、アスマンが持ちかけてきた話の内容と言えば。

「いいか、そんなにおれたちに足を洗わせたいんなら、そうできるだけの大仕事をやってみせやがれ。てめえがいくら青臭い説教垂れやがろうと、元手なしにやり直すだなんて、できゃしねぇんだからよ。おれたちが人生やり直せるだけのお宝んとこに、おれたちを連れてってくれたら、おれたちは……いいや、どうせそうなりゃ一味は解散ってことになるだろうからな、少なくともおれは、てめえの言う通り、足を洗ってまっとうな稼業とやらについてやる。だが、それができなかったら……わかってるだろうな？」

もう、文句ひとつ口にせず、もちろん反抗的態度も取らず、生涯従順でいろ——と、アスマ

ンはそう持ちかけてきたのだ。
分の悪い賭けだとは思った。
それでもファヴランは諦めきれなかった。
彼はどうしても、アスマンに罪を犯して欲しくなかったのだ。
だから……うなずいた。決意をこめて。
「わかった」
と――。
「それで、いい」
と。
賭けは成立した。
けれど、その舞台となるのが、なぜあの『迷わずの森』でなければならなかったのか――とファヴランはいまでも思わずにいられない。
祟(たた)りの森、迷いの森とも呼ばれていたあの森に、どうして足を踏み入れたりしたものか。
そうさえしなければ、あんな悪夢を目にすることもなかったはずだというのに……。
(どこでどう、釦(ぼたん)をかけ違ってしまったのだろう……?)
いまでも、ファヴランにはわからない。

11

意外なことに——正直な感想を口にしたところ、ファヴランは後頭部にこぶしを見舞われたわけだが——姫刀自の料理の腕は悪くなかった。

というか、はっきり言うと料理上手だった。

「ほら、ゼンマイの煮つけ、できたぞ。さっさと運べ」

市で見せたぽやーっとしたお上りさんぶりが嘘のような見事な手際で、彼女は次々に料理を仕上げていく。

「ぼさっとしない！　青菜と油揚げの煮びたしできるぞ！　あと、すぐに春雨の汁物もできるから、人数分の深皿持って来てくれ、匙も忘れずにな。あと、飯だが、味付けするか？　それともそのままがいいか？」

姫刀自が問いかけた相手はファヴランだったのだが、なぜだか答えたのはトリノアークだった。

「ここまでおかずいっぱいあるなら、やっぱり白ご飯だろう」

ナウルニールもうんうんとうなずいて、こうつづけた。

「そうそう。余ったぶんだけ味付けて、焼き飯にしていただけたら……夜食にはぴったりですし」

どこか目がうっとりしているのは、一昨日の夜食に出た卵とネギと根菜の焼き飯の味を思い出し、反芻しているからに違いない。

お偉いはずの聖石の使徒さまふたりは、いまやすっかり姫刀自の料理の虜だ。

（ま、おれもひとのことは言えないけどな）

大皿によそわれた煮びたしから立ち上る食欲を刺激する匂いに、胃が活発に動き始めるのを感じながらファヴランは思う。

「抜かせ。どれだけ大量に炊いても、一粒も残さぬ大食漢揃いのくせに。わかっておるのか、お主らの底無しの食欲のために、わざわざ竈の火を落とすのを待ってもらって飯を炊くのがどんなに手間か……！」

憤然と訴えかける姫刀自を前にしても、使徒コンビは全然動じない。

「ですから、余ったら、と言ってるじゃありませんか」

「そうそう」

決して理不尽なことは言っていないとアピールするふたりだが……それを真っ正直に受け入れられないことぐらいは、この三日ほどでファヴランにもわかっていた。

思い返せば三日前、初めて姫刀自が料理の腕を振るったときのことだ。

ふたりとも、予想外の彼女の料理の腕前に、舌鼓を打ち、大いに彼女を褒め讃え、実に六膳

ものご飯とたっぷり盛られた料理を平らげた。
彼らほどではなかったが、ファヴランも二回はお代わりをしてしまったのだから、充分共犯関係になってしまったと言えるかもしれない。
その夜の献立というのが、根菜と蒟蒻の煮物と、青菜のおひたしと、干し魚の焼き物と、豆腐と卵の澄まし汁で——大皿一杯に盛られた料理は、瞬く間に消えてなくなった。主な回収先はふたりの使徒の胃袋だった。
そうして、夜も更けたころ……あれだけ大量に食したはずのふたりの青年が、揃って悲痛な訴えをあげたというわけだ。
「「お腹　すいたんですけどー」」
あれほど切なげで、情けない声を聞いたことはなかった。
それは姫刀自にしても同じだったらしく、渋々と宿の厨房に下り、冷やごはんをかき集めて卵とネギの焼き飯を作ってくれた。
塩だけの味付けだったにも関わらず、それは文句なしに美味しい出来生えで——まあ、つまりはファヴランも口にして、美味しいと思ってしまったわけなのだ。
おかげで、地神神殿の客分のはずの姫刀自は、現在使徒ふたりを含む『迷わずの森』探検隊の中心的人物であるにも拘わらず、一行のご飯お姉さんとなってしまったのだ。
そうして、夜中近くなる度、「お腹減りましたー」コールが繰り返されるというわけだ。
姫刀自も、最初こそ——再度の襲撃を懸念してか——「まあ……腹が減っては戦はできぬと

いうしな」とこぼしながら、前述の焼き飯を作ってくれたわけだが、それが夜毎に同じ訴えを受けるようになったとあっては話が違ってくる。

「お前らのような底無しの胃袋の持ち主たちに、毎度食事を作っておっては、いくら路銀があっても足りないではないか――――っっっ！」

癇癪を起こした彼女に、思わず「ごめんなさい」と頭を下げたファヴランだった。

なぜなら、彼女に包丁を握らせた元凶は彼だったからだ。

件の騒ぎの後、あまりにも鮮烈な光景が脳裏に焼きついたのと、やはりあまり麗しからぬ記憶を取り戻したためか、ファヴランは肉を使った料理のいっさいを受け付けられなくなってしまったのだ。

肉だとわかる形状のものはもちろん、挽き肉であっても吐き気を催すありさまで、それを見かねて姫刀自が包丁に手を伸ばしたのだ。

野菜や乾物を調理したものは、不思議とご飯がすすむ味付けで、酷すぎる記憶のせいで、食欲皆無であったはずなのが、気がつけばご飯三杯平らげていたという始末。

それでもやはり、肉を思わせるものを目にした途端、血まみれの男たちの姿が脳裏に甦り、食事することすら拒んでしまうファヴランのために、姫刀自は肉を使わない、それでいて活力の出る献立を造りつづけてくれたのだ。

ありがたいことだ。

心底から、そう思う。

けれど、だ。

「あんたたちっっ！　いいかげんにしろよっっ!?　姫刀自にこれ以上面倒かけんじゃねえよ！　あんたらは肉平気なんだから、外の店なり屋台なりで食ってくりゃいいじゃないか！」

……そう。

あの凄惨な場面を目撃したにも拘わらず――作った本人たちなのだから、当然かもしれないが――使徒ふたりは平然としたもので、肉料理はもちろん、生肉の刺身さえ美味しそうに頬張っていたのだ。

そんな彼らが姫刀自の『精進料理』にこだわる必要はないはずなのだが……。

「いやぁ、なにしろ美味いもんでな」

「その通りです。肉も魚も使わずに、こんなに美味しい料理が出来上がるだなんて……」

新たな発見です。

とまで言ったナウルニールに、姫刀自は呆れたようにこぼしたものだ。

「こんなの、田舎料理だとか家庭料理とか呼ばれるものだろうが。特に珍しいものでもあるまいに……」

それに対するふたりの答えは、といえばだ。

「いや、まじに美味いって。おれ、そういうお袋の味って知らないから……新鮮。そうかぁ、これがお袋の味ってやつなんだな」

「わたしの母も、厨房にたつようなひとではありませんでしたから……精進料理は珍しくなか

ったんですが、味付け次第で、こんなに美味しくなるものだったんですねえ」
美味い、美味いと口々に言いながら、それ以上の勢いで箸を動かすふたりの様子に、なにか引っかかるものを感じる一方、皿の中身の減りようにさらなる関心を惹かれたファヴランは、箸と小皿を手に雄叫びをあげた。
「だから、食い尽くすな――っっっ！」
叫びながら、俄然忙しく箸を動かし始めたファヴランであった。
そうして――実のところ、肝腎なことをまだ教えてもらっていないことを思い出したのは、情けないことに、その夜、寝台に入ってからのことだった。
（あ、木霊のこと、聞きそびれたままじゃん、おれ）
明日こそは絶対に聞き出そう――固く決意して、彼は目を閉じた。
美味しい夜食のおかげだろうか、彼はすとんと眠りに落ちた。

事件から五日後、ようやくのこと一行は役人から放免された。
殺害された男たちが、金品及び容姿端麗な姫刀自とナウルニールを狙って襲撃を企てていたという複数の証言が確認されたため、正当防衛が認められたのだ。
ちなみに実行犯は風霊で、命じたのは聖石の使徒ふたりという形でのことだった。

「不思議の力をお持ちなのは存じてますが、あのような派手なやり方は困ります」

と、苦言を呈した役人に、ナウルニールはしおらしく「申し訳ありませんでした」と謝り、トリノアークは「精霊の力は極力借りないようにとは心がけてはいるんだが、なにしろあのときは多勢に無勢で、思わず……いや、本当に申し訳ない」と頭を下げた。

ふたりとも、『木霊』のこの字も持ち出さなかったことから、ファヴランはそれがかなり複雑な問題を孕む存在なのだろうと気づいたが、だからと言って聞かずにすます気は皆目なかった。

そうはいっても、タイミングを逸したのは確かで、どう切り出したものかと思案する。

(うーん?)

単刀直入に聞いて、はたして答えてもらえるものだろうか。

役人にさえ隠し通したことを、あっさり教えてくれるとは……考えにくい。

(でも、そうすると、鎌をかけるってことになるだろうけど……)

難しい、と即座に判断できてしまう。

相手三人中、ふたりは海千山千の強者なのだ。適当に煙にまかれてしまうのは目に見えている。

ならば残るひとりに照準を合わせるべきなのだろうが……。

(姫刀自、かなり天然入ってるし……)

遠回しに尋ねたりしても、頓珍漢な答えが返ってくるばかりのような気がするのは……考え

すぎだろうか。

かと言って、直球勝負を挑んでも、この間のように、思い出したくもない過去の記憶が間欠泉よろしく噴き上がってくるかもしれないとあっては躊躇わずにはいられない。

ならば、知る必要のない情報として処理する選択肢もあるわけだが、それだけは、どうしてもできないと思ってしまう。

理由は――意識を失う寸前に見た、リィーシャが成長したとしか思えない姿の女性の幻である。

いや、違う。

（あれは間違いなくリィーシャだった）

そんなはずはないのに、どうしてもそう思えてしまう。

リィーシャはまだ小さな女の子なのに。彼女は雅夜のラーイの部屋で、自分の帰りを待っているはずなのに。

それでもあれは間違いなくリィーシャだったのだと確信できてしまう自分がいるのだ。

雅夜の知人の前では、到底口にできない考えなのだが、いま一緒にいる三人は違う。不思議を身近に感じ、接している彼らになら、そのことを告げても笑われたりしないとは思うのだが……それでも、いや、だからこそ、踏ん切りがつかない。

不思議の専門家である彼らに「それは夢か幻だ」と断じられるだけならともかく、「育った姿ぁ？　そりゃあ願望だ、願望」などと笑われたりしたら……きっと立ち直れない。

小さくて、守ってあげなければ――とだけ思っていた少女が、最近とっても綺麗になって、思わず見とれてしまうことがたまにあるという事実が、ファヴランの心を躊躇わせる。

（どうしよう……どうしたら……）

悶々と悩んでいたファヴランは、不意に肩をたたかれ、びくりと反応した。

「うわっ！　え!?　なに!?」

思わずきょろきょろと周囲を見回し、そこが人っこひとりいない野原であることに気づく。出てきた街の外壁すら視界に入らないところを見ると、どうやら考え事に没頭したまま、相当距離を歩いてきたらしい。

しかし、道でもないこんな野原に、なぜ自分たちはいるというのか。

「もしかして、秘密の近道、とか……？」

もし事前に説明されていたのをうっかり聞き逃していたのなら、笑い飛ばされてもおかしくないことを、つい口にした彼に、肩を叩いた本人――ファヴランはにっこりと笑ってうなずいた。

「はい、その通り。少しばかり驚くことになるかもしれませんが、はぐれたら大変ですからね、しっかりこの腕に摑まっててください」

そう言って、ナウルニールは右手を差し出してきた。

近道？

どこかに隠し通路への入り口でもあるのだろうか。

だが、どうしてここでこの青年の腕を掴まなければならないのだろうか。入り口に着いた時点で充分間に合うだろうに……と、首をかしげるファヴランに、なぜだかナウルニールは「早くなさい！」とせっついてきた。

「わかったよ！　掴まりゃいいんだろ!?」

言いながら、ファヴランは（なんか、格好悪いかも）と思いつつ、意趣返しも兼ねてわざとしがみついた。

人目がないの幸いの捨て身の攻撃だった――男が男に抱きつかれ、喜ぶ人種は限られる。

しかし、嫌がらせする気満々だったファヴランの思惑は大幅に外れた。

「協力、感謝します」

と、本当に嬉しそうなナウルニールの声を聞いたと思った次の瞬間――。

ビュウッ、と風が吹いた。

突風だった。

（吹き飛ばされる！）

直感し、思わず目を瞑ったファヴランは、しかししばらくして痛みも衝撃も覚えないことを不思議に思い、目を開けた。

そのときの彼の心境をなんと表現したらいいのだろう。

あり得ない……少なくともあり得ないことだと、彼が真実思っていたことが、現実としてその目前にさしだされていたのだ。

「う、そ、だろう……!?」

目に映る光景が信じられず、彼は思わずそうつぶやいていた。

無理もないことかもしれない。

なぜならこのとき、彼は――ファヴランは。

空を飛んでいたのだから。



12

（そ、空っっ！　空飛んでる、おれ……!?）

そんな馬鹿なと思うものの、しっかりしがみついたナウルニールの腕の感触が、これを現実だと告げてくる。

（ええっとぉ、ということは……）

そろりと視線を巡らせてみれば、落ち着き払ったトリノアークと、物珍しげに眼下の景色に見入っている姫刀自の姿があった。

人どころか、家でさえ小指の先ほどにしか見えない高度を、しかも高速で移動中とあって、恐ろしさのあまり、ファヴランはナウルニールの腕から手を離すことはできなかったわけだがかろうじて口を開くだけの余力は残っていた。

「空、飛んでるようにしか思えないけど……これって、もしかして夢……？」

少なくとも、平凡且つまっとうな人生を送る上では、経験するはずもない出来事であったのだから、彼の疑問はもっともだと言えたろう。

「現実ですよ」

と、答えたのはナウルニールだった。
「イーオダールの子供たちにね、ちょっと大好物のおやつをあげて、少しばかり筋を曲げてもらって、わたしたちを運んでもらってるわけです。おやつというのは木性の子供石なんですけどね」
それは不正な取り引きであるはずなのに、告げるナウルニールの面には、罪悪感のかけらもなかった。
それどころか平然と、こんなことまで言い出したのだ。
「本来、反則技なんですけどね。件の騒ぎのおかげで、予定外の足止めを食らったものですから……おまけにあの騒ぎのせいで、姫刀自の聖石まで暴走しかけてしまったことですし、ここは一気に目的地に飛んだほうが早いかな、という話になりまして」
なにやら緊急事態が発生したらしいことはわかるのだが、だからと言ってこれはない、とファヴランは思わずにいられなかった。
「それってつまり……この風に乗ったまんま、姫刀自の故郷まで戻れるってことか？」
ナウルニールは少し困った顔をして、一部を肯定し、また一部を否定した。
「正確には、彼女の故郷を守護する森――迷わずの森の入り口まで、ですが」
むかっとした。
「なんだよっ!?　そんな便利な手段があるんなら、おれたち、わざわざ地上を旅する必要なんかなかったわけじゃないか!?　そしたら、あんな血なまぐさい事件に関わることだってなくっ

て……なのに、いまさら……何だって……!?」

目の前が真っ赤になるぐらいの怒りを覚えた。

使徒と言えど人間なのだから、地上を移動するしかないのだと信じていた。使徒と言えど万能ではないのだから、先日のような騒ぎに巻き込まれるのも致し方ないことだと思っていた……多分にこのふたりの使徒が、騒乱を心底楽しんでいるのだとしても、だ。

だが、回避する術があるにも関わらず、血なまぐさいそれを選んだというのなら、それは全然別の話になる。

そんなファヴランに、ナウルニールは困ったような顔で肩をすくめた。

「無理言わないでください。真っ昼間から空飛んだりして、ひとに見られたらどうするんですか。使徒さまって凄い、と感心してくれるひとばかりではありませんよ。自分も飛んでみたいとか、なにかに利用できないかと思う輩がでてくるのは明白じゃありませんか」

言われてみれば、確かにそれはそうだった。

特に犯罪に手を染める連中にとっては、非常に魅力的な能力に違いない。いかに警戒が厳重な屋敷や建物でも、空からの侵入など考えもしないはずなのだから。

「……もしかして、神殿で売られてるお守り石を使ったら、素人でも空を飛べたりする、とか……？」

今度の問いの答えは、別の場所から聞こえてきた。

「馬鹿者。そんな物騒な利用法のあるものを、神殿が売り出すわけがなかろう。ナウルニール

が言っておるのは、そんな勘違いした輩が出てくるやも知れぬという話じゃ」

それはそうだろうと、大いに納得しながらも、面と向かって馬鹿と言われて面白かろうはずがない。

「じゃあ、別に隠す必要なんてないじゃないか。いくらお守り石使っても、使徒でなきゃ振るえない力なら、結局使徒さまは特別なんだってところに落ち着くわけだろう？」

「ところが、そうなると、今度はその特別さに神経過敏になられる困った方々が出て来ないとも限りませんでね。特に神殿の持つ影響力を目障りに思われている高貴なお歴々が被害妄想などに陥られては、困りますでしょう？」

それは、つまり――。

（神殿と敵対状態にある権力者が、使徒にそんな力があることを知ったら、ますます神殿を危険視するってことかな？　疑心暗鬼に陥ったあげく、なにをしでかすかわからないから、向こうの危機感を煽る真似は控えるべきだ、とか……？）

だが、ファヴランがその疑問を相手にぶつけるより先に、ナウルニールは話題を打ち切った。

「まあ、ほかにもいろいろ理由はありますが、君が本当に知りたいことは別にありますでしょう？　ここならひとの耳を気にする必要もありませんから、質問に答えてあげられますよ。なにか訊きたいことがあるのではありませんか？」

なにやらうまくはぐらかされたような気がしないでもなかったが、確かにどうしても知りた

いことではあったので、ファヴランは素直にうなずいた。
実際、政治向きの話などより、よほど切実な問題だった。
ので、自然直球勝負となった。
「……木霊って、なに？」
また、煙にまかれてしまわないとも限らなかったが、何がなんでも食らいついて離さない覚悟で発した質問に、しかしナウルニールは意外にもあっさりと応じた。
「風霊の亜種……というか、突然変異ですね」
姫刀自の、怒りを孕んだ横やりが入ったのはそのときだった。
「ナウルニール！　亜種とは聞き捨てならんぞっ！」
彼女のその反応は予想の内だったのか、ナウルニールは微苦笑とともに謝罪した。
「申し訳ありません。言葉の選択を誤りました……でも、ですから、突然変異と言い直しましたでしょう？」
あっさりと己が非を認めたナウルニールの態度に、姫刀自は一瞬複雑な顔をして、けれどすぐにうなずいた。
「反省してるなら、よしとしよう」
「ええ、ありがとうございます」
にこやかに礼を述べるナウルニールの態度にはそつがない。
（他人事だけど、なんか掌で転がされてるみたいで面白くないな）

ふっ、とそう感じたが、この機を逃したら、いつ詳しい情報を手に入れられるかわからないという思いもあって、ファヴランは質問その二に移った。
「風霊って、風の精霊のことだろ？　なんで別の名前がついてるんだ？　なにか、普通の風と違うのか？」
少なくとも、あの賊たちを切り裂いたのは風――というかかまいたちのようなものだったはずで、だったら『木霊』なんて言葉が出てくるのはおかしい……と思うのだが。
その問いに対し、ナウルニールは一瞬遠くを見るような、目をして――しみじみした口調で応じたのだ。
「それが、大違いなんですよ」
「どこらへんが、どんな風に？」
答えたのは姫刀自だった。
「彼らは樹木に宿るんだ」
ナウルニールがうんうんとうなずく。
「そうなんです。木霊は風霊のはずなのに、樹木に宿り、自らは大地に根を張って動かないんです。風は移ろうもの、水は流れるものと決まってるんですが、木霊はその基本から外れた特殊なあり方を体得した精霊と言えるでしょうね」
なんとなくはわかるが、専門知識のないファヴランには、なにがどう当然で、なにがどう特異なのかはわからない。

（こいつ絶対、教師に向いてない――っっ！　おれが聞きたいのは小難しい理屈なんかじゃなくて、もっと簡単にわかりやすいことなのに！）

このままおとなしく拝聴していたら、こちらにはさっぱりわからない、神殿流の講義が始まり、延々つづくかもしれない――そう思ったら、ひとの言葉をさえぎるような真似はよろしくないという良識など粉々に霧散した。

「具体的なこと、教えてほしいんだけど。その木霊って、普通の風霊たちと違って、樹木に宿るってこと以外で、違う点っていうか、力とかあるわけ？　あったら、それって、どういう力なわけ？」

はぐらかされないうちに、ひとつでも多くの情報を獲得すべし――と、心に決めたファヴランは矢継ぎ早に問いかけた。

なぜ、こんなにも焦っているのかもわからずに。

ただ、どうしても、そのことは知っておかねばならないことのような気がしたから。

しかし、なぜか返答する側のナウルニールが少し躊躇う顔になった。

「ここまで明かした以上、教えることに否やはありませんが……ファヴラン君、きみは本当にそれでかまいませんか？」

謎掛けとしか思えない彼の言葉に、血が沸騰するような苛立ちを覚えた。

掌の上でころころ転がされているような屈辱感が湧き上がってきたのだ。

「なにをいまさら……！」

ここまでさんざんひとの好奇心を煽るようなことばっかり口にしてきたくせに！
「いまさら勿体ぶるなんて、どういうつもりなんだ!?」
ふざけんのもいいかげんにしろよ！
怒鳴りつけた途端、体ががくんと落下しはじめた。
どんどん速度が増していくところを見る限り、自然落下としか思えない。
それはつまり、このまま落ちれば――ぺしゃんこの死体が四つ出来上がるということで。
（いや、使徒のふたりはきっと、裏技でもなんでも使って生き延びるだろうし、姫刀自にしたって、なんだか特殊な力持ってるみたいだから、自力でなんとかできるかもしれないわけで……だとしたら、死ぬの、おれ!?　おれひとり!?）
そんなのはイヤだ――というのが、ファヴランの本能がはじき出した答えだった。
そして、彼がそう決断した瞬間――加速度をつけて落下していた彼及び一行の体は、ふわりと下からすくい上げるような風によって受け止められたのだ。
「な、な、一体なにが……？」
すんでのところで地面に激突死するところを免れた、ファヴランは口をぱくぱくさせた。
腹立たしいことに、ほかの三人は平静そのものだった。
「さすがに、身を以て体験させるつもりはなかったんですが……結果的に同じことになってしまいましたね」
嘆息しつつ、ナウルニールがつぶやいたのが聞こえたと思ったら、いままで無言を通してき

たトリノアークがはぁぁ、と大きく息をついた。
「心臓に悪いったらないな。姫刀自いなかったら、絶対いまので骨の数本いかれてたぜぇ！まったく、ひとに懐いた木霊ってのはタチ悪いよな。当人の安全よりなにより、その感情重視なんだもんな」
挙句、そのせいで懐いた相手が死んだら死んだで、今度は自分の悲しみで暴走し始めるときた……振り回される風霊たちは、まったく貧乏籤ってもんだ。
不満をこぼしまくるトリノアークの言葉の内容や意味は、正直なところファヴランにはわからなかった。
ただ、この地面に激突死寸前の状況に至ったのが、どうやら件の木霊のせいらしいことだけはわかった。
けれど、まだ全然関連性が摑めない。
ファヴランが困惑している間にも、ふわふわと彼ら一行を包む空気の繭は浮上し、恐らく風霊のおかげなのだろうが、再び目的地目指して移動し始めた。
けれど、あの衝撃は夢でも幻でもない。
まごうかたなき現実だった。
「なぜ……？」
つぶやいたファヴランの耳に、ナウルニールのため息が届いた。
「これが、木霊の特異な力のひとつです。彼らは自身が身動きできない樹木に宿ったせいかど

うかはわかりませんが、場合によっては自身の自由がきかないことと引き換えに、手に入れたとしか思えない強制力で、風霊の揮う力を増幅するんです。あの街に、あれだけのことをなす決意を抱いた風霊も、それだけの数の風霊もいませんでした。なのに、あの事件は起こってしまった……木霊の介在なくしてありえないことだと、わたしたちが判断したのはそのせいでした」

それはどういうことなのか――。

「……つまり、おれたちが襲われたことに腹を立てた木霊ってやつが、周囲の風霊たち煽り立てて、あの騒ぎを起こしたってことか？」

「その可能性が高いと思ってます」

ナウルニールの穏やかな声に、諦めにも似た響きを感じ取り、なんだか気の毒になった。

「で……さ。その木霊って、あちこちにいて、でもって簡単にひとに憑いたりするわけ？」

うへー、とうんざりしたような声を上げたのはトリノアーク。

「そんなにあちこちにいられたら、世の中物騒でかなわねえぞ。風霊の多い土地なら、木霊憑きひとりで充分、街ひとつぐらい壊せちまうもんな。なにかヤなことでもあってむしゃくしゃしたってだけで、木霊ってやつは反応するからな」

……それは、本当に物騒すぎる。

なのに、ナウルニールがさらに恐ろしいことを補足してくれた。

「イイタールの子供たち……火霊が多い街でも大惨事ですよ。なにしろ木は火を助く、ですか

らね。木霊憑きの機嫌ひとつで大火事起こし放題です。ああ、そこまでではなくとも、カンラタールの子供たちの多い土地でも危険でしょうね。雨雲を運ばれたりしたら、大嵐なんて簡単に起こせますから。しかも木霊は樹木という大地と密接に関係した存在でもありますから、土砂崩れや鉄砲水なんかも簡単に引き起こせるでしょうしねえ」

知りたかったことを教えてもらっているはずなのに、どんどん「もうやめてください」と言いたくなるのはなぜだろう。

まあ、そのとてつもないたとえ話のおかげで、そうそう滅多に存在する代物ではなさそうなことだけはわかったのだが。

「わかった！　木霊や木霊憑きの人間が、そうそう世間に出回っていないことはもうわかったから……！」

いいかげん、さっきのように話題を切り上げてくださーい――との、ファヴランの心からの願いは、しかし不幸にもかなえられなかった。

「そう、なんだよ」

なぜか、どっぷりと暗い声で、トリノアークがうなずいた。

「そう、なんですよねえ」

大仰に息を洩らしながら、ナウルニールもまた同意した。

「問題は、滅多にいないけれど、まったくいないわけではないことなんですよね。姫刀自」

妙に意味深長なナウルニールの声音に、ファヴランも感じるところがあった。

しかも、つづけられた台詞というのが――。
「監督不行き届きなのではありませんか？」
だときては、だ。
「木霊って、もしかして迷わずの森特産なのか――!?」
次の瞬間、ファヴランは頬に強烈な平手を食らっていた。
姫刀自は、本当に手の早い女性であった――平手とこぶしを使い分けてはいるようだが。もっとも、その差がわかるほど、彼女の『手』に慣れたくはない。
「言うに事欠いて特産とは何事だ!?　鋼玉のら！　お前たちの説明も一方的すぎるぞ！　よりにもよって悪い面ばかり強調しおって！　木霊はなあ、木霊は、人間と同じようなものなのだぞ!?　のべつまくなし暴走するばかりの厄介者扱いするでない！　教えたことは理解するし覚えるし、ちゃんと成長だってするんだ！　大体、その憑きってのはなんだ!?　うちの里では誰もそんな呼び名は使わないぞ」
（あ、やっぱり迷わずの森にしかいない精霊なんだ）
姫刀自も、けっこう迂闊である。
だが、別のことに好奇心を覚えてしまったファヴランは、つい尋ねてしまったのだ。
「じゃあ、なんて呼んでるの？」
なぜか姫刀自はえらそうに胸を張った。
そして、答える。

「『守護者の伴侶』だ」

守護者の伴侶――耳にした途端、ファヴランは心がふわりと温かくなったような気がした。

「守護者の伴侶、かあ……」

(なんか、それって……)

「格好よくて、気持ちいい呼び名だな」

そう――。

ファヴランが口にした、まさにその瞬間のことである。

彼ら一行を運んでいた風霊たちの動きが活性化し、移動速度が一気に跳ね上がった!

「え、え、え、なに――っっ!?」

突然の思いがけない出来事に、疑問しか投げられないファヴラン。

「どういうことです、姫刀自!?」

「なんだよ、こりゃ! 姫刀自、なんとかしろ――っっ!」

責任の所在を姫刀自にあると断じた使徒ふたりの悲鳴。

しかし、一番意外だったのは、姫刀自自身の返答だった。

「わたしは与り知らんと何度も言うたであろうが! 文句なら、元凶本人に聞け――!」

それっきり、ファヴランは意識を失った。

(格好悪い……おれって、ここんところいっつも真っ先に気絶してばかりで、めっちゃ格好悪いじゃん)

薄れゆく意識の中で、そんなことを思った彼の目前に、リィーシャの幻が現れた。
前に見たときから数日しか経っていないのに、なぜか彼女は何歳分か成長しているように見えた。
（そんなこと、ないよ）
リィーシャがやさしくささやきかける。
（格好悪くなんかない。ファヴランはいつだって、格好いいよ）
幻に違いないことはわかっていた。
だから多分、自分の言ってほしいことを口にしているだけなのだとも。
そうとわかっていても、勝手に胸の奥は温まるのだ。無条件に「ありがとう」と言いたくなる気持ちを押さえきれないのだ。
気づけば、こうささやいていた。
「大好きだよ、リィーシャ」
少女は、花の綻(ほころ)ぶような笑顔で応じた。
「あたしも世界で一番、ファヴランが好きよ」
と――。

13

その森を目にした瞬間、胸を満たした感情は『畏怖』としか呼びようのないものだった。トリノアークに起こされた途端、全身に感じた圧迫感に、ファヴランは思わず我が身をかき抱いてしまったものだ。

濃厚な……濃厚すぎる緑の気配と大地の放つ強烈な波動――触れた地面から、脈動が伝わってきても、きっと不思議には思わない……そんな圧倒的な力と生命力と、意志を感じた。

体が震えだすのを止められない。

ところが同行者ときたら、そんな彼の様子に、なんとも呑気な勘違いをしてくれたのだ。

「あ？　もしかして、寒いのか？　まあ、確かにほとんど陽が射さなくて、ひんやりしてるしなぁ。寒いっちゃ寒いか」

けろんとした顔で、見当違いな心配をしてくれたのはトリノアークである。

彼につられて上を向いたファヴランは、巨木の枝葉が視界を埋めつくしていることを認めた。

確かにこれでは気温は上がらないだろうと、頭の冷静な部分が考えたときのこと、ふわりと

肩になにか掛けられるのに気づいた。
ナウルニールだった。
彼が、わざわざ上着を脱いで、ファヴランに掛けてくれたのだ。
「すんでのところで風霊たちが受け止めてくれましたから、怪我はないと思うのですが……悪寒のほかに、どこか痛かったりしませんか？」
落下時、失神していた自分のことを心配して言ってくれているのはよくわかるのだが――なんだかズレている、と感じるのは気のせいだろうか。
「い、いや……それは大丈夫なんだけど。別に悪寒ってわけでもないし……というか、あなたたちは平気なの？」
思わず口を突いて出てきた問いが、しかし無意味であったことを思い知らされたのは、その直後だった。
「え？　いえ、わたしは別に。さすがにあの高度から落ちたのでは骨折ぐらいするかと思ったんですが、受け止めてくれた風霊には感謝ですね」
普通、死ぬのが当然だと思うのだが……使徒とは体も頑丈にできているのだろうか。
「あ、それはおれも同感。下手すりゃ再生にしばらく時間取られるかもって覚悟してたからなー。いや、ほんと、風霊さまさまだな。お礼はけちらずに渡さんとなー」
のほほーんと、相棒の言葉に同意するトリノアークの言葉のなかに、あまり普段使用しない単語を聞いたような気がしたのも……錯覚だろうか。

（再生って……再生って……？）

まさか不死身でもあるまいに――きっと、トリノアークは少々言葉の選び方に難があるのだろう、とファヴランは無理やり自分を納得させた。

いや、だから、そういうことではなくて。

「この空気に触れて、なんとも思わないわけ!?」

こんな濃密な空気に包まれて、なにも感じないというほうが、ファヴランには信じられなかった。

しかし、だ。

彼が期待したような答えは返って来なかった。

「ええ、さすがに街中に比べると空気が濃いですよね。おかげで身も心も洗われるような心地がするというか」

「土も真っ黒で適度に湿りけがあって……うん、いい土だ。ここの土なら充分肥料になるよな。きっと美味い野菜ができるぞ」

ナウルニールとトリノアークの、的を外しまくった台詞に、ついがっくりと肩を落としてしまったファヴランだった。

一時とはいえ、どうしてこんな頓珍漢な感性の主たち――正確に言えば、主に後者をだが――を、良識人だと信じていたのか……自分の人を見る目のなさに打ちのめされる。

さらに、同行者その三である姫刀自が、止めとばかりに身も蓋もないことを言ってくれたも

のだから、彼は脱力指数無限大状態に陥った。
「こやつらに、その手のことを問うても無駄じゃぞ？　鋼どころでない強靭な神経の持ち主だからな。そなたが見つかって、本当に良かった。こやつらに任せておくと、石の安置所を見つけるために、森そのものを壊滅させていたやもしれんのだからな」
（そういうあなたも、全然この森の気配に臆してる様子が見えないんですけど……）
これまでさんざん、彼女から平手やらこぶしを見舞われて、痛い思いを味わわされてきた経験ゆえに、声には出さなかったはずの言葉は、なぜか相手に伝わってしまったらしい。
こぶしも平手も飛んでは来なかったが、ふん、と鼻を鳴らして彼女は――実に偉そうにこうのたもうた。
「生まれてこの方ずっと触れ合ってきた気配じゃぞ？　いちいち怯えてなぞいられんわ。とはいえ、奉納した石を盗まれた挙句、見る影もなく穢されてしもうたものでな。森も大層怒っておる。石が盗まれたのも穢されたのも、わたしの咎ではないと思うのだが、ひとの理屈と精霊のそれとでは大きな違いがあるようでな。森の怒りを受けたわたしは、このままでは故郷の里にも戻れんのじゃ。というわけで――」
いつのまにか、目の前に来ていた姫刀自が、ずい、と身を乗り出し、ぱん、とファヴランの両肩を叩いた。
「いまこそ、そなたの出番じゃ。頑張って、石の安置所を見つけてくれい」
ファヴランの目が点になったところで、いったい誰が責められよう？

しかも容赦なく、戦闘力だけはある使徒ふたり組が、こちらの心理的負担を増やすだけのような言葉でもって『励まし』てくれたものだから、タチが悪い。

「すみませんね。もともとは感知能力の高い使徒の誰かをどこかの街で借り受けるつもりだったんですが、話を聞いたとたん、誰も協力を申し出てくれなかったばかりか、この森で特定の場所を探知できる使徒など大陸中捜しても見つかるはずがない、なんてありがたくもないお墨付きだけいただいてしまって」

「そういうことなら耐性のある姫刀自に案内してもらうしかないと思ったんだが、先程の彼女の説明通り、森に締め出されたのは彼女も同様らしくてな」

「なら、彼女以外で里から森の外に出た人物がいないものかと調べたわけなんですが」

「いたにはいたが、生憎故人でなぁ。そんなこんなで、もうなりふり構ってられない状況になって」

「迷わずの森関連の記述を洗いざらい調べたところ――」

使徒たちの声が、次の瞬間、綺麗に重なった。

「きみ（お前）のことが、出てきたわけだ」

この瞬間、ファヴランのなかの『聖石の使徒』なる存在への敬意や尊崇の念は木っ端みじんに砕け散った。

「あんたたち！　いったいおれのこと、なんだと思ってるんだよっ!?」

我ながら虚しいとしか思えぬ叫びが森の一画を震わせた。

彼の望む答えが返ってくることは……なかった。

「わたしが物心つくころに奉納されたという話だからな。石自体、すでにその土地に馴染んで戻りたがっているはずじゃ」

そう言い、姫刀自は、あろうことかなかろうことか、祟り石と化した大きな琥珀を、本当に気軽にファヴランの手に握らせた。

「ひゃあっ」

と叫び、思わず放り出そうとしたところを、無理やり両脇からがっちり固めてくれたのは、体格的にはまだかなわないとファヴランが認めるしかない使徒の青年ふたりだった。

こんな場合だけ、抜群の阿吽の呼吸を見せるのは、いかなるものかと思わないでもなかったが、ふたりは任務完遂するつもり満々で、さらには姫刀自はそれ以上に故郷に戻る気満々だった。

（だからって、他人の人生狂わせていいって話にはならないだろうがよっ!?）

と、本当は言いたかったのだが、溺れる者の藁縋りの迫力を目の当たりにして、抵抗できるだけの胆力はファヴランにはなかったのだ。

おかげで、（イヤなのに）姫刀自が抱いて生まれてきたという聖石の琥珀を押しつけられた

ままの格好で、（イヤなのに）穢され、たやすく暴走するようになった聖石である琥珀の、なけなしの「戻りたい」という思いのまま、（本当っっにイヤなのに）石の示す方向を指し示し、方角もなにもわからない森の中を移動中というわけだ。

（おれ、あっち、とかこっち、とかしかわからないくせに、間違ったことない能力って不便極まりなくて、だからもっと便利で使い勝手のある特技だったらよかったのに……て、飽きるほど思ってたけど……）

現在の状況を思うだに、それはちっともよくないのだと思い知らされた。

能力が増えるということは、受け、背負うものもまた増えるということなのだと、この森に入って以来、思い知らされるばかりだ。

現にいまだとて。

「ええっとぉ……あっちの方？」

疑問符まじりのファヴランの言葉に従い、一行がその指し示された一画に足を踏み入れたとたんにだ。

ひゅるる、しゅるる、と音にならぬ音をたてて、周囲の巨木が自分たちの方を狙ったとしか思えないタイミングで倒れてきたり、地を這う蔓草が偶然彼ら全員の足にからまった挙句、素直に倒れこんでいたら、むき出しの尖った岩に額を割られていたに違いないだとか、その位置で倒れた場合、確実に心臓か喉元を、枯れ木や朽ち枝に貫かれていたに違いないことがそれぞれ三度も四度も五度も六度も起こったという、この異常さはなんなのか。

聖石自体は戻りたがっている。
そのことに間違いはない。
森もまた、聖石の戻りを心待ちにしている。
そのことも、また間違いのない事実だ。
なのに、なぜ、これほどの妨害を受けるのか。
いや……まだ、それだけなら、いい。
だがしかし――なぜ。
「なっっんだって、こんなにこの森ってば、攻撃的なわけ!?　こっちは呼ばれてるって感じるから素直に従ってるだけなのに、なんだって、こんな攻撃しかけてくるわけだよ!?」
ファヴランが真っ青な顔で、そう叫んだ瞬間にも、蔓草とおぼしきものが彼の首にまきつこうと、自然ではありえない動きで襲いかかってきていた。
ひゅん、と風を切るのにも似た音を耳が拾ったのは次の瞬間。
目を開けた先には、抜き身の剣をかざしたトリノアークがいた。
切断された蔓の先端が、ぽとりと地面に落下し……のたうつようにびくびくと蠕動した。
そのさまを目にした瞬間、ファヴランは思わず「げ、気色悪っ」とつぶやいていた。はっと口を押さえたときにはすでに遅く、姫刀自のこぶしが飛んでくる。
「口には気をつけよと、何度言ったらわかるのじゃ!?　ただでさえ怒り狂うておる森を、これ以上刺激してどうするっっ！」

盗んだのも穢したのも、自分ではないというのに、実際に森の怒りにさらされるのは、無関係な自分たちだというのは、よく考えなくても理不尽な話だと思う。

（でも、いまさらそういうこと言ったって、無駄なんだよな、きっと……）

と、嬉しくもない確信を胸に、ファヴランはため息をついた。

「悪い。気をつける」

力なくそうつぶやいた彼は、しかし次の瞬間、信じられない言葉を耳にした。

「……それにしても、聖石と森両方が怒り狂っているだけあって、攻撃も矢継ぎ早ですねぇ。こんなことなら、少しぐらい浄化してから連れ帰るべきでしたかねえ？」

なんでもないことのように――とてつもない問題発言をしてくれたのは、見てくれだけは温和そうで優美な、白皙の美青年である。

「ちょっと待て――っ！」

ファヴランが大声をあげたのは、当然というものだった。

「はい？」

どうしたのかと言わんばかりの顔で答えたナウルニールを、彼は食い入るように凝視し、ひと呼吸おいてから、ゆっくりと――焦って質問を間違えないために――問いかけた。

「……聖石の浄化って、この森の……その安置場所じゃなくても、もしかしてできるのか？」

対する使徒の青年の返答は。

「おや、言ってませんでしたか？」

だった。

「聞いてねーよっっっ！　そういうことができるのなら、聖石見つけた時点でやっとけよ！　そうしたら、道中石の祟りのおかげで足止め食ったり、襲われたりすることもなかっただろうし、綺麗に浄化されてたら、森の怒りだって、軽減されてたかもしれないじゃないか！」

つまりは、この度重なる災難は、結局のところ彼らの怠惰のせいということになる。

「おれは……おれはっっ！　その場所でしか浄化できないんだと思ったから、仕方ないって思ってたのに……！」

こっちの都合などお構いなしに、強引に巻きこんでおきながら、自分たちは怠け放題してたとは――悔しすぎて涙が出てきた。

しかし、三人の同行者たちは、ひとかけらの反省の色さえ見せなかった。

それどころか――。

「いやあ、一応提案はしたんですが、強硬な周囲の反対がありまして」

悪びれもせず、ナウルニールが笑いながら答える始末。

そればかりか、トリノアークは「当たり前だろうが」と応じ、姫刀自もまた「提案というものは、せめてもう少しばかり、成功確率の高い場合にするべきだと思うぞ？」と渋面で洩らした。

（つまり、失敗する確率が高すぎて、やろうにもやれなかったってことなのかな？）

一気にとまではいかなかったが、少しだけ冷めた頭でファヴランがそう考えたとき。

まるで、彼の心中を読み取ったかのように、トリノアークが「いいや」と告げた。
「こいつの浄化が失敗することはあり得ない。問題は、成功しすぎた場合のことでなー。こいつの場合、その可能性のほうが高かったし」
うんうんと、ファヴランひとりを置き去りに、姫刀自がもっともだと言わんばかりに同意した。
「月障気を浄化できる化け物が、たかが人間のもたらした穢れなぞに手こずるはずも……」
聞き慣れない単語を口にした姫刀自は、しかし途中で「しまった」とばかりに口元を押さえた。
いつも自分がそうした瞬間、こぶしや平手を見舞ってくれる女性の珍しい失態――らしい、としかわからないのだが――に、ファヴランの意識が問題からずれた。
（ああ、姫刀自が女の人じゃなかったら、ここでいつもおれがやられてることやり返してやったのに……きっと、気持ちよかっただろうになー。なんか残念）
幼いころ、周囲の大人たちから、かなり頻繁に痛めつけられていた経験を持つファヴランは、だからこそ女性や子供には決して暴力を振るうまいと心に決めていた。リィーシャと一緒に暮らすようになって、ますますその思いは強くなった。
だから、どんなに手が早く、しかも度々容赦のないこぶしをふるう乱暴者でも、姫刀自に手をあげることなど考えられない。そしてそれは、使徒の青年ふたりにしても同じだろうという思いがあって――だから、彼がここで心底残念に思ったのは、もうひとり、姫刀自と似たよう

な性格の女性の同行者がいれば、平手なりこぶし――はさすがにやりすぎかもしれないが――を彼女に見舞ってくれたかもしれないのに……というものだった。

（そうしたら、きっと少しは溜飲さがっただろうにな）

あくまで仮定が前提であることで、その想像自体無意味なものであるはずなのだが、なぜか（それは愉快かも）と思えるあたり、彼は『生き上手』という特技の持ち主なのかもしれなかった。

そんなこんなで、ファヴランはうっかり姫刀自の失言の問題点がどこであるのか、思索することを忘れてしまったわけだが、結果として、これがいい方向に転がった。

「ファヴランくん」

覚悟を決めた様子で、改めて話しかけてきたナウルニールの面持ちは、真剣そのものだった。

「はい？」

なにやら姿勢を正さなければいけないような気分に襲われ、ぴんと背筋をのばした彼に、赤い瞳の使徒は神妙な顔でこう告白してきたのである。

「実はわたし、穢れというか瘴気というか、そういうものを浄化する力がありまして、いままでどんな大きなやつでも失敗したことはありません」

これが、自慢げな顔で語られた言葉なら、鼻持ちならないとか思っただろうが、なぜだか非常に困ったような顔で告白されたものだから、ファヴランは先が読めないこともあってどきど

きしてしまった。

「はあ……」

と返してうなずくことしかできない。

そんな彼の困惑にも気づかず、ナウルニールは重大な秘め事を告白するような面持ちと口調でこうつづけたのである。

「ですが、力加減の微調整というものがかなり苦手でして……」

やはり「はあ、そうですか」としか答えようがなかった。

(いったいこのひと、なにが言いたいんだ?)

とファヴランが思ったときのこと、だ。

「浄化しすぎると、石に刻まれた記憶までゼロの状態に戻ってしまうんですよね」

ファヴランはまだ、その言葉の示す深刻な問題に気づいてはいなかった。

「まあ、ひとを祟って不幸に陥れたことまで、石自体が忘れちゃうってのは、石にとって都合良すぎるっていうか、なんだかとは思うけど、でも、おれ個人としては、こんな祟りと敵意溢れまくりーな舞台に放りこまれるよりは、まだしもそっちのほうがよかったかも、とか思わずにはいられないんですけど?」

もはやこの状態に陥った身としては、どれもこれもいまさらというもので……けれどそれを素直に認めるのも癪だと思って、そんなことを言ってみたりもしたのだが、そこで姫刀自が、

「とんでもない!」

と口を挟んできた。
「いいか、ファヴラン？　聖石はそなたの知っておる子供石とは全然違うのじゃ。そのなかでも最大の違いは、子供石とは違い、聖石とそれを抱いて生まれてきた人間は、一生切れぬ絆で結ばれておる。具体的にどういうことかと言えばな、聖石が不浄の気に触れすぎ、歪んでしまった場合、それは半身である人間の心身にまで影響を与えるのじゃ」
まだぴんとこないファヴランのために、トリノアークがそっと耳元でささやいた。
「聖石の不浄が大きすぎると、正気失ったり、体調崩したり、下手すると体が異形化したりとかするらしい」
それは、ものすごい大事なのではなかろうか。
「なら、なおさらのこと――」
浄化してもらったほうがよかったのでは――と言いかけたファヴランは、ひとつの可能性に気づき、はっと息を呑んだ。
「まさか、もう精神面に悪影響が出てて、だからナウルニールさんの提案に反対したり、あんな乱暴な性格になったんじゃ……!?」
げいん、とファヴランの後頭部にこぶしが飛んでくる。
「だぁれがっっ！　乱暴な性格じゃっっ!?」
充分乱暴者じゃないか――とは、さすがにファヴランも口にはしなかった。
「だ、だけど……姫刀自の琥珀、ものすごい状態になってるじゃないか。前の街でも、急に苦

しみだしたのって、そのせいなんだろ!? だったら、やっぱり完全にではなくても、ナウルニールさんに浄化してもらってたほうがよかったんじゃないかって思っただけだろ!? どこが間違ってるんだよっ!?」

言葉の選び方に難があったのは認めるとしても、彼は真剣に姫刀自のことを心配し、その身を案じたのだ。

その返礼が、容赦のないこぶしとあっては、祟り石と化した聖石の悪影響が出たのだと思うのは当然ではないか。

必死にそう訴えかけたファヴランに、ナウルニールがどこか申し訳なさそうな顔で説明し始めた。

「あの……ファヴランくん。わかりやすい譬えとして、不浄化のことを話したわけなんですが、実は聖石は綺麗に浄化されすぎた場合も、半身の人間に少なからぬ影響を与えてしまうんですよ。つまり、生まれたての赤ん坊のように真っ白で無垢な状態に聖石をもどしますでしょう? そうしますとね、姫刀自が記憶をなくされてしまう可能性が高くなってしまうわけです。石自体も森の記憶を失い、彼女まで事情を忘れてしまったら、森の怒りは永遠に解けないことになってしまうわけでして……それは少々問題でしょう?」

少々どころでない大問題である。

「わたしとしても、里の外で記憶障害を起こした挙句、守るべき故郷を滅ぼすのは遠慮したかったのでな、せっかくのナウルニールの厚意だったが、謹んで辞退させてもらったというわけ

じゃ」

そう説明されてしまえば、そうですかと納得するしかない。

もしそんなことになっていたら、この森の力から察するに、村のひとつぐらい、簡単に滅ぼされてしまうに違いないのだから。

（ま、考えてみれば、おれのやることは同じなんだよな）

そして、この先に待ち構えているであろう危険の数々も――。

思い出したくもないことを思い出し、ファヴランはどんよりと落ち込んだ。

（もしかして、こんな深刻な裏事情なんて、知らないままのほうが、まだしも気が楽だったかも……）

嘆いてみたところで、後の祭りというものだ。

事情説明を求めたのは確かに自分だが、結果的に姫刀自の故郷である村の存続に関わる一大事を、ともに背負う羽目に陥ってしまったのは、まぎれもない事実なのだから。

自分以外の他者の命や運命を背負うということが、こんなに胸を苦しくさせることだとは、いままで知らなかった。

リィーシャと一緒にくらしていて、こんな風に感じることは一度だってなかった。

彼女は特別で、家族だったから。

否、違う。

そんな言葉では片づけられないぐらい、彼女はファヴランにとって近しい存在だった。まる

で、元はひとつだったのに、なんらかの事情で引き離されていたもの同士が、再びめぐり合ったかのような。

けれど、世の中には、そんな絆ばかりではない。

もっと脆くて薄い縁こそがほとんどだ。

（一味だって、家族みたいな一枚岩なんかじゃなかった）

幼いころは、アスマンと一味の誰かが口論するのがなにより恐ろしく、イヤだった。

いつもやさしいアスマンが、一味の誰かと衝突する度、荒れるのが見ていられなくて……失せ物探しの特技の件で、ほかの面々よりは親しくなった男に、おずおずと彼らの仲介を頼んでみたりもした。

返ってくる言葉は、当時の自分には理解できないぐらいに冷たいものだったけれど。

『放っとけ、放っとけ。ここが二代目の頑張り所だ。ガキにはわからんだろうがよ、派手に喧嘩したほうがいいことってなあるんだよ』

聞いたときには理解できなかった言葉。

いまでも素直にはうなずけないけれど、あれは互いの本音をさらしあい、感情をむき出しにすることで、歩み寄るための儀式だったのではないだろうか。

（家族でもない、脆い繋がりしかない……けれど仲間を、その仲間の背負った事情まで引き受けようと思ったら……）

それは、どれほどに重い負担となったろう。

けれど、それらの全部を、アスマンが放り出して楽になろうとしなかったのは、きっと。
親から引き継いだ面子に対する意地はもちろんあったろう。新頭領としての見栄もあったに違いない。自分の力を認めさせるために、手段を選ばなかったことも、きっとあったに違いない。
けれど……後になって初めて知ったことなのだが、ファヴランが拾われる以前と以降で、彼らの仕業とおぼしき屋敷の襲撃における死傷者の数は、徐々にだが減少しつつあった。
そのことを知ったのは、一味が壊滅した後、知らぬ顔で同じような稼業を始めてしばらく経ったころのことだった。
知ったばかりのころは、大した感慨も覚えなかった。
（まあ、おれっていう新たな金蔓見つけてたわけだしな）
それっきり、調べる気も起きず、放っておいたことなのに――なぜだか無性に、この森に入って以来、気になるのはなぜなのか。
ファヴランの心は、確かにどこかが動きだそうとしていた。
（アスマン……）
不思議なことに、以前は思い出すだけで、強烈な嘔吐感を催していた相手の顔が、くっきりと脳裏に浮かんだ。
面影のひと。
けれど、これまでしっかり思い出すことさえできなかった……ひと。

ようやく心に負担なく、思い出せたそのひとは、笑っていた。
それが真実であるかどうかは、この際ファヴランには関係なかった。
アスマンの言葉に唯々諾々と従い、この森を案内することに応じ、結果として彼らの悉くを見殺しにしてしまったのは、消しようのない事実なのだから。
(けど、アスマン。あなたももしかしたら、下からの突き上げで従う形になってしまったとかあんまり意見が多すぎるんで、わざとひどい事やって、それなりの覚悟のあるひとの反対意見だけ選別しようだとか……思ってた?)
当人がこの場にいない以上、確認の取りようはなかったが、ファヴランはなぜか、確信にまでは至らないものの、それに近いところに寄り添ったという思いを抱いた。
(アスマン、ごめん)
もしかしたらそれは、初めて成長したファヴランが思い出に対して放った言葉かもしれなかった。
彼のなかで、なにかが変わりつつあった。

14

過去にまつわる記憶を刺激されたせいで、少しぼんやりしていたらしい。そんなファヴランの頭をぐしゃぐしゃにかき回してくれたのは、豪胆な同行者のひとりだった。

「心配すんなって。またなんか襲ってきたって、きっちり追い払ってやるからよ。これでも腕には自信があるんだぜ？　お前のことは、責任を持って雅夜まで送り届けるしさ」

あからさまな子供扱いに、むっとしかけたファヴランは、自分を見つめるトリノアークの笑顔を目にして言葉を飲み込んだ。

また、記憶が、脳裏をよぎったのだ。

『ファーヴはいい子だな』

そう言って、同じようにファヴランの髪をくしゃくしゃにかき回してくれた、大好きだった青年――アスマンの笑顔が重なる。

どこが似ているというわけでもないというのに……そう、アスマンも時々だけれど、思わず見とれるような笑顔を見せたものだ。

もしかしたら――いまさら確かめようがないけれど、思わずにはいられない。もしかしたら

ほんの少しかもしれないけれど、アスマンは自分を利用するためだけでなく、好きでいてくれたのかもしれないと。

「……だったら、いいな」

ぽつりと洩らした一言を、しかし傍らの青年は誤解したらしい。

「なんだ、その願望口調は!? そりゃあ、おれはナニィと違って浄化だとかは皆目苦手だがな、こういう森で有効な秘密兵器といういうか、特技のひとつぐらいは持ち合わせてるんだぞ」

そうじゃない、とファヴランが口を開くより早く、トリノアークは懐をまさぐり、女性の小指の先ほどの大きさの、真紅の石を取り出した。

仕事の関係上、裕福な客と接する機会も珍しくはないファヴランは、それが高級な宝石として世に出回っていることを知っていた。

ただ、なぜ、それがトリノアークの手にあるのかがわからなかったが——彼が目にしたことがあるのは、もっと小さく、しかもすでに加工されたもので、主に女性の身を飾っていたものだからだ——まぎれもない、それは。

「……紅玉？」

なぜに宝石——なぜに紅玉？

（そういえば、風霊の大好物のおやつは聖石の子供石とか言ってたんだよな。もしかして、精霊ってお守り石に限らず、宝石とか貴石が好きなのかな？）

そんな疑問を抱いた彼は、もうひとつ、気になることを思い出し、恐る恐る尋ねてみた。
「あの……違ってたらごめん。もしかして、木霊って……女の人だったりする？」
確信があったわけではない。
単に以前、トリノアークが姫刀自を保護した際の話から思いついただけだ。いくら良識ある世話好きな女将が取り仕切る店とはいえ、娼館に迷いこんできた彼女を他人に預けたまま、しっかり一晩の夢を満喫したというのは……聖石の使徒として、かなり外れた行為だったのでなかろうかと、いまさらながらに気づいたわけであり、それなら彼は大変に女性が好きなのではないかと思い当たっただけのことだ。
そして、彼のように自分自身に自信があり、しかも社会に確たる足場を持つ男性の中には、女性に贈り物をすることを楽しむ者が少なくない。もちろん普通は美しい『人間』の女性に限定されることだろうが、彼のような特異な立場にある男性なら、もしかしたら人外の存在に対しても、同等の情熱を以て、同じことをするのではないかと思ったわけだ。
無知とは時に恐ろしいと言うが、それは中途半端な知識があった場合、それ以上にとんでもない誤解や思いこみを生み出す温床となる。
そして、だ。
「ああ、そうらしいぞ？　生憎おれは見たことないんだが、見たことのあるやつは絶賛してたな。精霊の変異種は女性形を取ることが多いが、木霊の美しさは群を抜いてるとかなんとか。そんな美人さんなら、おれも一度でいいから見てみたいもんだがなー。適性に欠けてるもんだ

からあっちが姿見せてくれる気になってくれない限り、目にすることってできないんだよな」

トリノアークがまた、ファヴランの中に生じかけた誤解を増殖させるようなことを言い出したものだから、事態は一気に最悪の方向へ向かった。

もっともそれは、あくまで後々になって振り返って初めてそうだったとわかる類いのものだったのだが。

しかし、中途半端な知識と思い込みと自覚のなさ——この三拍子が揃った場合、事態はかなりの確率で悪化の一途をたどることが多い。

それはこのときにも当てはまった。

(もしかして、このひと、あわよくばこの森の美人な木霊の姿見てみたいからって、女性が好きな紅玉なんて持ち歩いてるんじゃ……?)

女性に目がない相手であるという先入観が、ファヴランに疑わしげな表情をたたえさせた。

それをまた誤解して、トリノアークがむきになったわけだから……両者は同罪というものだろう。なにしろ、不幸な偶然を呼び寄せてしまったのは、このふたりが期せずして揃えてしまった前述の三要素だったのだから。

「あ、疑ってるな!? いいか、見てろよ、ちゃんと木霊関連の達人に、しっかり威力のある呪まで教えてもらってきたんだからな!?」

これはれっきとした武器にだってなるんだぞ!?

トリノアークの台詞が「武器なんだぞ」だったら、もしかしたら結果はもう少し違うものに

なっていたかもしれない。

だが、「武器にだって」と言われた瞬間、（やっぱり、主目的って……貢ぎ物？）とファヴランが思ったのは仕方のないことだったが、その態度に「そんなことないぞ！」と、言葉だけでなく実践することで証明しようとしたトリノアークの判断は、短慮にすぎると言っても過言ではないだろう……あくまでもすべての騒ぎが終息した後に下された判断だったわけだが。

「お前、その顔！　全然信じてないな!?　わかった、じゃあ、少しだけ見せてやるよ。どうやらお前は精霊の気配とかに敏感らしいからな。おれには皆目わからないが、呪の気配ぐらい感じ取れるだろうからな」

まあ、安全第一に行くから、周囲に被害が及ぶことはないだろうし――。

呑気なことを言って、トリノアークは懐から取り出した紅玉を見つめながら、呪文らしきものを口にした――ただし、とんでもない棒読みの口調で。

「命たる朱。命紡ぐ赤。命燃やす紅。命たる力を秘めたる色宿す石よ……ってな。赤い石は火性を宿すから、樹木に宿る木霊にはある意味天敵なんだよ。綺麗だっていう女の子燃やすのは本意じゃないし、でもおれにだって大事なやつはいるからー、先っちょぐらいは焦げてもらってもいいかなーって覚悟ついたときのために用意してもらった仕掛けなわけよ、これって。こういう力、こっちが持ってるってわかったら、向こうだって手出しするの躊躇うだろうし、抑制効果抜群だろー!?」

朗らかに高らかに、周囲に響き渡ったその声。

それは自分を安心させるためだけではなく、周囲への木霊に対する警告も兼ねていたのだろう。

しかし――しかしだ。

あまりにもタイミングが悪すぎた。

トリノアークが取り出し、雰囲気作りのためか、高々と紅玉を掲げたところに、なんと彼らを狙ったとおぼしき、新たな蔓がのびてきていたのだ！

そして、トリノアークの台詞――「命たる朱、命紡ぐ赤、命燃やす紅。命たる力を秘めたる色宿す石よ」という、最初の呼びかけだけでも充分、問題の紅玉は活性化していた……らしい。

『きゃあぁぁぁぁっっっ！』

と、とんでもない女性の悲鳴が耳に届いた瞬間、思わず声のしたほうを振り仰いだファヴランは、宙に浮かんだ美女が、あざやかな炎に包まれ、苦しんでいる姿を目にした。

まずい、と本能的に悟った。だから彼は慌ててトリノアークに告げたのだ。

「早く、その石しまって！　早く！　綺麗なひとだよ、焼き殺したいわけじゃないんだろう!?　なら、しまって！　早くったら！」

さすがというか、まだしも無駄に経験を積んできたわけではないと言うべきか、トリノアークは事情の説明を求めるのは後回しにして、ファヴランの言葉に従った。

なにか特別な仕掛けでもほどこしてあるのか、彼が紅玉を懐に引っ込めたとたん、女性を焼

き尽くさんばかりに燃え盛っていた炎は消えた。
　そのことで、一時の安堵は覚えたものの――ファヴランの胸にはイヤーな予感が渦巻きはじめた。
　異変に気づいたのだろう、前を歩いていた姫刀自が、真っ青な顔で振り返った。
「き、き、き、貴様たちっっ！　いったいなにをしでかした!?」
　彼女の恐怖すらたたえた表情に、ファヴランは最悪にも近い事態の到来を確信した。
「なにをしたんだ!?　森中が怒り狂ってるじゃないか！　ここまで怒り心頭になった森を宥めるなんて真似、いまのわたしには到底無理だぞっっ!?」
　血相が、変わっていた。
（あ、やっぱり怒ってるんだ。でもってとりなしも無理なんだ）
　どこか他人事のように、冷静に事態把握をすませたファヴランは、びしっとある方向を指さして叫んだ。
「目的地とはちょっと方向ずれてっけど、いまの状況で一番安全なのはあっちだから！　いったん身を隠してでも、嵐をやり過ごすのが先決だと思うんだけど……姫刀自？」
　この森の一番の知識人にお伺いをたてたところ、不機嫌な顔で、彼女はそれでも渋々うなずいた。
　ただし、彼女も念を押すことだけは忘れなかった。
「そなたの勘、本当に信じてもいいんだろうなっ!?」

答えられるはずがない。

「勘は勘だしっ！　絶対だなんて言う自信なんてあるはずねえよ！　だけど、あっちに行くのが一番だって感じるのは本当っ！」

ファヴランの言葉を聞いた姫刀自の決断は早かった。

「なら、そこへ行くぞ！　急げ！」

そうして走り出した一行四人だが、不幸なことに、ファヴランは……ファヴランだけが、その後につづいた彼女のつぶやきを耳で拾ってしまったのだ。

小さな、小さな、彼女のつぶやき――。

「やり過ごすどころか、嵐の中心に飛び込むようなものだがな」

「ひっ、姫刀自っっ！」

そういうことはちゃんと教えてもらわないと――と、文句を言ったファヴランに、しかし彼女はあっさりと「だから、本当に信じてもいいのかどうか、確認を取ったろう？」と返してくれた。

そして、彼女はこうも告げた。

「うちの里には、代々つづく霊験あらたかな占術師の一族がいてな。彼らの示す指標のおかげもあって、代々無事に里を守れてきたんだが、不思議なことに、タイプが綺麗にわかれるのじゃ。片方は、前情報がない時点では、驚嘆するべき的中率を誇るくせに、なにかの情報を知ったとたん、占いの精度がさがるというもの。もう片方は、才に目覚めた当初は当て損なうこと

も少なくないのだが、経験を積むことで徐々に精度を上げていくという人種じゃ」

トリノアークのしでかした大失態のおかげで、全速力で走っているにも拘わらず、背後から伝わってくる殺気は膨れ上がる一方だ。

とても立ち止まり、詳しい事情を聞いていられる余裕はない。

「えっと……そういう講釈は、後で落ち着いたときにゆっくり教えてほしいわけで……いま切実にお尋ねしたいのはっ！　なんだっておれの言ったとこがやばそうな場所だって知ってたくせに黙ってたのかってことでっ！」

危険な場所だって、わかってたんなら止めろよな――という、声にならないファヴランの叫びに気づいたのかどうかは不明だが……彼女はあっさりと、こう応じたのだ。

「ああ、お前は明らかに前者のタイプだから。下手に情報を与えたら、混乱して標を見誤る可能性が大きいと思ったものだからな」

だが、一応念はおしただろう？　――と、自慢げに言われても、嬉しく思えるはずがない。

「でも、あんた、やり過ごすどころか大嵐になるかもって……」

言ったじゃないか!?

それって、おれが正しくない指標を選んで……つまりは間違ったってことにはならないのかよ!?

そう問いただしたファヴランに。姫刀自はなぜかすべてを悟ったような穏やかな表情でこう言い聞かせたのである。

「お前はまだ青く未熟だ。そんなお前に、ひとつ言葉を贈ってやろう……世の中にはな、虎穴に入らずんば虎児を得ず、というありがたい言葉が残されているんだよ。わたしたちが、今向かってる先こそが、その虎穴中の虎穴だ」

そんなこと、偉そうに言わないでほしい——とは、ファヴランの心からの叫びだったが、もはや方向転換もできない以上、前進するしかなかった。

ビキ、バシ、グシャッ——背後からは物騒な音が聞こえてくる。ついでに言うなら、こちらが全力疾走しているにも拘わらず、音は確実に近づきつつある。

いったいなにが起こっているのか、恐ろしすぎて振り返ることもできない。

(こんなとこで、死んでたまるかっっ!)

必死に足を動かしていたファヴランは、そのとき不意に、よく知る声を耳にした。

『こちらよ……』

それは、まだ幼さの残る少女の声——。

『こっちよ、ファヴラン』

「リィーシャ!?」

慌てて、声のしたほうに目をやった彼は、驚きのあまり瞠目した。

そこには、彼がよく知っているはずの少女の姿があったからだ。ただし、その黒髪は緑味を増し、瞳は朽葉色から藤色に変化し、さらには十五、六に成長していたが。

しかも、だ。

『こっちよ、ファヴラン……急いで』
宙に浮かんだまま、少女は彼にそう告げたのである――。

そこは、冒しがたいまでの静寂をたたえた場所だった。
まるでそう定めて植樹したかのように、ほぼ真円を描くように、ぽっかりと開かれた空間がある。街の広場くらいのそこからは、切れ切れでない空を見ることができた。その陽射しをうけ、ほかの場所では見かけなかった、小さな草花がしかし茂りすぎることなく地面を絨毯のように覆っている。
まるで金色の粒のようなきらきらとした光が、祝福するかのように、その空間を満たしている。美しい――美しすぎる場所だった。
「……ここは……」
記憶の一部を刺激され、ファヴランは呻いた。
初めてではない――この場所に足を踏み入れたのは、これが初めてでないことを、はっきりと思い出したのだ。
激しい動揺が彼を襲ったが、それは長くつづかなかった。ナウルニールが感心したような声を上げたのだ。

「聖域、ですか」

精霊関係の感知能力皆無を自認する青年ですら、普通ではないなにかを、この場所に感じ取ったのだろう。

姫刀自がかぶりをふった。

「正確には、少し違う。ここはうちの初代が森に誓いを立てた場所でな。代々新たな聖石を奉納する際、祭儀を執り行うのに使われているんだ。生憎、この森にはアスカニーリの化身は住んでおらぬのでな、聖域とは呼べぬ」

「なるほど、森にとっても大切な場所なわけだ。おかげで、暴れまくってる木霊たちも、さすがにここには手出ししてこない、と」

トリノアークが得心がいったようにうなずきながらつぶやく——敵意溢れ、しかも攻撃までしかけてくる森のなかを、全力疾走して駆け抜ける一行の殿をつとめた青年は、最も多くの運動量を強いられたはずなのだが……呆れたことに、息ひとつ乱していない。

「元凶のくせに、なに他人事のように呑気な感想洩らしてるんですか。さて、姫刀自、そういうことでしたら、確かにここは安全らしいですが、なにゆえにここが虎穴なんですか？」

前述した事情のせいで、先頭に立って切り込み隊長をやっていたナウルニールも、トリノアークほどではないが、相当切った張ったで忙しかったはずなのだが、しっかり姫刀自とファヴランの会話を耳で拾っていたらしい。

「さすがじゃのう、あの騒ぎのなかで聞いておったのか」

素直に感心する姫刀自を見ながら、ファヴランは彼女もまたすごい、と思った。
（あれを……あの状況を「騒ぎ」の一言で片づけるのか……）
普通よりは波瀾に満ちた人生を歩んできたと、自分では思っていたが、どうやらそれはとんでもない思い違いだったようだと、ファヴランは認識を改めた。
世界は広い。ここまで恐ろしくも想像不可能な状況のなかにあって、平然としていられる人間が、こんなにようよいようとは。
しかし、そんな面々の会話の内容より、その様子に呆れたり感心しているあたり、自分も五十歩百歩であることには、ファヴランは気づいていない。
そうこうしている間に、姫刀自の説明が始まった。
「ここはいまは確かに安全地帯と呼べるのだが、外の騒ぎをどうにか鎮めぬことには、出ていけんのが難点でな。騒ぎが治まるまで待つという悠長な手段は選べないわけじゃ。なにしろ、中心が木霊なわけじゃからな。知っての通り、木霊は周囲に対する影響力が大きい。伴侶持ちでないものは特にな」
それはつまり、周囲の精霊たちにまで、怒りを感染させるということだろうか。
尋ねたファヴランに、姫刀自はうなずいた。
「その通りじゃ。しかも、この森には伴侶持ちでない木霊だけでも、数十人はいてな……彼らが悉く怒りに身を任せたりした場合、被害は森だけに留まらん可能性が高いのじゃ。まずうちの里が真っ先に被害を受けるだろうからな、なんとしてもそんなことになる前に気を鎮めても

らわねばならないわけじゃが……」

そこでいったん言葉を切った彼女は、なぜかファヴランに視線を投げてきた。

「……そなた、歌は得意か？」

「はあ!?」

間の抜けた声だと自分でもわかってはいたが……こんな場面でこんなことを言い出されては仕方のない反応だった。

「歌って、まさか聖歌とか!?　無理！　聞いたことはあるけど、覚えてんのはさわりぐらいだし、歌えと言われてもできる自信ないよ」

第一、なぜに歌、そしてなにより、なぜにおれ!?

「決まっておる。この場で効果的な歌を歌える者は、そなた以外いないからじゃ。別に歌に限らず楽曲でもいいとは聞いたが、楽器なぞここにはないからの」

ここで口を挟んできたのは、意外にもトリノアークだった。

「あ、小さいのでも構わないんなら、土産（みやげ）用に買った横笛があるけど？」

そう言って、彼が懐から取り出したのは、実に女性好みに包装された代物（しろもの）――一目で、女性への土産用に買ったのがわかる。

（このひとって……）

と、思ってしまったファヴランに罪はなかったろう。

ところが、姫刀自はそうではなかったらしく、物凄（すご）く真剣な顔で青年に問いかけた。

「吹けるのか？」
答えたのは、相棒の青年だった。
「意外でしょうが、かなりの腕前であることは保証しますよ。もっとも、とある晴嵐姫のおかげの分が大きいですが」
後で聞いたところ、晴嵐姫とは、木霊とは別の風霊の変異種のことらしい。
姫刀自の顔がぱっと輝いた。
「そうか、それはいいな！　よし、トリノアーク、そなたにも協力してもらおう。じゃが、一番に肝腎なのは、そなたじゃ、ファヴラン。流行り歌じゃろうが童謡じゃろうが戯れ歌じゃろうがなんでもよい。歌そのものは得意か、どうか!?」
だから――だから、なぜに歌!?
困惑しつつも、彼は正直に答えた。
「へ、下手と言われたことはないけど、上手いって褒められたこともない……けど」
実際のところ、ここ三年ほどは歌らしい歌を口にしたことはない。
「正式に習ったこととかないから……」
過分に期待されても困る。
ところが、そんな彼の答えに、姫刀自は身も蓋もない言葉をさらに投げ返してきてくれたのだ。
「ああ、いい、いい！　大切なのは、音痴すぎて彼らの神経をさらに逆撫でしないこと、だか

らな。ふたりでは、少々きついかもしれんが、ここはひとつ、頑張って喉から血が出るまで頑張って、歌ったり笛吹いたりしてくれ」

いともあっさり、かなりひどいことを言いつけられたような気がするのは、はたして錯覚なのだろうか。

「ちょ、ちょっと、待――――っっっ！」

せめてもう少しわかりやすい説明をしろ！

怒鳴りつけたファヴランに、応対したのは姫刀自ではなく、なぜか申し訳なさそうな顔をしたナウルニールだった。

「すみませんが、これからしばらくの間、うちの相棒の笛と交互に、流行り歌でもなんでもいいですから、歌ってほしいわけなんです。風霊は全精霊中、一番楽曲や歌の影響を受けやすい性質を持ってますからね。楽しい歌や曲が聞こえてきたら、そっちのほうに気が取られるというか、さっさと感情を切り換えるというか……もともとが楽しいことや面白いことが大好きな気質の精霊ですから。ちょうど、ここは森の中心でもありますし、ここから発信したら、かなりの効果は期待できるということで」

よろしくお願いします――と。

お願いされてしまった。

「本来なら里の『守護者の伴侶』が総動員して当たるところらしいのじゃが、ないものねだりをしたところで仕方ないゆえな」

だから、お前たちには頑張ってもらうしかないわけだ、と。
もはや動かしようのないこととして、役割を分担されてしまったファヴランは、慌てて口を挟んだ。
「ちょっと、待って！　だって、儀式のとき歌うのって、木霊憑き……じゃない！　守護者の伴侶ってひとたちに限られてるわけでしょ!?　つまり、ただの歌声じゃ、効果ないってことじゃないのっ!?」
「なにを言っておる。じゃからこそ、そなたらに頼んでおるのではないか。そちらの鋼玉の片割れが、晴嵐姫の思い人じゃったのは嬉しい誤算だったが……まあ、これで少しは勝算も上がるというものじゃ」
告げるべきことはすべて口にしたとばかりに、姫刀自はナウルニールに向き直った。
「さて、我等もその間に聖石の浄化を行うとしよう。ここなら、森の気が根強いゆえ、浄化されすぎるということもなかろうからな」
勝手に話を進める姫刀自に、ファヴランは必死に説明を求めた。
それに対する彼女の答えは――呆れたような顔での、率直な、一言。
すい、と彼の背後を指さし、彼女は告げた。
「なにを間の抜けたことを言っておる？　なら、そこでじっとそなたを見つめておるのは誰じゃというのじゃ？」
その言葉に、振り返ったファヴランの目に映ったのは、緑の黒髪を豊かにのばした、藤色の

双眸の少女――ただし、先程同様、その姿は半ば透け、その体は宙に浮いたままだったが。

「リィーシャ……」

隣で、トリノアークが感心したようにつぶやく声が聞こえた。

「初めて見たが……なるほど、木霊ってのは別嬪さん揃いだな」

驚きのあまり、声を失ったファヴランに、実体を伴わぬ姿のまま、リィーシャは話しかけてきた。

『歌って……ファヴラン』

と。

『わたし、ファヴランのあの歌が、大好き。どうかあの歌を』

歌って――。

その瞬間、ファヴランの記憶が一気に解放された。

街中でぼろぼろになっていた少女――放っておけなくて、部屋に連れて帰ったとき、両腕で抱きしめていたのは、人間の女の子ではなく、干からびて、枯れかけていた藤の若木だった。近くの家の花壇から、栄養たっぷりの土をわけてもらってきて、素焼きの鉢に植えてあげて、水をあげて肥料をあげて……そうしているうちに、新しい葉が出て元気を取り戻していった。

リィーシャがひとの姿を取るようになったのは、本当に元気になってからのことだったのだ……言葉をかわせるようになったのも。

（ああ、そうだ……そうだったんだ……）

すべてを思い出し、ファヴランは姫刀自の……否（いな）、リィーシャの望むまま、昔少女に聞かせつづけた子守歌を歌い始めた。
木霊たる少女の力がそれに重なり、歌声は森中に響いた。
技量の拙（つたな）さなど気にならないほどに、それはやさしい思いに溢れた素晴らしい歌だった——。

エピローグ

湯煙が立ち上る温泉に身を浸しながら、「あー、まいった」とぼやきながら、大きく口を開け、呼吸を繰り返す青年の姿があった。

迷わずの森の木霊が暴走しかけた騒ぎから、中一日置いた日の午後のことである。

「ほんっとにまいった。今回の役回りは用心棒だけだって話だったから引き受けたってのに……まさか、最後の最後で、あんな重労働させられるとは……抜かったぜ」

普段使わない筋肉使いまくったもんだから、体中だるいったら。

ぶつぶつ、ぶつぶつ文句を言い続けているのは、主に腕っぷし関係担当ながら、実は楽器演奏という特技も併せ持つ鋼玉コンビの片割れ、トリノアークだった。

迷わずの森で起こった木霊の暴走を宥めるために、一番貢献したのは『案内役』として引っ張ってきたファヴラン少年だったわけだが、その負担を減らすために、彼も相当の消耗を強いられたのだ。

つまり、横笛の演奏という行為によって、だが。

「なあ、ナニィ」

「なんですか？」

「お前、最初からおれを巻き込むつもりだったんだろう？　でなきゃ、おかしいもんな――いつも自分とおれの負担、秤にかけて、神殿上層部からの申し出に応じるかどうか決めるお前が、今回ばかりは自分の負担が多いの承知で請け負ったんだもんな」

結局、こうなることまで、お前は見通してたってわけだろう？

当然のことのように言われたナウルニールは、トリノアークの予想通りのやわらかな笑顔で「とんでもありませんよ」と返してきた。

「あんな風に、あなたをこき使うことになるだなんて、かけらも想像できませんでしたよ」

こき使えて楽しかったと聞こえるのは、きっと気のせいではないだろう。

なにより――件の横笛を、雅夜の市場で見つけたとき、率先して双方の養い児である子供の情緒教育のためにも購入しましょう、と主張したのはナウルニールの方だったのだ。

ファヴランと交代してとはいえ、一昼夜笛の演奏に駆り出されるとわかっていたら、絶対応じなかったに違いない依頼だっただけに、騙されたという思いが強い。

しかし、その一方で――。

「ほんっと、この里に湧く温泉って、気持ちいいですねえ。食べ物も美味しいですし、頑張った甲斐がありましたよね」

にっこり笑う相棒の顔は、本当に楽しそうである。

「まあ、確かにな。ところでナニィ、ファヴランのことはどうする？　木霊憑きとなると、野

放しにしとくのは物騒じゃないか？　結局街での騒ぎも、あいつのせいだったらしいし……」

そう、てっきり姫刀自こそが、木霊憑きだと思っていたのだが、そうではなかったのだ。

なんでも彼女の一族は、森そのものと誓約を交わした関係からか、決して木霊に選ばれることはないのだという。どうせ彼女は里に戻れば、外に出てくることもあるまいということで、実は神殿にも木霊憑き云々の話は伝えなかったのだが、それがファヴランだというのなら、話は別になる。

先日の騒ぎでも明らかな通り、木霊とその伴侶は、その有する強大な力ゆえに、大きな危険性を孕んでいるのだから。

かと言って、彼のことを神殿に通報するのも、なにやら気が引ける。神殿側が、彼らの危険性を重視しすぎた場合、最悪監督兼指導の名目で、その身柄を拘束しないとも限らないからである。彼の尽力がなかったら、木霊たちの暴走を止めることができなかったことを思えば、恩を仇で返すような真似は遠慮したいところだ。

しかも、ファヴランにはもうひとつ、自身も知らないらしい問題がある。

森に墜落同然に落ちた際、意識を失った少年の無事を確認するために、あちこち調べていたときのこと、トリノアークは彼の左耳の後ろに、由々しき徴を見つけてしまった。

青く見えたもので、最初は打ち身でできた痣かと思ったのだが、そうでないことはすぐにわかった。なぜなら、それは藤か葛の花を連想させる花房の形をしていたからだ。

そしてこの国――蒼炎の王家の紋は藤花。

遺伝によって、血の濃い王族に出るといわれる痣の形が、そのまま使われたのだと聞いた覚えがあった。

だとしたら、彼の出自は明らかということになる。しかし、彼と重なる王族の行方不明者の記録は残されていない。

それはつまり、彼は誕生さえ秘された王家の血を引く子供ということになる。そうでなく、痣が生まれた後に施された刺青の類いであった場合、王族の末裔を騙らせるがための小細工ということになり、どちらであっても騒動の元としかならない。

どちらにせよ、ファヴラン自身が与り知らぬ以上、彼の責任ではない。

悪いのは彼の存在を秘めた、あるいはそんな細工をほどこした何者かであって、まかり間違っても彼には一片の非もないのだ。

だが、そんな爆弾を抱えた少年が、神殿の監督下に置かれてしまった場合――自身も気づいていないだけに、どんな騒ぎが持ち上がることになるか。

正直なところ、考えたくはなかった。

だが、力や感情の制御も満足にできぬ木霊憑きを放置してはおけぬというのも、また真理。

トリノアークは思わず、頭を抱えこんでしまった。

「だーっっっ！　いったいどうすりゃいいって言うんだ!?」

だが、しかし。

彼の長年の相棒は、事態をさほど深刻には考えていないようだった。

「ここでわたしたちが気を揉んだところで、始まりませんよ。姫刀自にとってもファヴランくんは恩人であるばかりでなく身内も同然なんですから、なんとかうまいことを考えてくれるでしょう。彼女としても、木霊とその伴侶が危険だとか、その名産地がこの森だとか、広く世に知れ渡るのはありがたくないでしょうしね。なにより、かつて祖国を滅ぼされ、ようような思いでこの地にたどりついた、落人とその指導者の末裔であるこの里のひとたちなら、似たような立場のファヴランくんにとって、居ていい場所がどれほど大切なのか、わからないはずはないと思いますよ」

それで彼の抱える危険性が、客観的に見て放置しておいてもかまわないぐらいになるのであれば、わたしたちがいらぬお節介を焼いて、神殿にあれこれ言いつける必要もなくなるじゃありませんか。

「ね？」

性別不詳の美貌に、意味深長な笑みをたたえてそう言ったナウルニールに、トリノアークもにやりと笑ってうなずいた。

「それもそうだな、わざわざ上層部のご老体たちに、余計な心労をかけるこたぁないな」

「そうそう。もしそんなことをして、どなたかの寿命が縮んだりしたら、後味が悪くて仕方ないですしね」

「ご老体は労らないとな」

……かくして、世界中の神殿から、手に負えない事態が生じる度に、呼び寄せられる腕利き

の聖石の使徒ふたりは、この面倒臭さ最大限と思われる事態を知らんぷりで通すことに決めたと……そういうわけである。

そして、使徒ふたりが温泉を満喫しているそのころに、ファヴランは姫刀自からひとつの提案を持ちかけられていた。

「修行ーっっ!?」

思いもかけないことを言い出され、ファヴランは心底困惑していた。

「おれ、べつにそんなの必要ないと思うし……だって、それって、あれだろう？　心、明鏡止水のごとくだとかなんだとか。おれ、自慢じゃないけど、そんな心境に至れる自身皆目ないしっつか、なりたくもないし」

だから、謹んで辞退させていただきまーす、と。

身を引きかけた彼に、姫刀自が投げかけてきた言葉は恐ろしいことこの上ないものだった。

「……狩られるぞ」

一瞬意味を把握できなかった。

あまりにも思いがけない言葉にすぎたのだ。

しかし、なぜだか里に戻ったとたん、威厳とおぼしき迫力を、尋常でない規模で拡大した後

背負った彼女の言葉には、聞き逃してはいけないような迫力が宿っていた。

思わず、声が裏返った。

「か、狩られる……って？」

「文字通りの意味だ。お前、外の世界で、木霊とその伴侶がどんなに危険視されているか知らないな？　大抵、そうとバレた時点で、神殿は確保に動きだす。見つけて、捕らえて、木霊と接触できない牢獄に閉じ込めて、暴走されてはコトだから、それなりに快適な環境を整えてやって、結局のところは死ぬまで飼い殺しというのが定番だ」

まあ、働かなくても生き延びられるっていう意味では、天国かもしれないが――。

「このまま、リィーシャとの関係を、これまで通りの感覚と直感にまかせたまま、外で生きていこうとしたら、まず間違いなくそうなるぞ？」

さあ、どうする？

尋ねられ、ファヴランは思わず「狡い」とつぶやいた。

これでは選択肢など、ないも同然ではないか、と。もちろん破滅を望んだ場合の道筋だけは残されているわけだが。

けれど、今のファヴランにとって、選択の余地はない。

生きたいから――リィーシャとともに。

そうである以上、選べる道はひとつきり、だった。

三年後――。

ファヴランは名も伝えられぬ小さな里を後にした。

「いつでも帰ってきていいんだからな」

最後にかけられた声を心の励みに、くすりと笑った彼のそばにひとならぬ気配が現れた。

「意地っ張り、なんだから」

呆れたような、困ったような、それでいて笑いを含んだささやきだった。

その髪は、いまやほとんど緑。褐色の肌はますます健康そうで、双眸に宿る藤色はあざやかだった。

「本当は、外になんか、でなくてもいいって思っていたくせに」

彼の伴侶は、いまではひとの声や耳が捕らえる音と同じくらいに明瞭な『声』で言葉を紡ぐのだ。

「うん。本当はね。だって、そんなことしたくなくなるぐらい、あそこは居心地よかったんだよ。でもね、閉じこもっているばかりだったら、多分あの里にも寿命が訪れてしまうと思うんだ。おれはもともと、こっちの住人だから、説得力あるかどうかはわかんないけど……冒険者第一号になれたらいいな……とか、思っちゃって」

欲張りかなぁ――とつぶやいたファヴランに、藤の化身の木霊の美女はかぶりをふった。

「そんなことないよ。きっと、そんなことはない」

言葉には力が宿るのだという。

人間以上にそうした世界に近しい存在の放つ言葉は、それだけで力を帯びるのかもしれない。そうして、歴史に埋もれた小さな隠れ里は、この先幾世紀にも渡り、秘められたる存在でありつづけたのである――。

あとがき

なにやら長いこと、日の射さない穴蔵にうずくまって過ごしていたような気がいたしますがお久しぶりです。

ほんとに久しぶりに、全編書き下ろしの本を、みなさまにお届けすることがかないました。長いこと、それができなかった理由はいろいろあるわけですが、一番の理由は、冬にひきこんだ大風邪と、その治りかけに小指を捻挫したことです。

これまでも、何度も風邪もインフルエンザも経験したことありましたが、今回ほど最悪な体験したことはありませんでした。

なにしろ、三日間というもの、特定の水分以外、胃が受け付けないという、強制的絶食状態……ええ、強いられました。下手に食べ物体に供給しようとしたら、拒絶反応示して大変という……。

三日後、ようやく体が楽になったと、そこで初めて体温計を使って愕然——以前、体温計ったら四十一度超えててパニック起こして以来、精神衛生のためになるべく体温計らなくなってたんです——電子体温計の表示は三十八度四分でした。三十八度四分で楽になったと感じるだ

なんて……いったい、一番ひどい時期、わたしの熱は何度だったのでしょう？

おまけに、ようやく熱も下がり、なんとかものを食べられる状態に戻ったとたんの小指の捻挫！　たかが小指と侮るなかれ。普段ほとんど意識しませんが、小指が使えないだけで、あんなに不自由な思いをしようとは。ほかの指に力を入れただけでずきんっ、ですからね。

ただ、時間に余裕をいただけたおかげで、今回は好きなことを好きに書かせていただきました。

精神的にきつい時期もありましたが、これも新たな心境で作品を書くための肥やしだったのかも。そう思えばこれも幸運ですよね。

結果的に休んでしまった時期のことも含めて、これから頑張って書いていきたいと思っております。

今回も多大なるご迷惑をおかけしました挿し絵の山本鳥尾さんや関係者の方々には、この場をお借りし、お詫びいたします。

さて、次こそは、『天を支える者』の三巻をお届けしたいところです。それでは——。

平成十七年　桜も満開のころ

前田　珠子

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
蒼の組木箱

COBALT-SERIES

2005年5月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著　者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2005　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600540-9 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳





9784086005401

ISBN4-08-600540-9

C0193 ¥419E

1920193004199

定価 本体419円＋税



コバルト文庫